2.椋ノ木遺跡第９・10次発掘調査報告

はじめに

椋ノ木遺跡は京都府相楽郡精華町大字下狛小字椋ノ木・神ノ木他に所在する縄文時代から中世の集落遺跡である。椋ノ木遺跡の包蔵地の大部分が現在の木津川上流浄化センター敷地内に含まれる。発掘調査は、木津川上流浄化センター関連の建設工事に伴って平成７年度に実施した調査から数えて今回報告する平成23年度調査まで10次にわたる調査が実施された(付表)。

今回報告する平成22・23年度の発掘調査は、木津川上流浄化センター（水処理施設)増設工事に先立って京都府流域下水道事務所の依頼により実施した。

平成22年度調査の整理報告は村田・中川が行い、平成23年度調査の整理報告は中川・山﨑が行った。現地調査にあたり、京都府教育委員会、精華町教育委員会ならびに木津川上流浄化センター、地元舟区・里区・西北区の方々には多大なご助言・ご協力を得た。記して感謝します。

なお、調査に係る経費は、全額京都府流域下水道事務所が負担した。

〔調査体制等〕

平成22年度調査(第９次調査)

現地調査責任者　調査第２課長　肥後弘幸

調 査 担 当 者　調査第２課主幹調査第３係長事務取扱　石井清司
調査第３係専門調査員　竹井治雄・石尾政信
同　調査員　村田和弘
調査第１係主査調査員　柴　暁彦
調査第２係調査員　古川　匠

調 査 場 所　相楽郡精華町大字下狛小字椋ノ木・神ノ木他

現地調査期間　平成22年８月20日～平成23年３月11日

調 査 面 積　2,500㎡

平成23年度調査(第10次調査)

現地調査責任者　調査第２課長　水谷壽克

調 査 担 当 者　調査第２課調査第２係長　岩松　保
同　主任調査員　中川和哉
調査第３係専門調査員　石尾政信
同　調査員　山﨑美輪

調 査 場 所　相楽郡精華町大字下狛小字椋ノ木・神ノ木他

現地調査期間　平成23年７月25日～ 12月16日

調　査　面　積　1,300㎡

これまでの調査と周辺遺跡

椋ノ木遺跡は三重県を源流とする一級河川である木津川の左岸にあたり、自然堤防上に立地する縄文時代から中世に至る複合遺跡である。これまでの調査で出土した最も古い土器は、縄文時代中期末の北白川Ｃ式土器である。そのほかに、沈線文系の後期の土器片、晩期滋賀里Ⅲa式、船橋式土器、長原式土器が出土している。第５次調査では翡翠製の大珠が１点出土している。また、縄文時代の石器である石匙が精華町大福寺遺跡・畑ノ前遺跡でも出土していることから、今後、町内において、さらに縄文時代の遺跡が増える可能性がある。

遺跡内では遺構に伴うものではないが、弥生時代前期末の土器片が出土している。第９次調査では溝内から前期の土器片が出土している。同じ時期の遺物は、椋ノ木遺跡北側の河川敷内にある百久保地先遺跡においても土器が出土しており、現在の木津川に近接した場所に弥生時代前期の集落が存在していた可能性が指摘できる。弥生時代中期の遺物は、椋ノ木遺跡第６次調査で検出した溝中から中期後葉の土器が後期の土器とともに出土している。同時期の遺跡には畑ノ前遺跡、大福寺遺跡、乾谷遺跡、祝園遺跡、森垣外遺跡があり、遺跡は丘陵上、丘陵裾部、河川隣接地の３種類の立地の違いが認められる。後期の遺物としては、椋ノ木遺跡第６・９次調査で同一の溝から土器片が出土している。

古墳時代の前期から中期前葉にかけての竪穴式住居跡が、第４次調査の８トレンチ及び隣接する第５次調査地で発見されている。また、今回報告の第９次調査でも竪穴式住居跡が２棟検出されている。この時期の集落は、遺跡の中でも木津川に近い東側に偏在している。町内では柿添遺跡で、遺物の出土を見ている。その他の集落遺跡の様相は不明であるが、前期から中期前葉の古墳は鞍岡山古墳群、平谷古墳群、北尻遺跡などでみられる。三角縁神獣鏡が多量に出土した古墳時代前期の前方後円墳として有名な椿井大塚古墳が木津川対岸に存在している。

古墳時代中期末から後期にかけては､椋ノ木遺跡の北東部で古墳がまとまって検出されており、古墳群が形成されている。古墳の溝と考えられる遺構から埴輪片も出土している。椋ノ木遺跡に

付表　椋ノ木遺跡調査地一覧

調査次数	調　査　期　間	調査区数	調査面積	文　　献
1	平成７年11月21日～平成８年２月27日	2	1,200㎡	京都府遺跡調査概報第81冊（1998）
2	平成８年５月28日～平成９年２月27日	9	4,700㎡	
3	平成９年５月６日～平成９年11月７日	5	2,850㎡	京都府遺跡調査概報第85冊（1998）
4	平成12年12月18日～平成13年３月５日	2	1,100㎡	京都府遺跡調査概報第101冊（2001）
5	平成13年６月13日～平成14年２月１日	1	3,400㎡	京都府遺跡調査概報第105冊（2002）
6	平成14年６月５日～平成15年２月10日	1	3,200㎡	京都府遺跡調査概報第110冊（2004）
7	平成16年８月18日～平成16年10月１日	1	300㎡	京都府遺跡調査概報第115冊（2005）
8	平成21年11月26日～平成22年３月４日	1	500㎡	京都府遺跡調査報告集第143冊（2011）
9	平成22年８月20日～平成23年３月11日	1	2,500㎡	本報告
10	平成23年７月25日～平成23年12月16日	1	1,300㎡	

第１図　これまでの調査地と今回の調査地位置図

1．椋ノ木遺跡・椋ノ木古墳群
2．百久保地先遺跡
3．石ヶ町遺跡
4．里遺跡
5．里廃寺
6．下狛城館跡
7．拝殿遺跡
8．鞍岡山遺跡
9．鞍岡神社遺跡
10．鞍岡山古墳群
11．大福寺遺跡
12．下馬遺跡
13．片山遺跡
14．柿添遺跡
15．城山遺跡
16．城山古墳群
17．北稲遺跡
18．国名平古墳群
19．西垣内遺跡
20．祝園神社遺跡
21．中垣内遺跡
22．城ノ内遺跡
23．南稲遺跡
24．北尻遺跡
25．祝園遺跡
26．森垣内遺跡
27．春日神社遺跡
28．西ノ口遺跡
29．薬師寺跡
30．平谷古墳群
31．薬師山遺跡
32．山路遺跡
33．宮ノ口遺跡
34．白山遺跡
35．屋敷田遺跡
36．桑町遺跡
37．宮ノ下遺跡
38．佐牙垣内遺跡
39．三山木廃寺
40．芝山遺跡
41．木原城館跡
42．煙道遺跡
43．古屋敷遺跡
44．前川原遺跡

第２図　調査地位置及び精華町内主要遺跡図

おいては、同時期の遺構は古墳以外のものは発見されていない。町内における同時期の集落として、森垣外遺跡が注目される。大型の住居跡や方形区画などの存在から在地首長の居住地と考えられる。また、韓式土器の存在などが注目されている。後期の古墳には丘陵部に立地する平谷古墳群、鞍岡山古墳群、畑ノ前古墳群、畑ノ前東古墳群、城山古墳群などがあるが、出土遺物の年代観から、椋ノ木遺跡の古墳より新しい時期に造られたことがわかる。

椋ノ木遺跡内では、白鳳期の木津川市高麗寺と同じ型式の軒丸瓦が中世の遺構から出土している。遺跡内では白鳳期の遺構は検出されていないが、これまでの調査では、どの調査地点でも少量ではあるが奈良・平安時代と考えられる布目瓦片が出土し、遺跡全体に広く分布している状況である。椋ノ木遺跡内では、奈良時代に属すると考えられる鬼瓦片、平安時代後半から中世にかけての巴文軒丸瓦が出土している。瓦の出土量はわずかで、本格的な瓦葺建物が周辺に存在していた可能性は低い。遺跡から西に約400m離れた場所には里廃寺があり、高麗寺系の軒丸瓦や平城宮式・恭仁宮式の瓦が出土していることから、椋ノ木遺跡で出土する少量の瓦は里廃寺からもたらされた可能性がある。そのほかにも、畑ノ前遺跡では稲蜂間氏の館と想定されている館跡が検出されている。

平安時代後期に入ると、第６次調査地で東西６間以上、南北２間の身舎に南北に庇がつく大型の建物が検出されている。今回報告する第９次調査においても大型の建物が検出されており、その性格が注目される。町内では、椋ノ木遺跡から西に約１km離れた位置に下狛廃寺があり、発掘調査で平安時代後期の瓦が出土している。

平安時代末から鎌倉時代にかけての遺構は椋ノ木遺跡で多く検出されており、その範囲は発掘調査を実施した地区全体に及んでいる。遺構には掘立柱建物跡、土壙墓、耕作溝、坪境溝がある。現在残されている地割に沿った方向の溝が確認できる。中世の遺構は、14世紀中頃以降のものは認められなくなる。集落は別の場所に移り、耕作地として利用されたものと考えられる。

椋ノ木遺跡から約500m南には祝園神社が存在する。神社は大同元(806)年の記録が「新抄格勅符抄」に記載されており、平安時代初期から存在していたことがわかる。その後、もみじの名所として「更級日記」に登場し、平安時代末の歌人藤原定家にも詠まれ、「新古今和歌集」に収録されている。祝園神社には神宮寺である薬師寺が併設されており、明治期の神仏分離運動の中、他寺へ移された平安時代前期の菩薩形をした薬師如来立像が祀られていた。椋ノ木遺跡の平安時代から中世にかけての集落は、祝園荘に存在する祝園神社・薬師寺と同時代に共存していた。

平安時代以降に関しては、歴史地理学者の足利健亮氏によって、木津川沿いに祝園神社の脇を通って京都・大阪方面から奈良にいたる道路が復元されている。

近世に入ると、祝園地区と対岸の木津川市平尾を結ぶ開の渡し、下狛舟と対岸の木津川市綺田を結ぶ藪の渡しがあり、郡山街道と奈良街道を結んでいた。椋ノ木遺跡はそれら２つの渡しの中間に位置している。また、現在の木津川上流浄化センター敷地の中央を東西に走る道は、遺跡西方にある里集落の中軸から真東西方向に伸び、木津川の浜に至る「浜道」として利用されてきた。

（中川和哉）

（１）第９次調査（平成22年度）

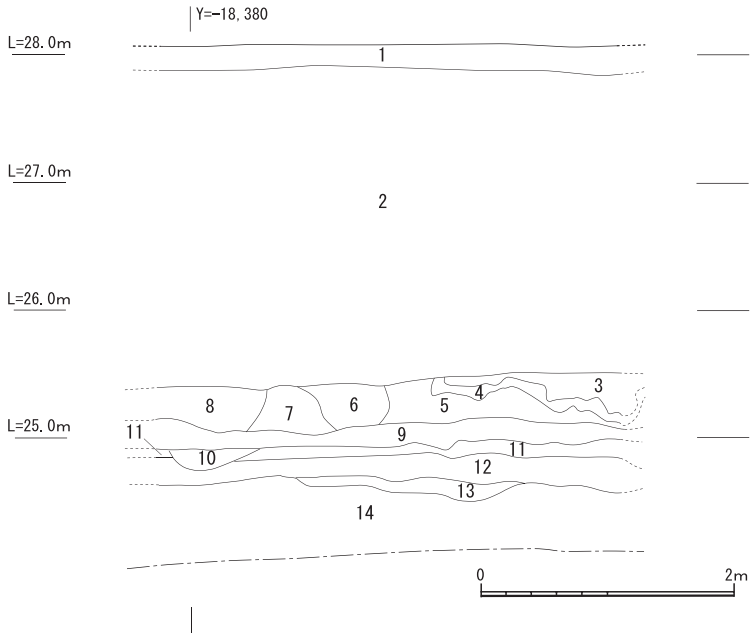
１．調査の概要

第９次調査は、木津川上流流域下水道木津川上流浄化センター内の精華町立体育館・コミュニティセンターの東隣にあたり、水処理施設の増設に伴う事前の発掘調査である。

現地調査では、平成22年２月５日に現地説明会を実施し、146名の参加を得た。整理作業および報告書作成は平成23年度に実施し、中川と村田が分担して執筆した。

第９次調査地は、平成14年度に実施した第６次調査地の東隣接地である。調査は、遺構面までを重機で掘削した。現地表面である標高約28mから、標高約25.5mまでは現代の造成土が堆積していた。その直下では浅黄褐色粘質土（第３図第５・７層）の堆積があり、浄化センター建設前の耕作土を確認した。その下層の遺物包含層であるオリーブ黄色粘質土（第９層）を除去すると、標高約25m付近で平安時代から鎌倉時代にかけての遺構面を検出した。遺構を確認した面で人力掘削による遺構検出作業を実施した。この遺構面から、さらに0.1～0.4m掘り下げたところで、下層の遺構面を確認した。上層（第12層上面）では平安・鎌倉時代、下層（第14層上面）では古墳時代以前縄文時代までの遺構を検出した。

平安時代から鎌倉時代にかけての遺構面を、第１遺構面として調査した。検出した遺構は、耕作溝や溝、柱穴、土坑、井戸などである。また、掘立柱建物跡２棟や柵列を復元することができた。

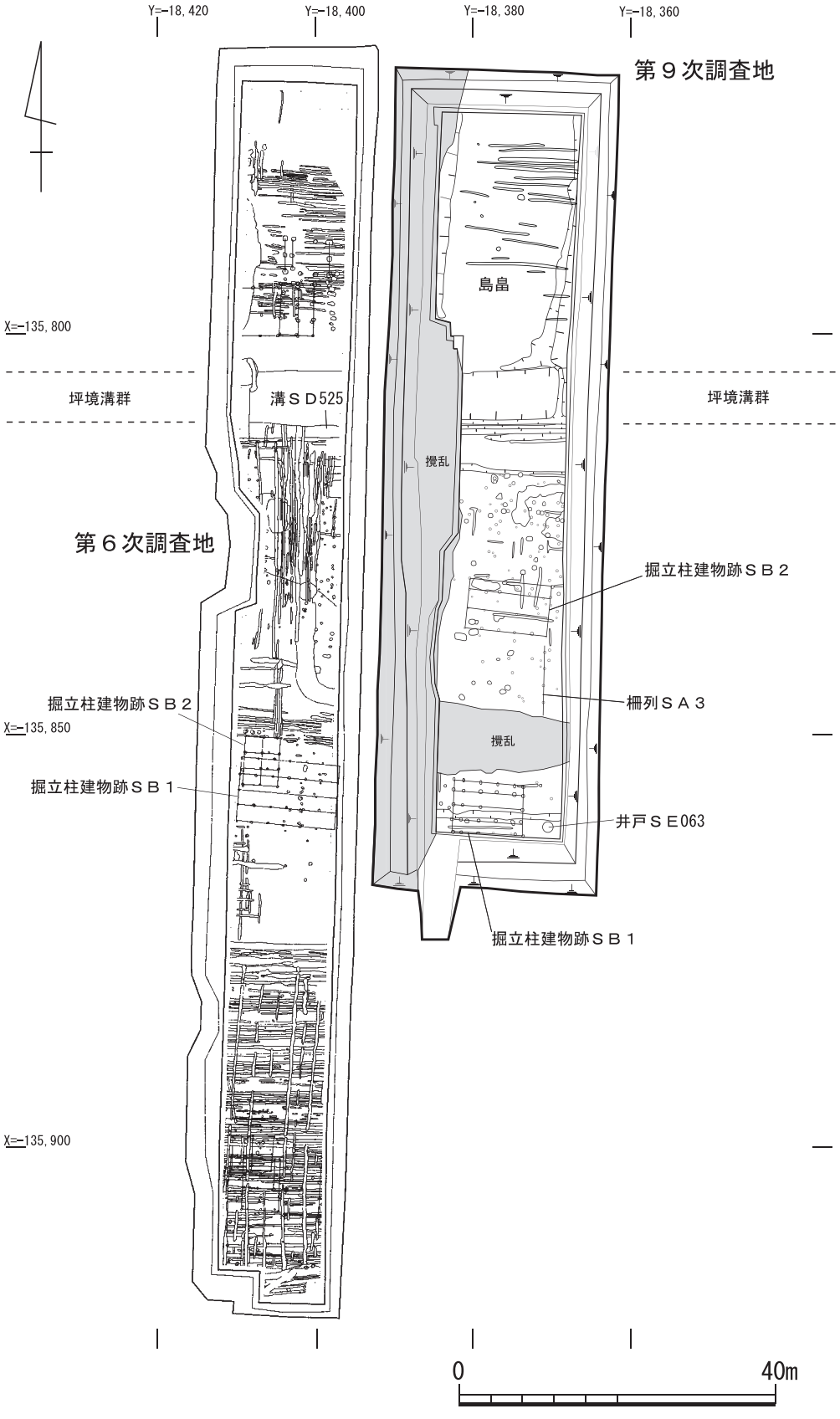


１．砕石
２．現代造成土
３．明黄褐色（2.5Y7/6）粘質土
４．明黄褐色（2.5Y6/6）砂質土
５．浅黄色（2.5Y7/3）粘質土
６．明黄褐色（2.5Y7/6）粘質土（砂を多く含む）
７．浅黄色（2.5Y7/3）粘質土
８．明黄褐色（2.5Y7/6）粘質土
９．オリーブ黄色（5Y6/3）粘質土
10．オリーブ黄色（5Y6/3）粘性砂質土
11．黄褐色（2.5Y5/3）粘質土
12．緑灰色（10G5/1）粘性砂質土
13．にぶい黄色（2.5Y6/4）粘性砂質土
14．明黄褐色（2.5Y7/6）砂

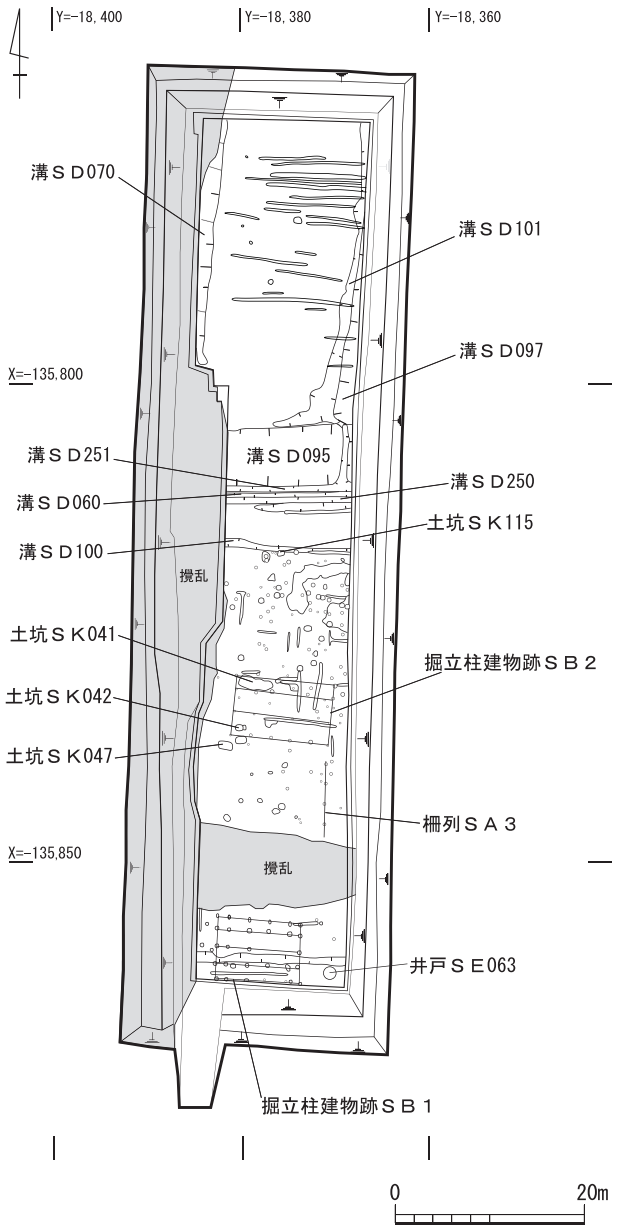
第３図　調査地北壁土層断面図

第１遺構面の調査終了後、下層遺構の調査を実施した。縄文時代晩期、弥生時代後期、古墳時代前期・中期の遺構を同一面で検出した。この遺構面を第２遺構面とし調査を実施した。調査地の北部では、第１遺構面から第２遺構面まで約0.4mの深さがあり、第２遺構面は南に向かって上がっており、南端部では0.1m程度であった。重機でこの土を掘削後、人力による遺構精査を行った。

縄文時代の遺構では、晩



第４図　第６・９次調査調査区　第１遺構面



第５図　第１遺構面遺構配置図

期の遺構と判断される焼土坑１基と土器を埋納した土坑の２基を検出した。弥生時代の遺構では、調査地北部で後期の遺物が出土した東西方向の大溝を検出した。古墳時代では、前期と判断される竪穴式住居跡２基や中期末の古墳４基を検出した。

２．検出遺構

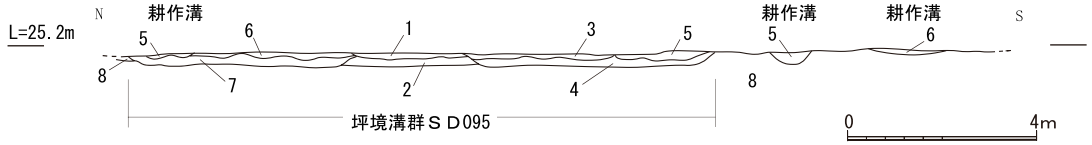
（１）第１遺構面

平安時代から鎌倉時代までの遺構を検出し、平安時代の掘立柱建物跡２棟や柵列、井戸、鎌倉時代以降の土坑や溝、条里制地割に由来する溝群や耕作溝などを検出した。

１）中世の遺構

島畠　調査地北側では、標高24.9～25.1ｍの高さで、西辺を南北方向の深さ0.3ｍを測る溝ＳＤ070、東辺を南北方向で深さ0.38ｍの溝ＳＤ097で、南辺を東西方向の溝ＳＤ095に囲まれた区画を確認した。区画内では耕作溝群のみを検出した。耕作溝のほとんどは東西方向の溝であり、幅約15cm、深さも約２～５cmと浅く、後世の削平によって耕作面が消失している可能性が認められた。また、柱穴などの遺構も確認できないことから、この区画内は耕作地であった可能性が高い。坪境溝群ＳＤ095より北側に関しては、周囲を溝状に掘ることで区画し、掘った土で周囲より高く盛り上げて島畠を造り、増水の対策を施し耕作地として利用していたと推測する。ＳＤ070の溝の底は確認できなかったが、溝ＳＤ097については最も深い所で検出面から約40cmあり、島畠の盛り土については削平を受けており不明であるが、耕作溝の残存する深さから推測すると、周囲の溝と耕作面では50cmの高低差があったと思われる。溝ＳＤ070･097からは､小片であるが12～14世紀の土器片が少量出土しているが、島畠を造った時期は不明である。溝ＳＤ101は、最大幅で1.9ｍ、深さ0.15ｍの浅い溝であり、溝ＳＤ097や坪境溝群ＳＤ095の上面で検出した東西方向の耕作溝より新しい時期の溝である。

坪境溝群ＳＤ095（第６図）　この溝群は、幅0.5～２ｍを測る東西方向の溝が何度も掘り返さ



１．黄色(2.5Y8/6)細砂(白色砂が多く混じる)
２．青灰色(10BG5/1)粘性砂質土
３．黄色(2.5Y8/6)細砂
４．青灰色(10BG5/1)粘質土
５．淡黄色(2.5Y8/4)細砂(白色砂が多く混じる)
６．にぶい黄色(2.5Y6/3)砂質土
７．青灰色(10BG6/1)砂質土
８．青灰色(10BG5/1)粘質土(白色砂が多く混じる)

第６図　坪境溝ＳＤ095ほか土層断面図

れた溝の集合体で、幅6.2mの範囲に集中している。これらの溝群は、第６次調査で確認した東西方向の坪境溝の東延長部にあたる。上面が削平されていることから、溝の新旧関係は不明である。これらの溝群は、相楽郡条里遺構の坪境の溝群であると考えられる。

土坑ＳＫ041　東西1.2m、南北0.8m、深さ0.15mを測る隅丸長方形を呈する土坑である。土坑内から土師器・瓦器の小片や長さ13.6cmの釘状の鉄製品１点が出土した。

土坑ＳＫ042(第７図)　東西0.83m、南北0.7m、深さ0.3mを測る。土坑内からは瓦器皿３枚、土師器皿３枚が２列に並べられた状態で出土した(第20図17 ～ 19)。土師器の皿は土坑内の北東側に東西方向に並べられ、その南側に瓦器の皿(同20 ～ 22)が並べられている。これら出土した遺物から、12世紀中頃の遺構と考えられる。この遺構の性格については不明である。土坑内には棺痕跡等は確認できなかったが、人を葬る墓や何らかの儀式が行われた土坑であった可能性が考えられる。

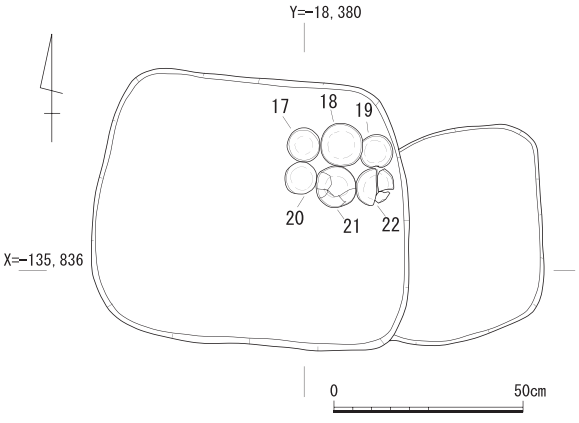
土坑ＳＫ047　東西3.6m、南北1.3m、深さ0.2mを測る隅丸長方形を呈する土坑である。土坑内から土師器や瓦器の小片が出土した。また､土坑の埋土には拳大の河原石が多く混入していた。

溝ＳＤ060　幅0.4m、深さ0.3mを測る東西方向の溝である。埋土からは土師器・瓦器片のほかに、外面に黒漆、内面に赤漆が塗られた漆器椀の破片が出土した。

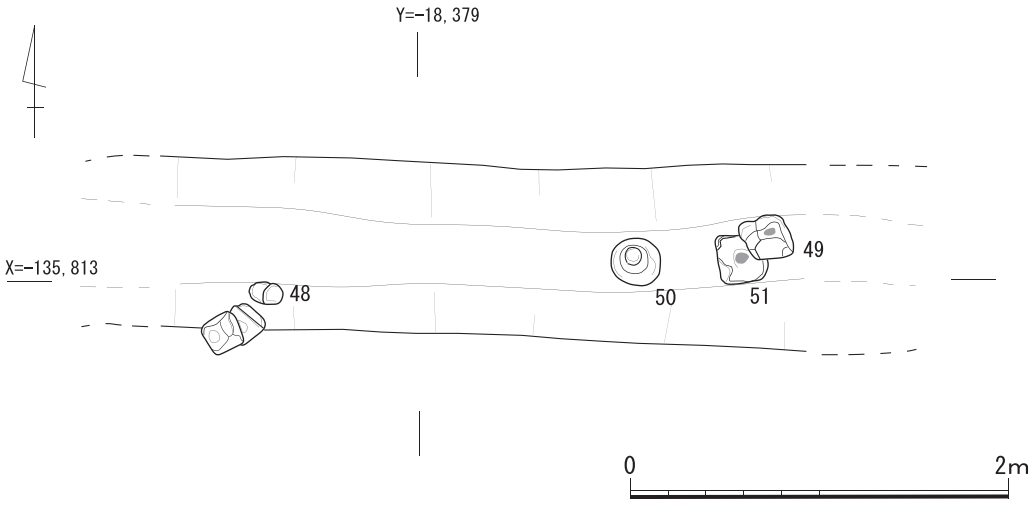
溝ＳＤ100　幅0.5m、深さ0.4mを測る東西方向の溝である。埋土から土師器・瓦器片などが出土した。

溝ＳＤ250　幅0.9m、深さ0.5mを測る東西方向の溝である。埋土から土師器・瓦器片などが出土した。

溝ＳＤ251(第８図)　幅0.5m、深さ0.7mを測る東西方向の溝である。溝の底部には拳大の河原石が多量に堆積し、西端部の上面や溝底では五輪塔の空輪、火輪、水輪などが出土した。この溝は、坪境溝群ＳＤ095の南に隣接し、他の耕作溝に比べると溝が深く、河原石や五輪塔、羽釜などの土器片が出土している。この溝は耕作溝ではなく、坪の北端部の区画もしくは排水の溝



第７図　土坑ＳＫ042遺物出土状況図



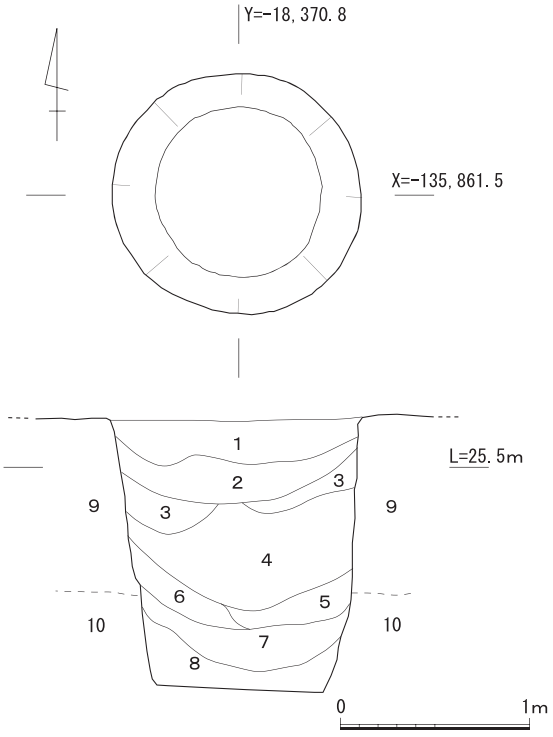
第８図　溝ＳＤ251五輪塔出土状況図

であったと考えられる。この溝の廃絶時に投棄されたものと考えられる。溝内には、五輪塔の石材と思われる凝灰岩の破片が多く含まれていた。第６次調査の溝ＳＤ525につながる可能性がある。

２）平安時代の遺構

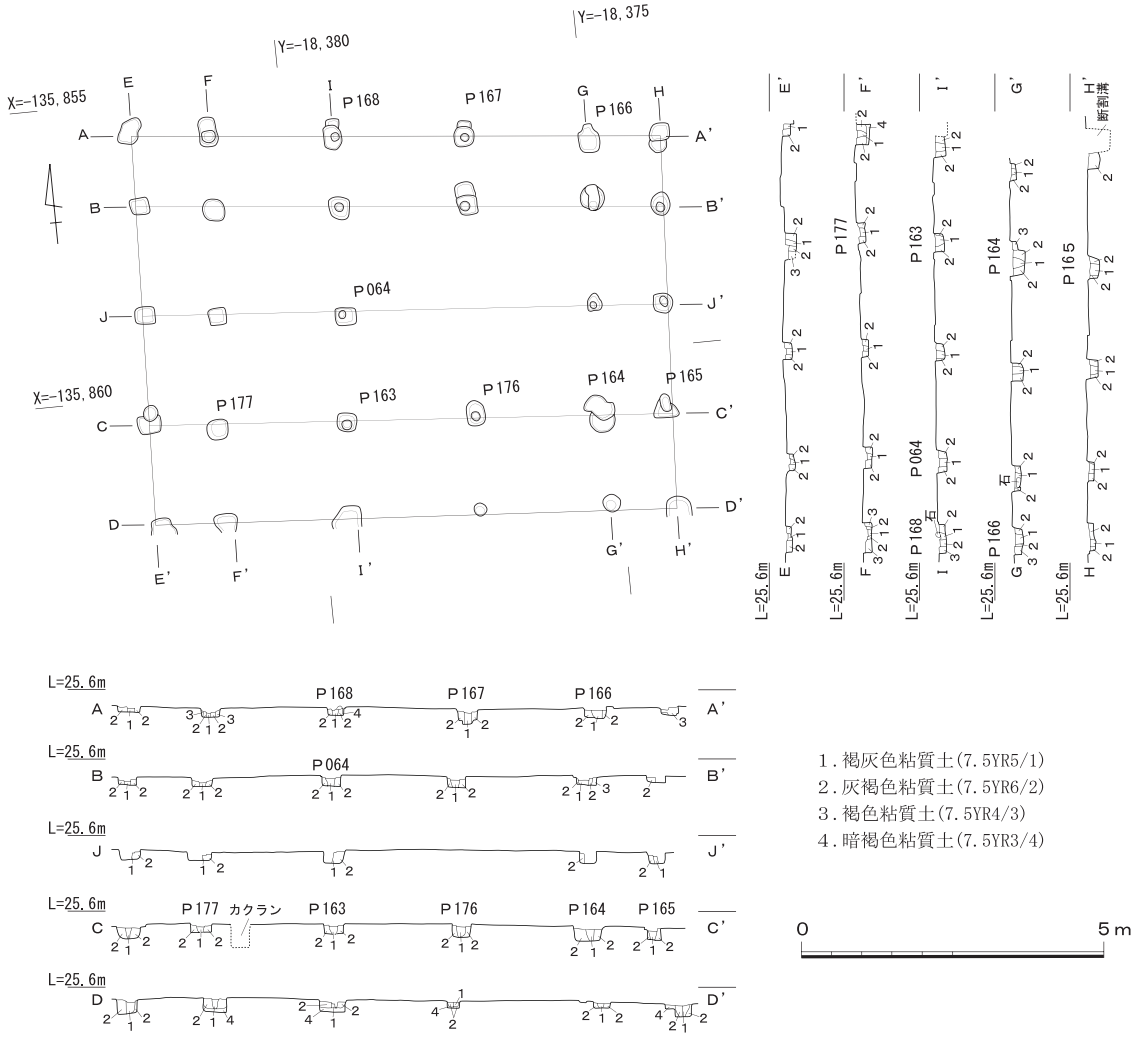
井戸ＳＥ063（第９図）　掘立柱建物跡ＳＢ１の東側で検出した直径1.3m、深さ1.45mの円形を呈する素掘りの井戸である。井戸枠や曲物等の痕跡は確認できなかった。井戸の底は粘土層（青灰色粘土）で終わっており、水が湧く状況ではなく、水溜として利用されていたと考えられる。第１層の明黄褐色粘質土や第２層のにぶい黄色粘土から、少量の瓦器片が出土したが、後世の耕作溝等の遺物が混入したと考えられる。井戸の時期は不明であるが、掘立柱建物跡に付随する井戸であった可能性も考えられる。

掘立柱建物跡ＳＢ１（第10図）　トレンチ南端で検出し、東西５間（長さ8.8m）、南北４間（長さ6.9m）を測る。建物を構成する柱穴の掘形は、一辺が30～40cmの隅丸方形を呈し、深さは遺構検出面から25～30cm残っていた。建物は東西棟であり、３間×４間の身舎に南北の２面に１間の庇が付く



1．明黄褐色（2.5Y6/6）粘質土（粗砂混じり）
2．にぶい黄色（2.5Y6/4）粘土（粗砂混じり）
3．灰黄色（2.5Y6/2）粘質土（粗砂混じり）
4．黄褐色（2.5Y5/4）粘質土（粗砂混じり）
5．黄灰色（2.5Y5/1）粘質土（粗砂混じり）
6．黄褐色（2.5Y5/3）粘質土
7．灰色（５Y5/1）粘質土
8．灰オリーブ色（５Y5/3）粘質土（粗砂混じり）
9．にぶい黄褐色（10YR5/4）粘質土
10．青灰色（５BG5/1）粘土

第９図　井戸ＳＥ063実測図



第10図　掘立柱建物跡ＳＢ１実測図

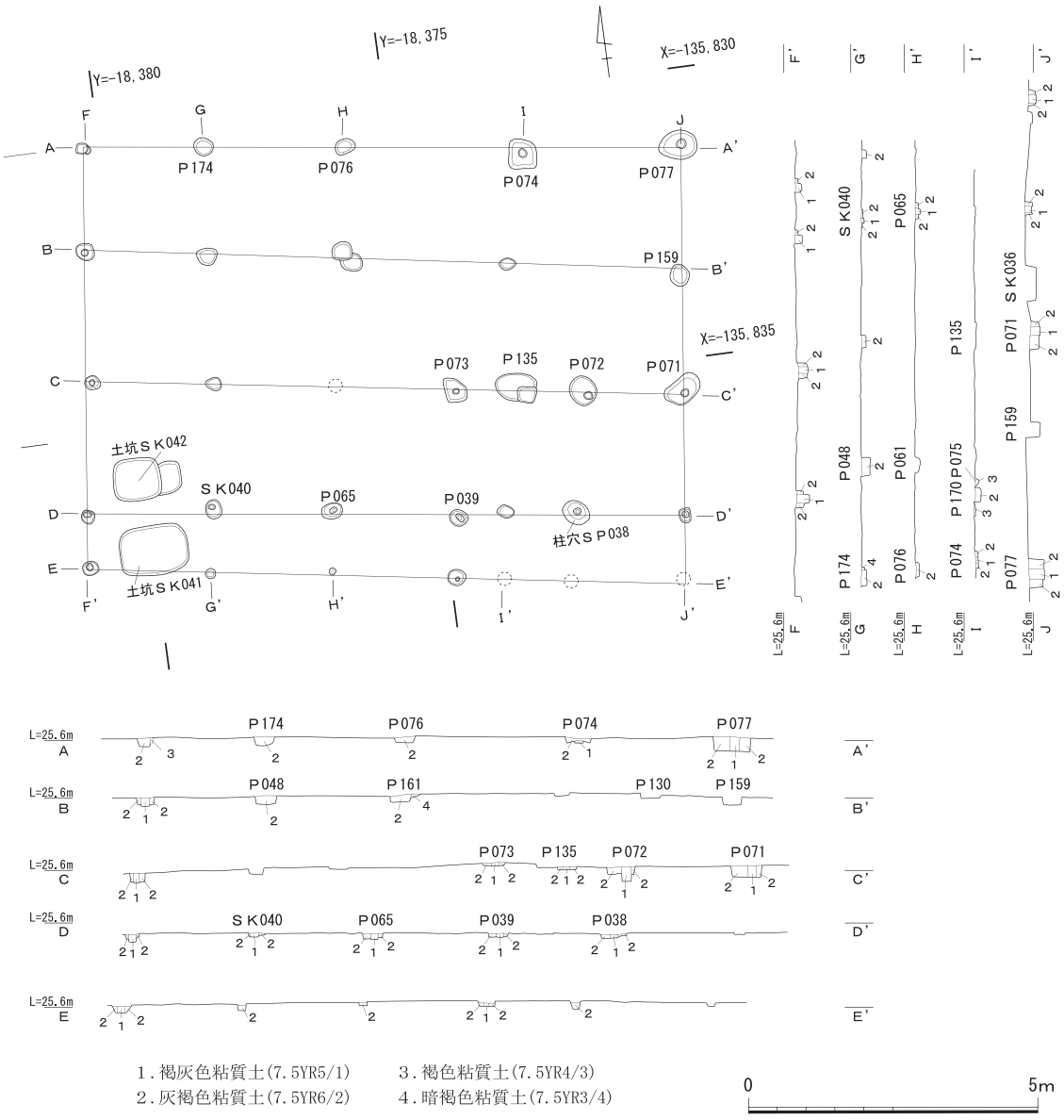
建物であるか、３間×２間の身舎に４面１間の庇が付く建物が想定される。この建物を構成する柱穴からは、建物の時期を示す遺物は出土しなかったが、第６次調査で検出した掘立柱建物跡ＳＢ１と主軸が同じであることなどから、後述のように、ＳＢ２とともに平安時代中期のものと判断する。

掘立柱建物跡ＳＢ２（第11図）　東西５間（長さ13.1m）、南北３間（長さ7.5m）を測る東西棟である。この建物を構成する柱穴ＳＰ038の柱掘形からは、ともに平安時代中期（10世紀中頃）の土師器皿と瓦器皿が出土した（第20図23・24）。今回検出した掘立柱建物跡２棟は、主軸が第６次調査で検出された平安時代中期の掘立柱建物跡と同じ主軸をもつことや、ＳＢ２の柱穴から出土した遺物から、平安時代中期に建てられたものと考えられる。

柵列ＳＡ３　掘立柱建物跡ＳＢ２の南東側で、南北方向に柱穴が４基並び、掘立柱建物跡ＳＢ２の南東隅の柱に取り付くと考えられる。南側は攪乱によって消失しており、確認できたのは、長さ約６m分である。

（２）第２遺構面

縄文時代晩期の土坑や弥生時代の大溝、古墳時代前期の竪穴式住居跡２基、古墳時代中期末の



第11図　掘立柱建物跡ＳＢ２実測図

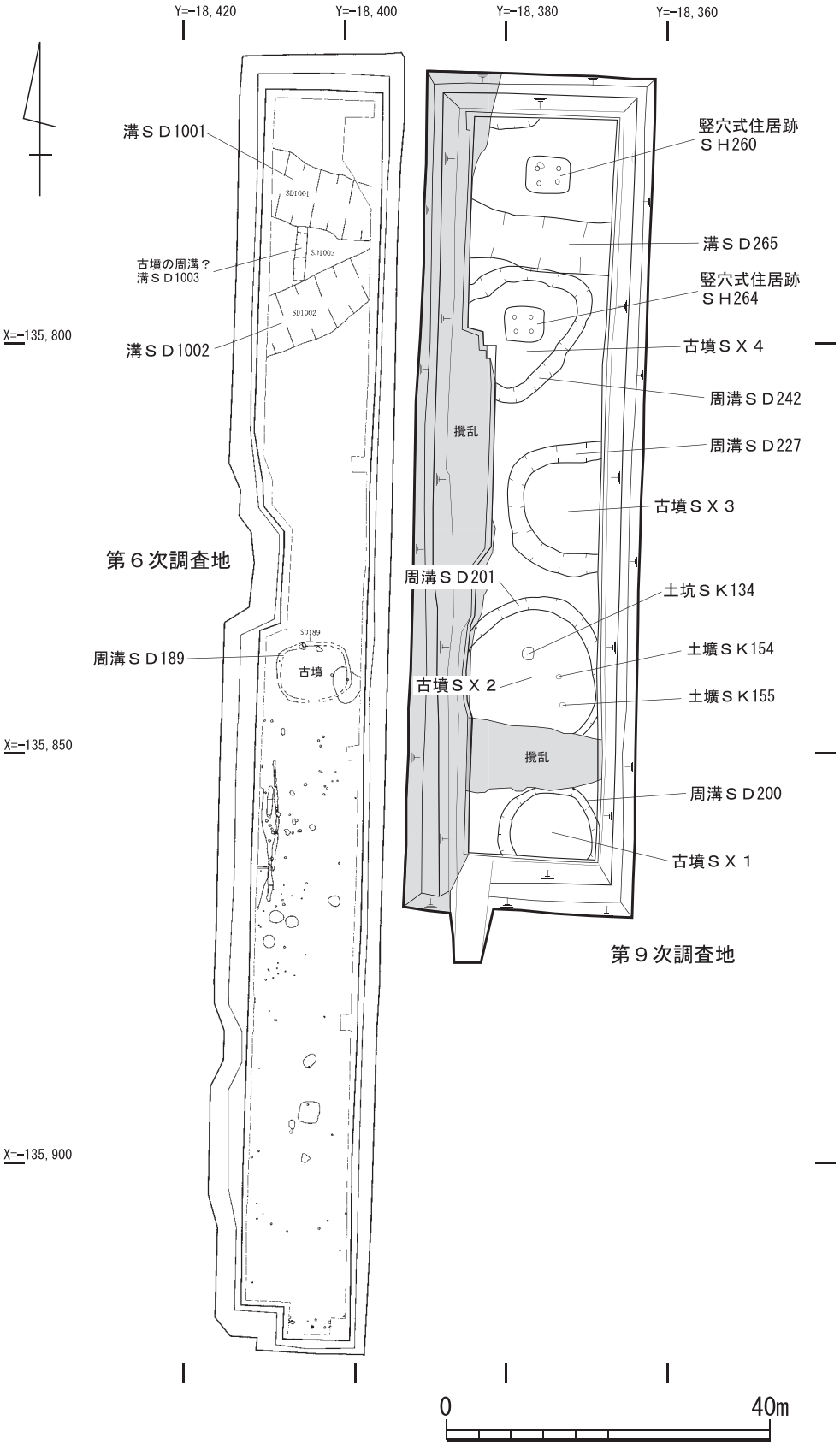
古墳４基などを検出した。なお、古墳の規模や周溝の規模については、後世に削平を受けているため詳細は不明であり、遺構検出時の数値を報告する。

１）古墳時代の遺構

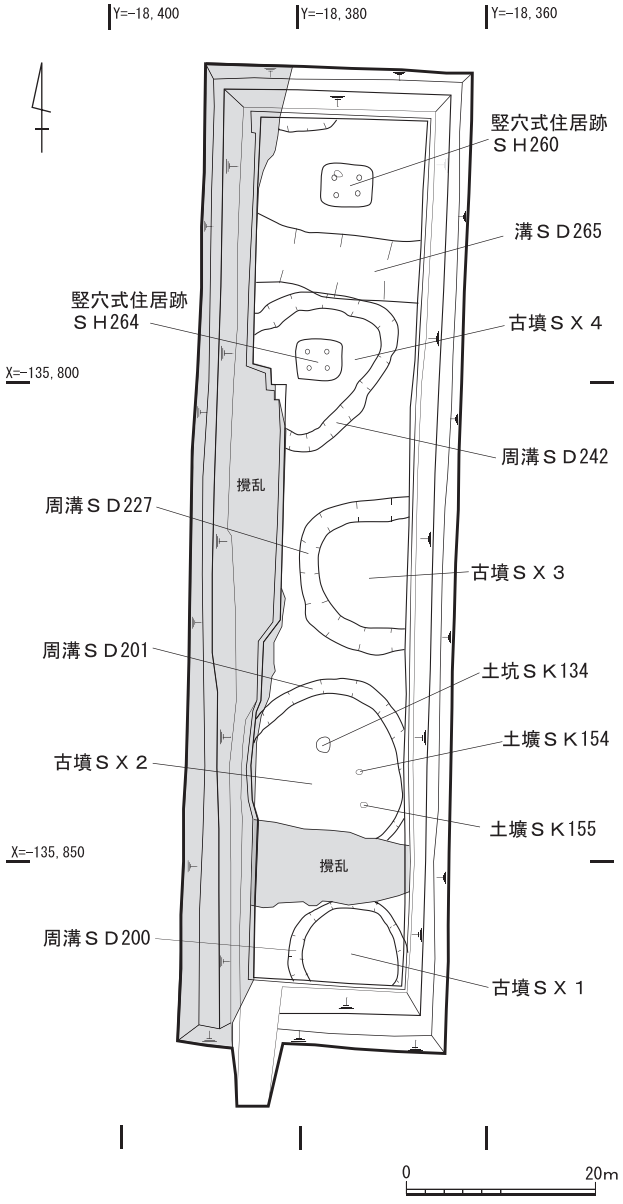
古墳ＳＸ１（第14図）　トレンチの南端部で検出した直径約12mを測る円墳である。墳丘および埋葬施設は、後世に削平されて消失し、周溝のみが残っていた。

周溝ＳＤ200　円形の周溝の南側部分については、平成22年度の調査範囲外に延びている。周溝は幅約1.5m、深さ0.28mを測る。東側の周溝内から、須恵器の高杯とその蓋・杯・瑞などが出土した。西側の周溝内から、土師器の甕・壺などが出土した（第24図52 ～ 65）。遺物は完形に近いものが多く、埋納されていた可能性も考えられる。南側の第10次調査で、この周溝の南半を検出している。

古墳ＳＸ２（第14図）　直径約18mを測る円墳である。墳丘および埋葬施設は後世に削平され、



第12図　第６・９次調査調査区　第２遺構面



第13図　第２遺構面遺構配置図

周溝のみが残っていた。

周溝ＳＤ201　周溝の南側部分が、後世の攪乱によって消失している。周溝は幅約1.8m、深さ約0.25mを測る。周溝内から遺物が西側・北側、東側の３地点にまとまった形で出土した。遺物は古墳１と同じく完形に近いものが多く、埋納されていた可能性が考えられる。出土遺物には、須恵器の高杯・蓋・甕や土師器甕などがある(第25図66～82)。

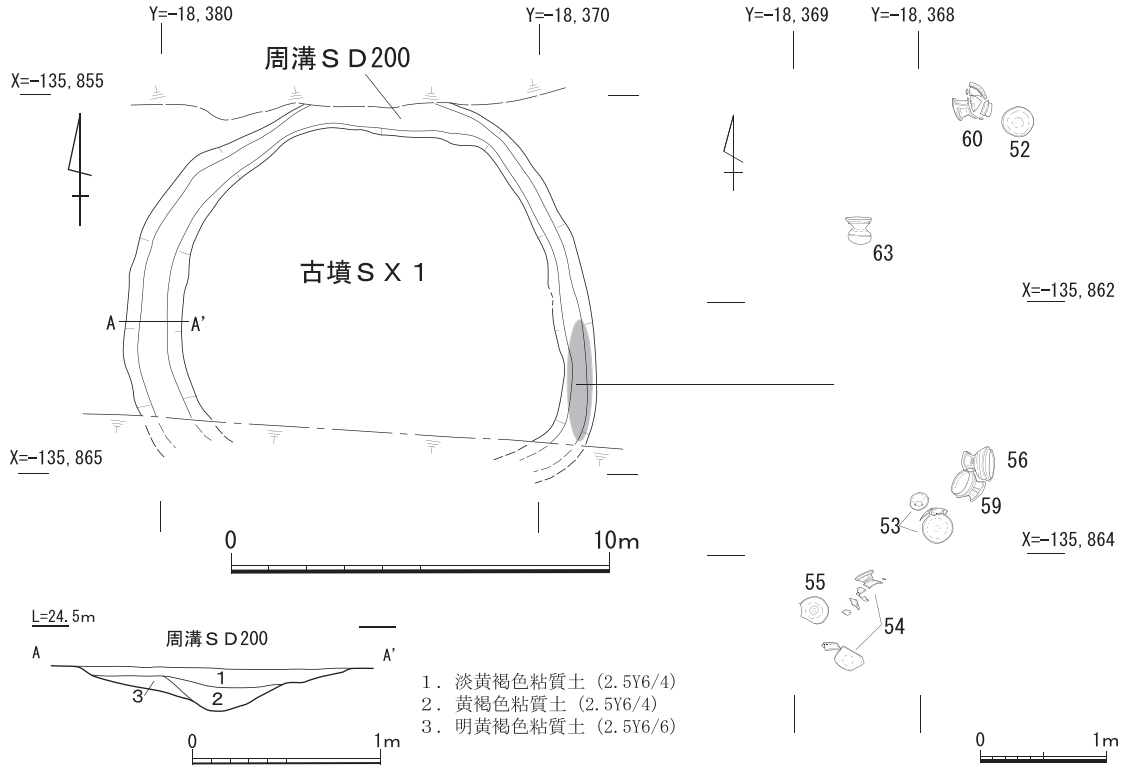
古墳ＳＸ３(第15図)　トレンチの中央部で検出したが、東半部はトレンチ外となる。他の古墳と同じく、墳丘および埋葬施設は後世に削平され、周溝のみが残っていた。東半分は確認できなかったが、この古墳は、直径約13mを測る円墳に復元できる。

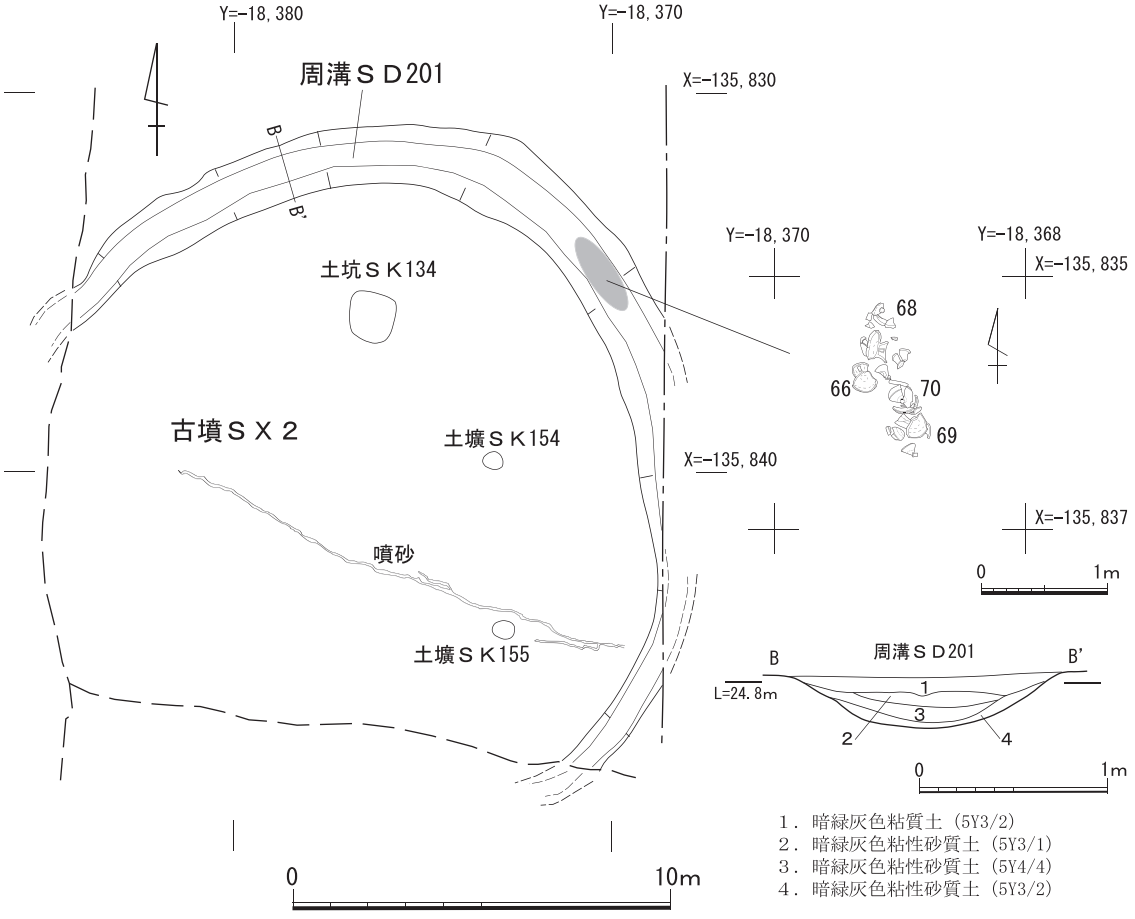
周溝ＳＤ227　円形の周溝の東側部分が今回の調査範囲外に延びている。周溝の幅約2.6m、深さ約0.21mを測る。周溝内から須恵器や土師器の破片が少量出土し、小片であるが円筒埴輪の破片が出土した(第25図85～87)。

古墳ＳＸ４(第15図)　墳丘は後世に削平され、周溝のみが残っていた。ほかの古墳と比べると平面形は歪である。古墳の規模は、南北約16.5m、東西約13.0mを測る。

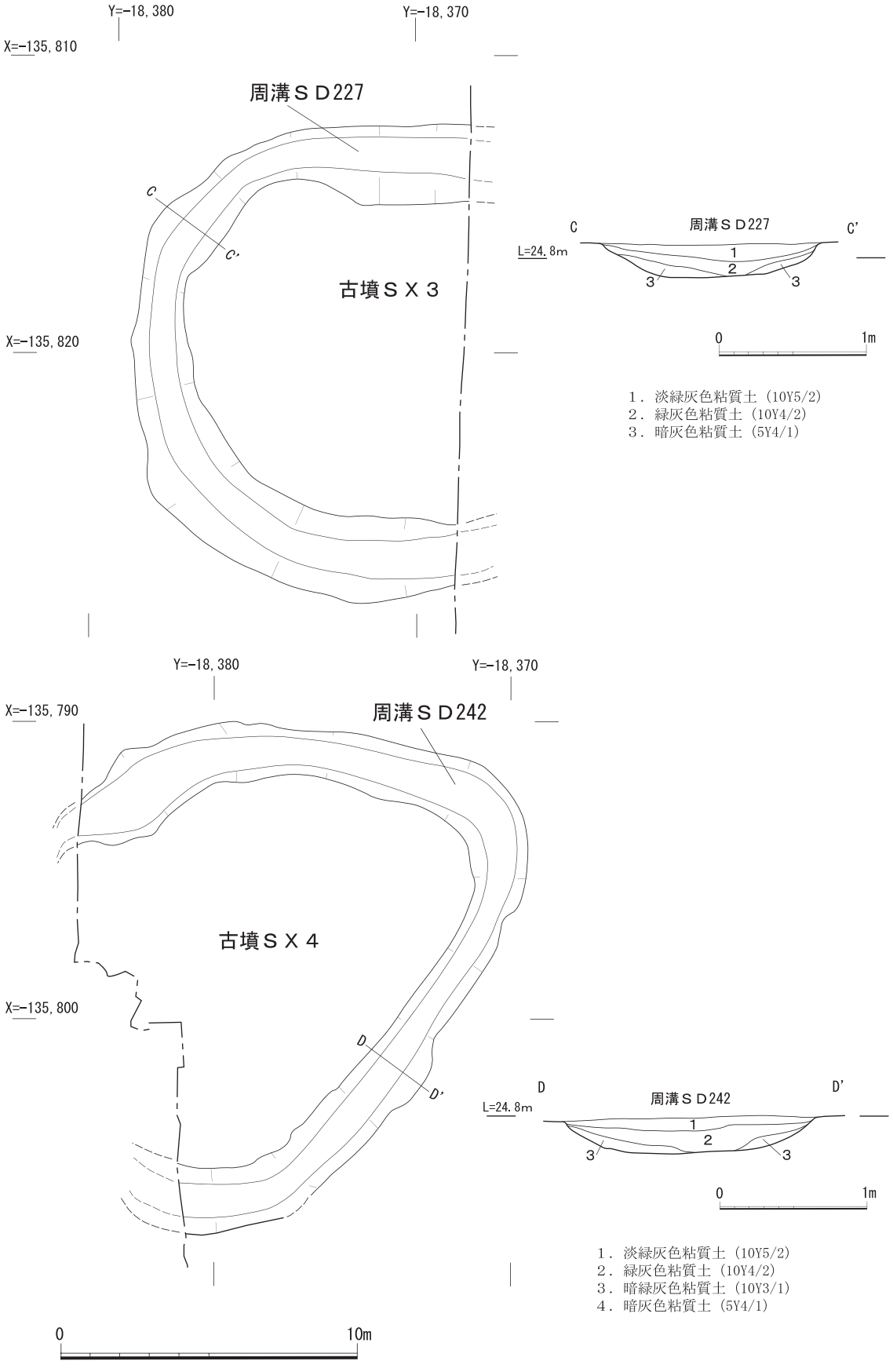
周溝ＳＤ242　周溝の幅約2.0m、深さ約0.15mを測る。ほかの古墳ＳＸ１～３に比べると、周溝の深さは浅く、土器類の出土は少量であるが、円筒埴輪の破片が出土した。古墳ＳＸ１・２の周溝内から出土した土器から、築造時期は古墳時代中期末(５世紀末～６世紀初頭)と考えられる。第６次調査で検出した２基の古墳とほぼ同時期のものである。

竪穴式住居跡ＳＨ260(第16図)　標高24.72mでトレンチの北側で検出した隅丸方形を呈する住居跡で東西約5.1m、南北約4.2mを測る。床面南西部から古墳時代前期の土師器甕の破片が出



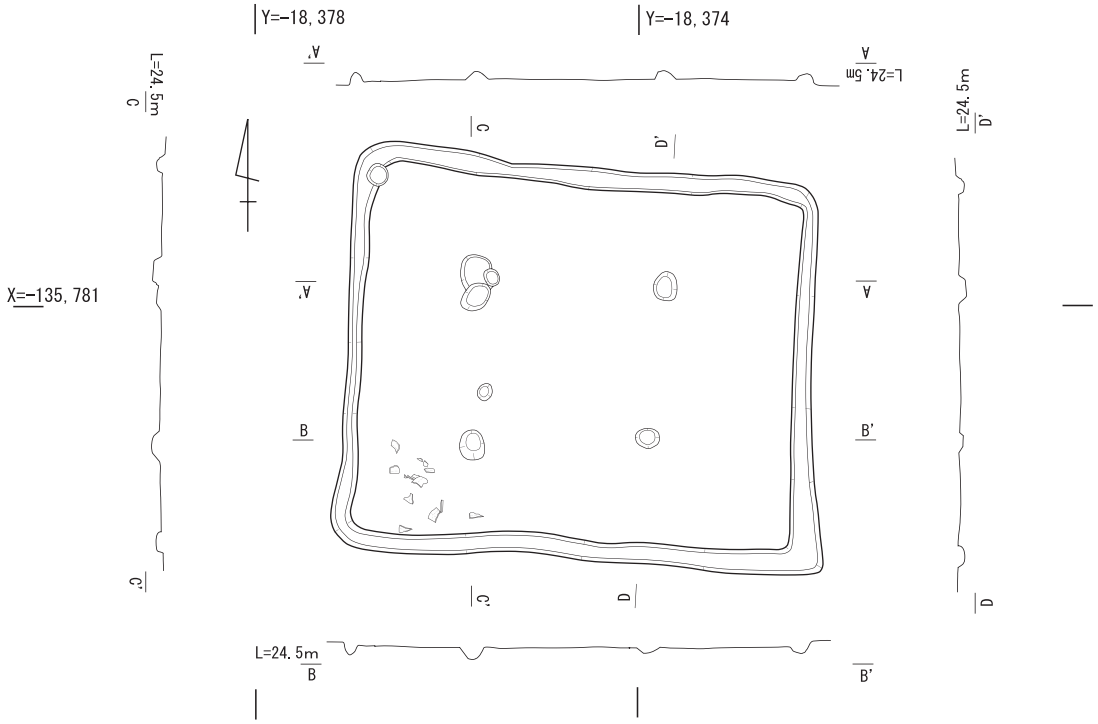


第14図　古墳ＳＸ１周溝ＳＤ200・古墳ＳＸ２周溝ＳＤ201実測図

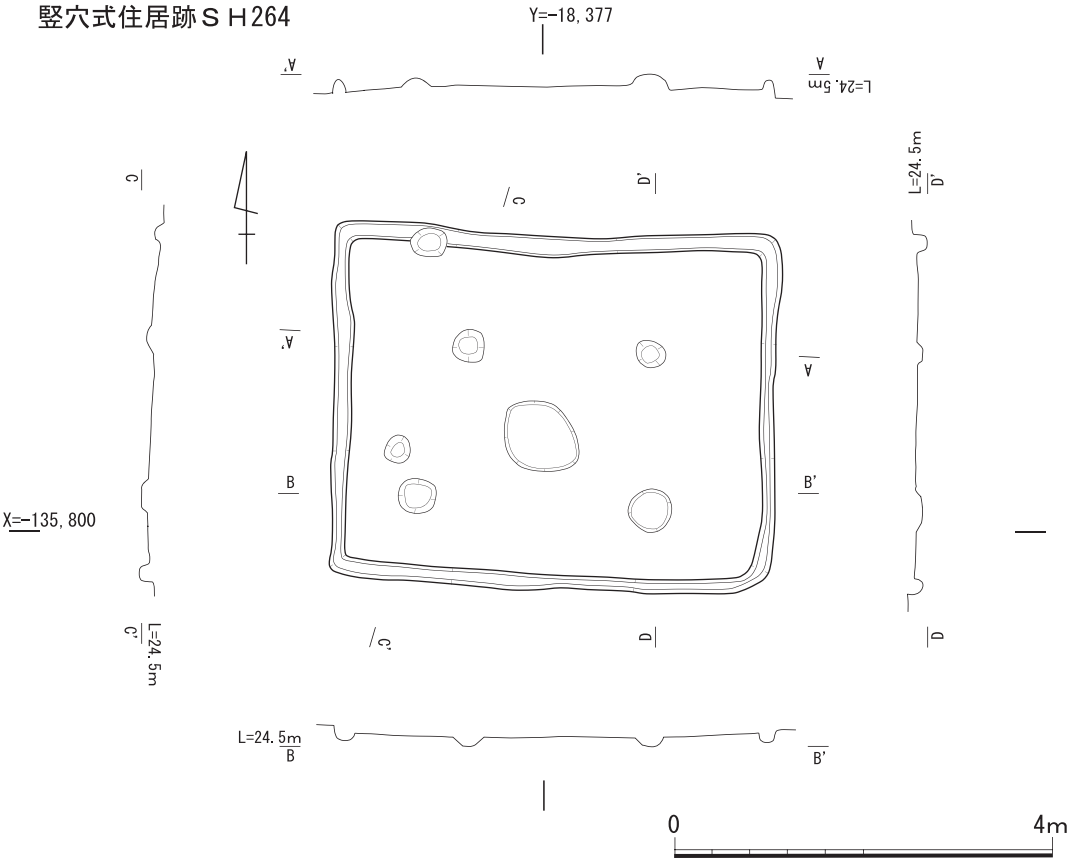


第15図　古墳ＳＸ３・４実測図

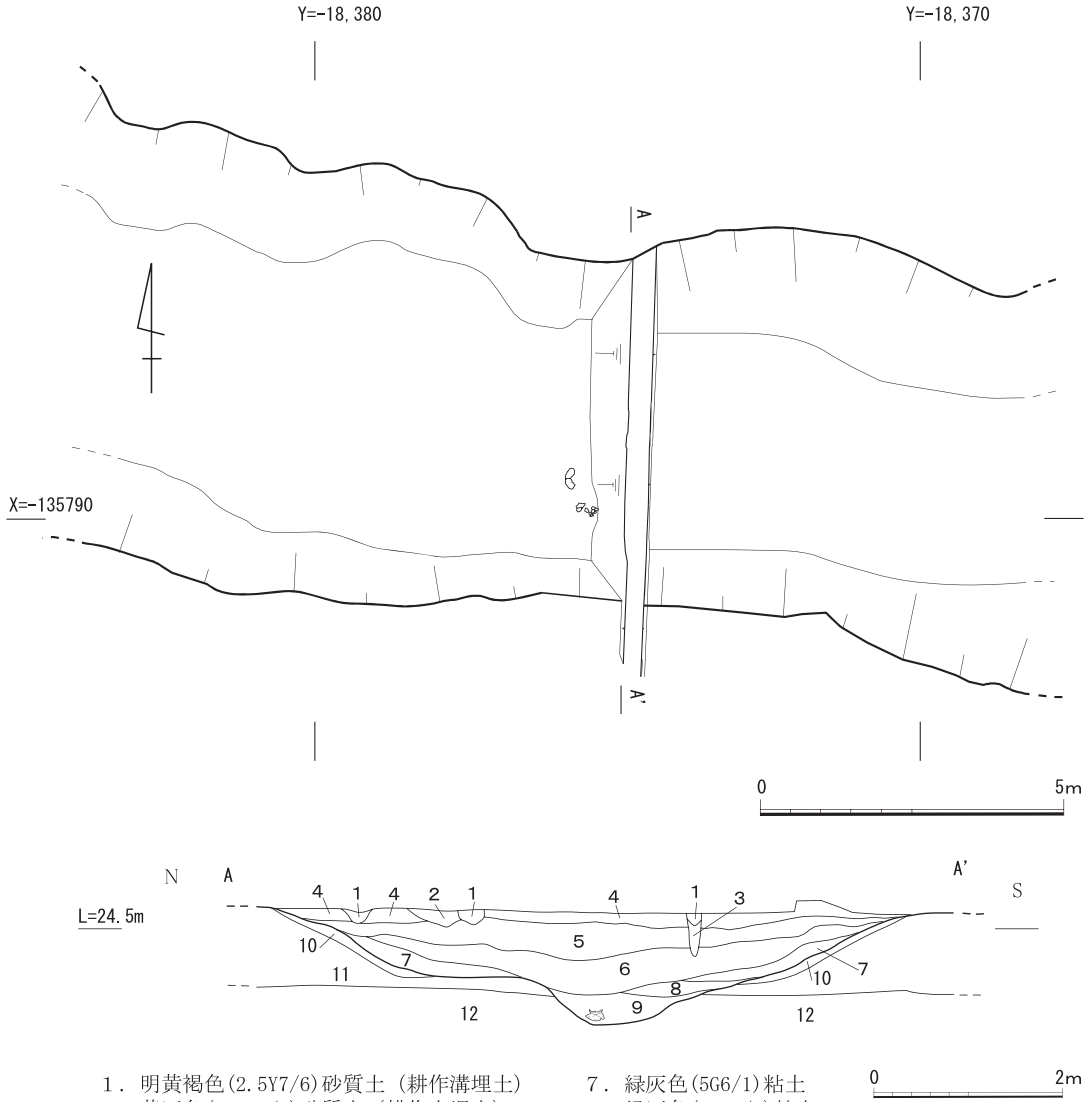
竪穴式住居跡ＳＨ260



竪穴式住居跡ＳＨ264



第16図　竪穴式住居跡ＳＨ260・264実測図



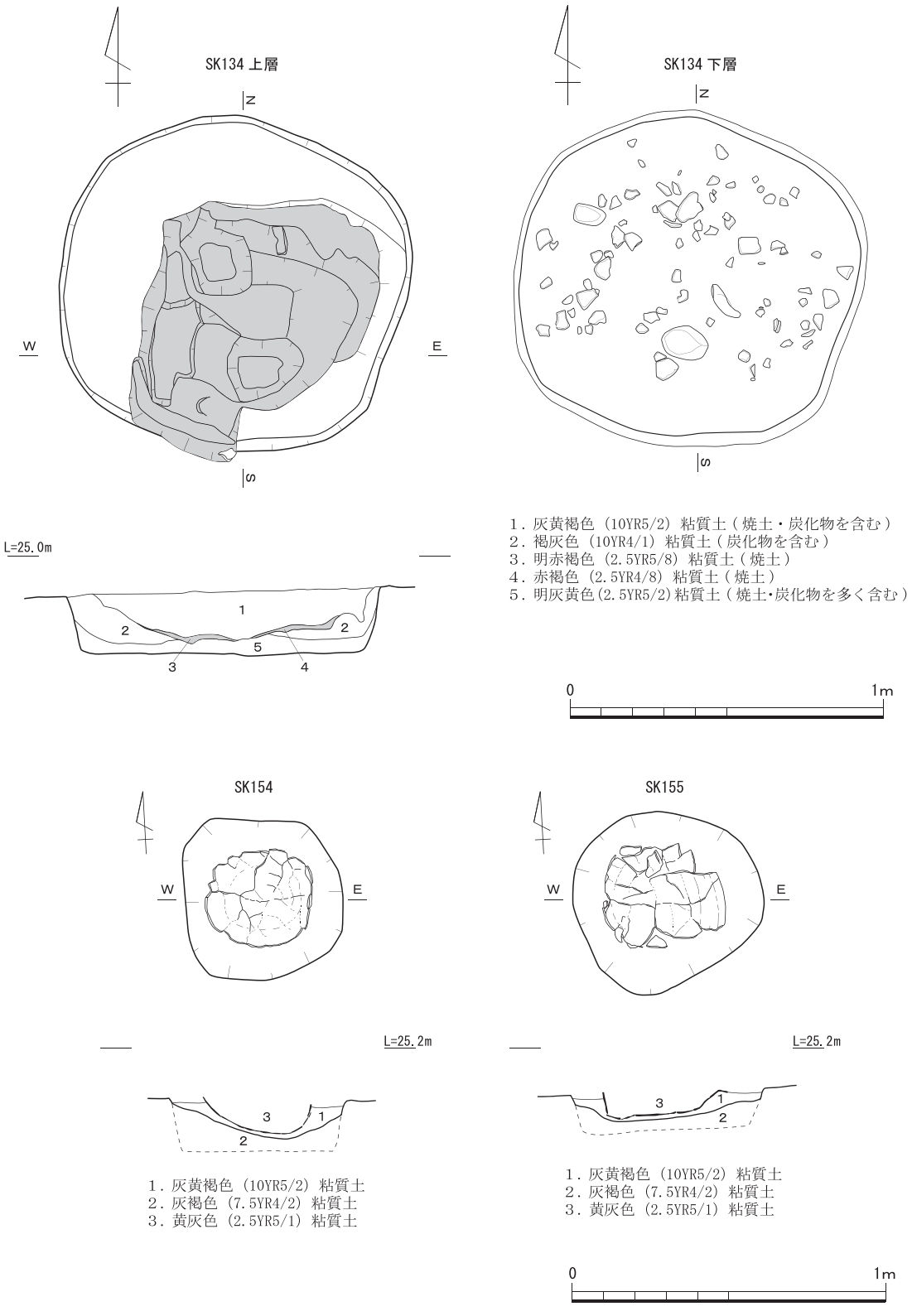
第17図　溝ＳＤ265実測図

土した(第26図88・89)。

竪穴式住居跡ＳＨ264(第16図)　古墳ＳＸ４の削られた墳丘の下層の標高24.68mで検出した。隅丸方形を呈する住居跡で、東西約5.1m、南北約4.2mを測る。遺物は出土しなかった。これら２基の竪穴式住居跡の時期については、竪穴式住居跡ＳＨ260から出土した遺物や竪穴式住居跡ＳＨ264が古墳ＳＸ４の墳丘が削平されている面で検出されたことから、古墳時代前期のものと考えられる。

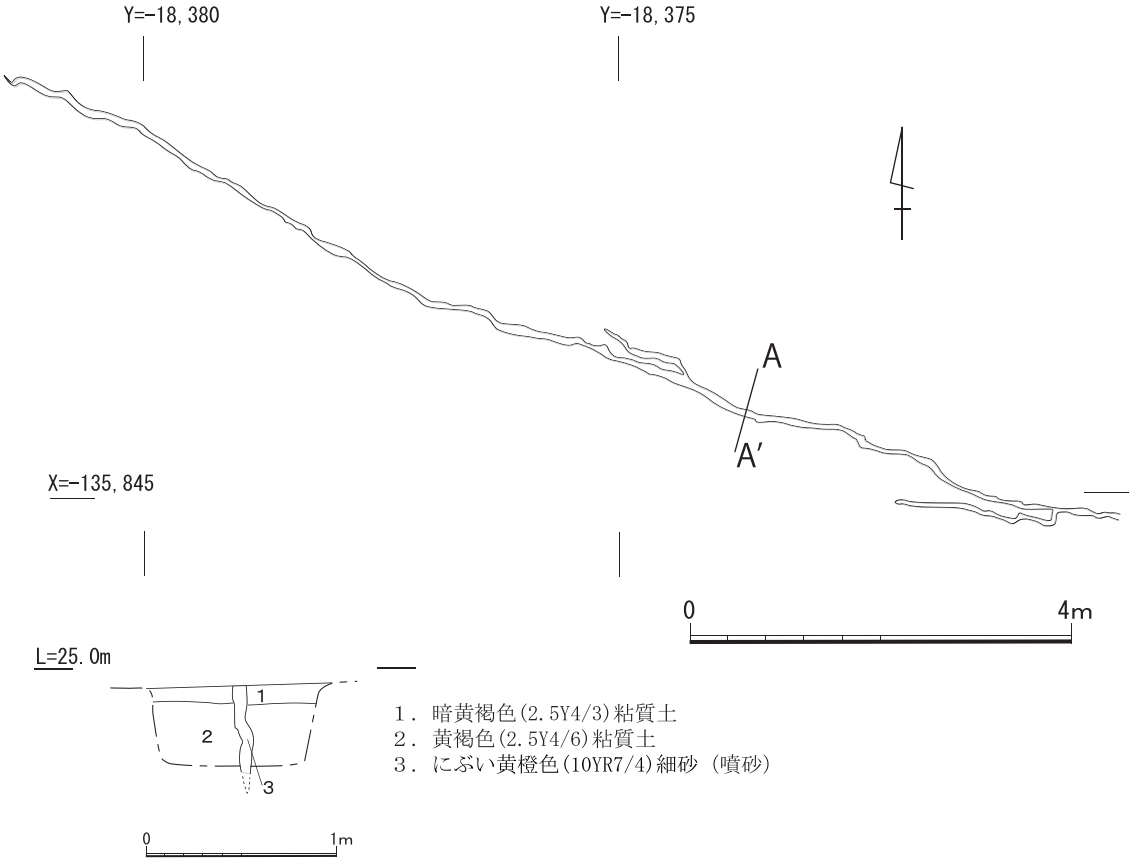
２)弥生時代の遺構

溝ＳＤ265　トレンチの北側で検出した幅約６m、深さ約1.5mを測る東西方向の溝である。溝の底は東側が深いことから、東にある木津川に流入していた可能性がある。溝の底部では、弥生時代後期の土器が出土した。第６次調査で検出されている弥生時代の溝ＳＤ1001の東延長部と



第18図　土坑ＳＫ134、土壙154・155実測図

判断される。また、第６次調査で検出された溝ＳＤ1002の延長部については、本調査地内では確認できなかった。第６次調査では、弥生時代前期の溝も確認されているが、本調査では確認できず、第６～９層に遺物が混入するのみであった。おそらく、後期の溝の掘削により消失したもの



第19図　噴砂実測図

と考えられる。弥生時代前期の土器、縄文土器が埋土中から出土しているが、混入品と考える。

3）縄文時代の遺構

土坑ＳＫ134（第18図）　南北1.1m、東西1.7m、深さ0.21mを測る円形の土坑である。土坑の上部には赤く焼けた土や炭が厚く堆積し、下部では焼けた縄文時代晩期の土器片や石が多数出土した。

土壙ＳＫ154（第18図）　土坑ＳＫ134の南側で、縄文時代晩期の甕が横に据えられた楕円形の土坑を検出した。東西0.5m、南北0.32m、深さ0.12mを測る。甕は口縁部を東にして横に据えられているが、横向きの甕の上部は、後世の削平によって欠損している。

土壙ＳＫ155（第18図）　土坑ＳＫ134や土壙ＳＫ154の南側で、縄文時代晩期の深鉢が横向きに据えられた土坑を検出した。東西0.6m、南北0.55m、深さ0.08mを測る楕円形を呈する。深鉢は口縁部を東にして横に据えられていたが、横向きの甕の上部は、後世の削平によって欠損している（第30図157）。

4）時期不明の遺構（第19図）

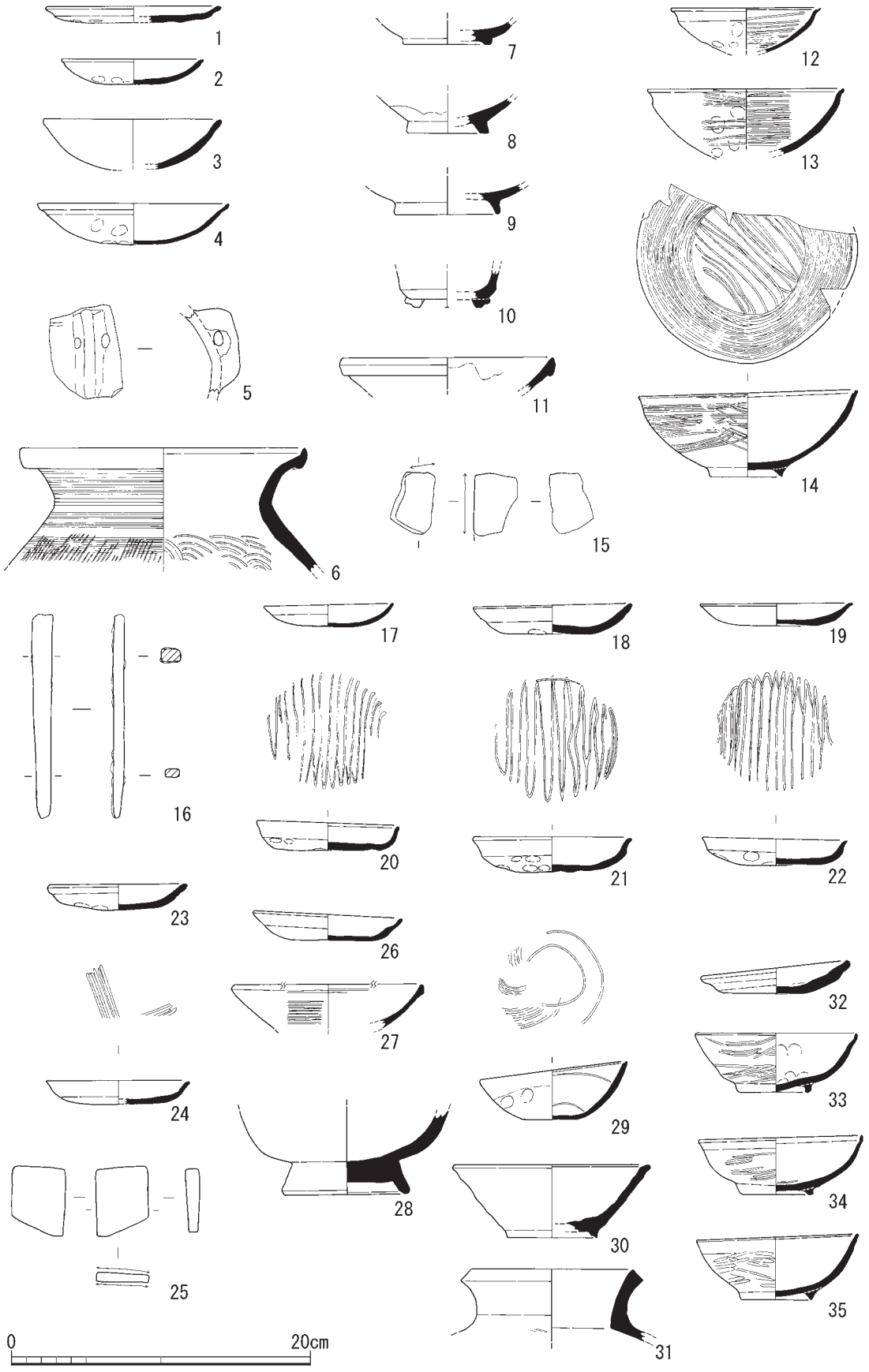
時期は不明であるが、第２遺構面で地震による噴砂痕跡を確認した。噴砂は、第１遺構面では、検出することができなかったが、幅が広いところで３cmと細く、東西方向に延びていた。検出した第２遺構面のベース面は粘土層であり、30cmほどの堆積があり、その下層の砂層から噴き上がったものと考えられる。

３．出土遺物

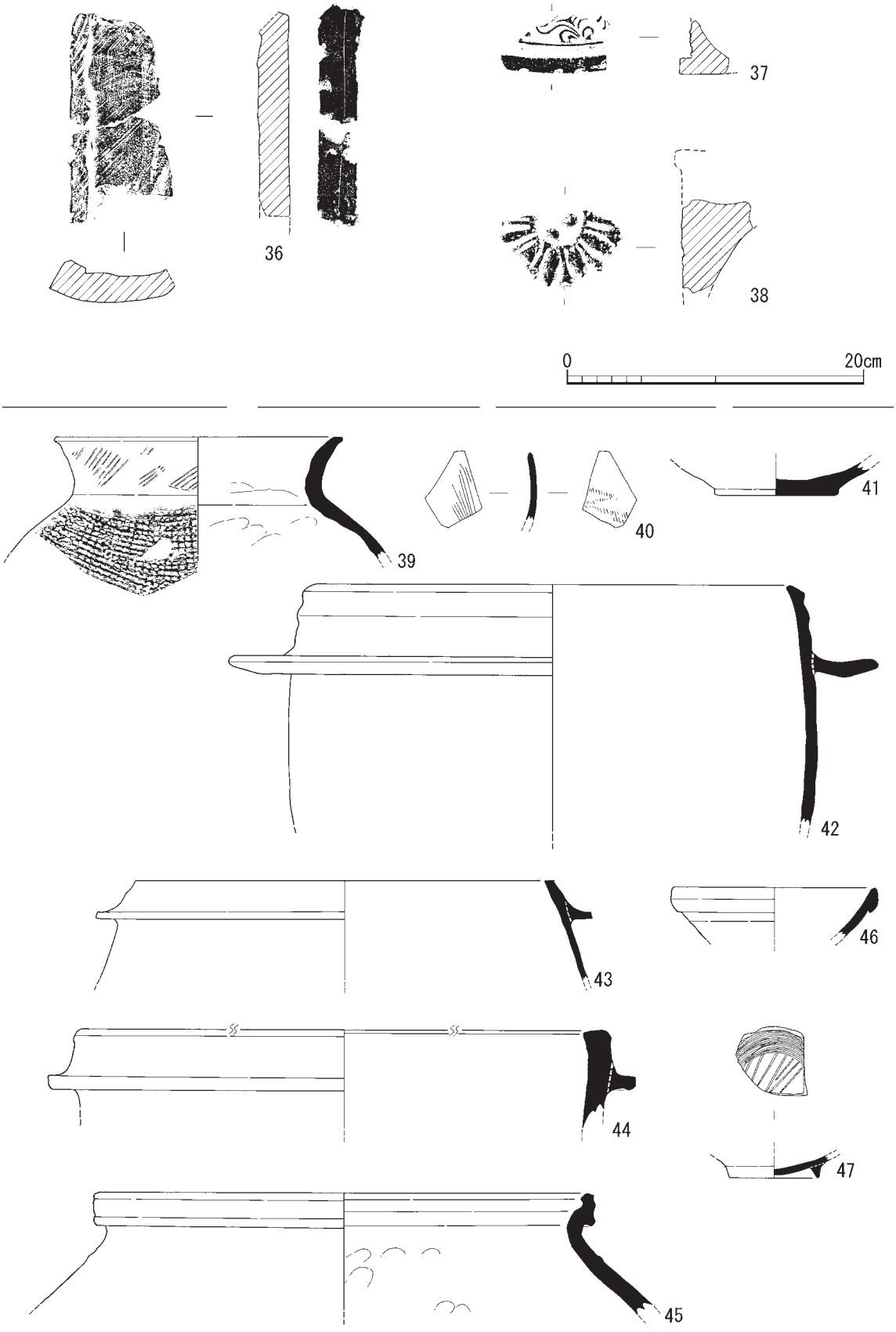
１～15は、第１遺構面上層の遺物包含層（オリーブ黄色粘質土）および遺構検出中の精査作業中に出土した遺物である。１は土師器の皿である。口径は復元で11.6cmを測る。２は土師器の皿である。口径は復元で9.6cmを測る。底部に指押さえの痕跡がみられる。３は土師器の杯である。口径は復元で12.0cmを測る。４は土師器の杯である。口径は復元で15.2cm、器高は3.2cmを測る。外面底部に指押さえの痕跡が見られる。５は須恵器の甕の把手部分である。把手部分の中央に楕円形の穴が開けられている。６は須恵器の甕の口縁部である。口径は19.0cmを測る。７は施釉陶器の椀の底部である。高台は貼り付けで、底部径は6.3cmを測る。８は白磁の椀の底部である。底部径は12.1cmを測る。９は施釉陶器の椀の高台部分である。高台径は7.2cmを測る。10は施釉陶器の底部の破片である。器種は不明であるが、５mmの高さの円形の高台が付く。11は白磁の椀の口縁部である。口径は14.4cmを測る。12は瓦器の椀の破片である。口径は10.0cm、器高は3.0cmを測る。外面には指押さえ、内面には暗文が施されている。13は瓦器の椀の破片である。口径は13.0cm、器高は4.5cmを測る。外面には指押さえと暗文、内面には暗文が施されている。14は瓦器の椀である。口縁は14.8cm、高台は貼り付けで5.8cmを測る。15は石製の砥石である。砥ぎ面を１面確認している。

16～29は第１遺構面で検出した遺構から出土した遺物である。16は土坑ＳＫ041から出土した鉄製の釘状の製品である。残存する長さは13.6cmを測る。17～22は土坑ＳＫ042から出土した遺物で、すべて完形品である。17は土師器の皿で口径は8.7cm、器高は1.7cmを測る。18は土師器の皿で口径は10.7cm、器高は2.1cmを測る。19は土師器の皿である。口径は10.3cm、器高は1.5cmを測る。20は瓦器の皿である。内面には暗文が施されている。21は瓦器の皿で、口径は10.4cm、器高は2.35cmを測る。内面に暗文が施されている。22は瓦器の皿である。口径は9.6cm、器高は1.9cmを測る。内面には暗文が施されている。これらＳＫ042から出土した遺物は、12世紀中頃に属する土器と判断される。23・24は掘立柱建物跡ＳＢ２の柱穴ＳＰ038から出土した遺物である。23は土師器の皿で、口径は9.3cm、器高は1.8cmを測る。24は瓦器の皿で、内面には「十」字状の暗文がみられる。平安時代中期に属する遺物と判断する。25は溝ＳＤ100から出土した石製の砥石で、砥ぎ面は２面確認している。26・27は土坑ＳＫ047から出土した。26は土師器の皿の口縁部である。口縁端部に焼けた痕跡と炭が付着していることから、灯明皿として使用されていたことがわかる。27は白磁の椀の口縁部である。口径は12.8cmを測る。28は溝ＳＤ060から出土した漆器の椀の底部である。外面には黒漆が塗られ、内面には赤漆が塗られている。高台径は8.8cmを測る。29は土坑ＳＫ115から出土した瓦器の椀である。歪んではいるが完形で出土した。口径は最大で9.8cm、器高は3.9cmを測る。内外面に暗文がみられる。

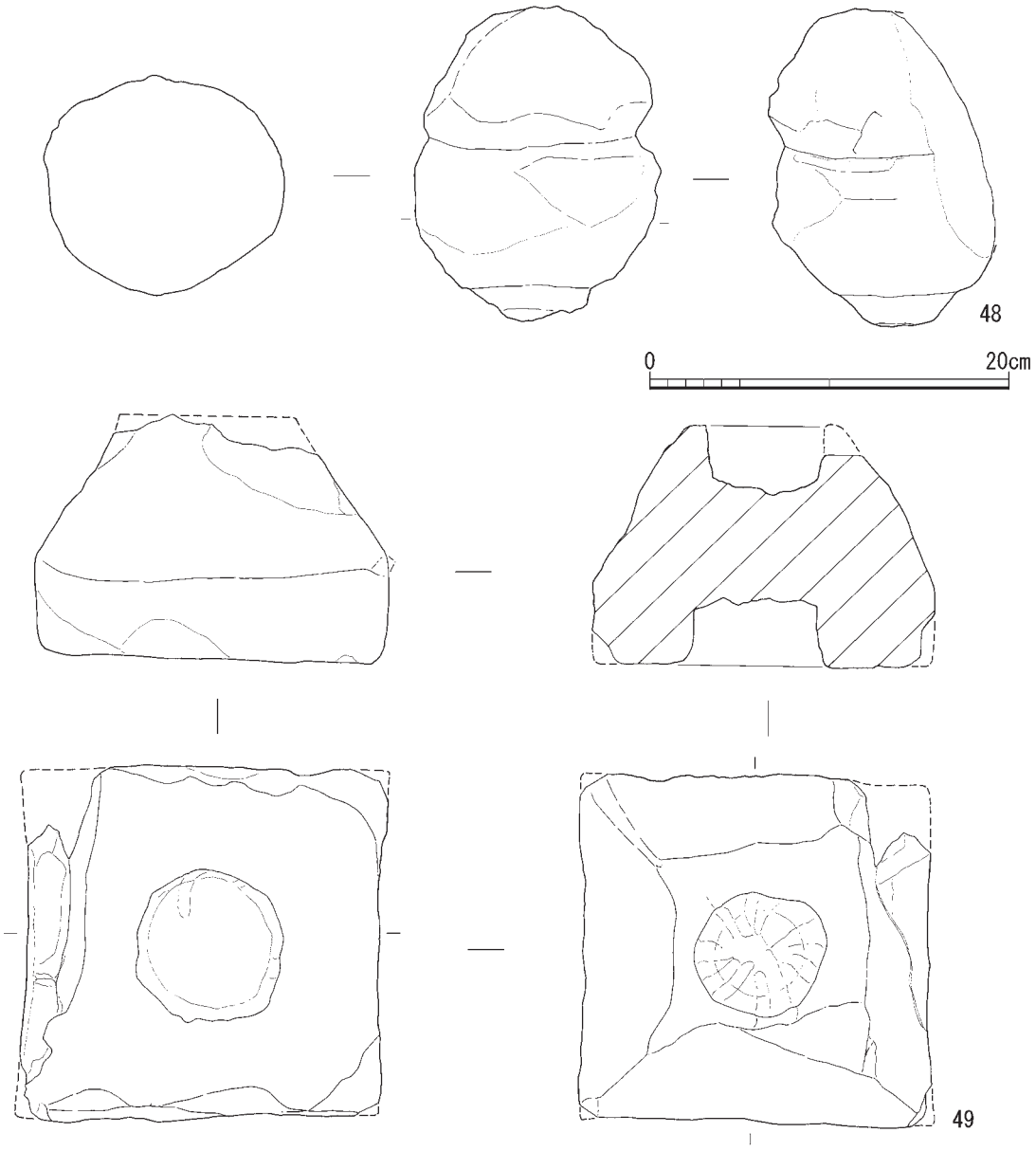
30～38は、第１遺構面から第２遺構面までの掘削の際に出土した遺物である。30は須恵器の鉢である。口径は13.0cm、器高は4.9cmを測る。高台は削り出し高台である。31は土師器の短頸壺の口縁部である。口径は10.8cmを測る。32は土師器の皿で、口径は9.8cm、器高は1.7cmを測る。33～35は黒色土器である。３点とも瓦器よりも器壁が厚く、内外面とも黒色である。一部欠損



第20図　包含層、第１・２遺構面出土遺物実測図



第21図　第１・２遺構面、溝ＳＤ210・251出土遺物実測図

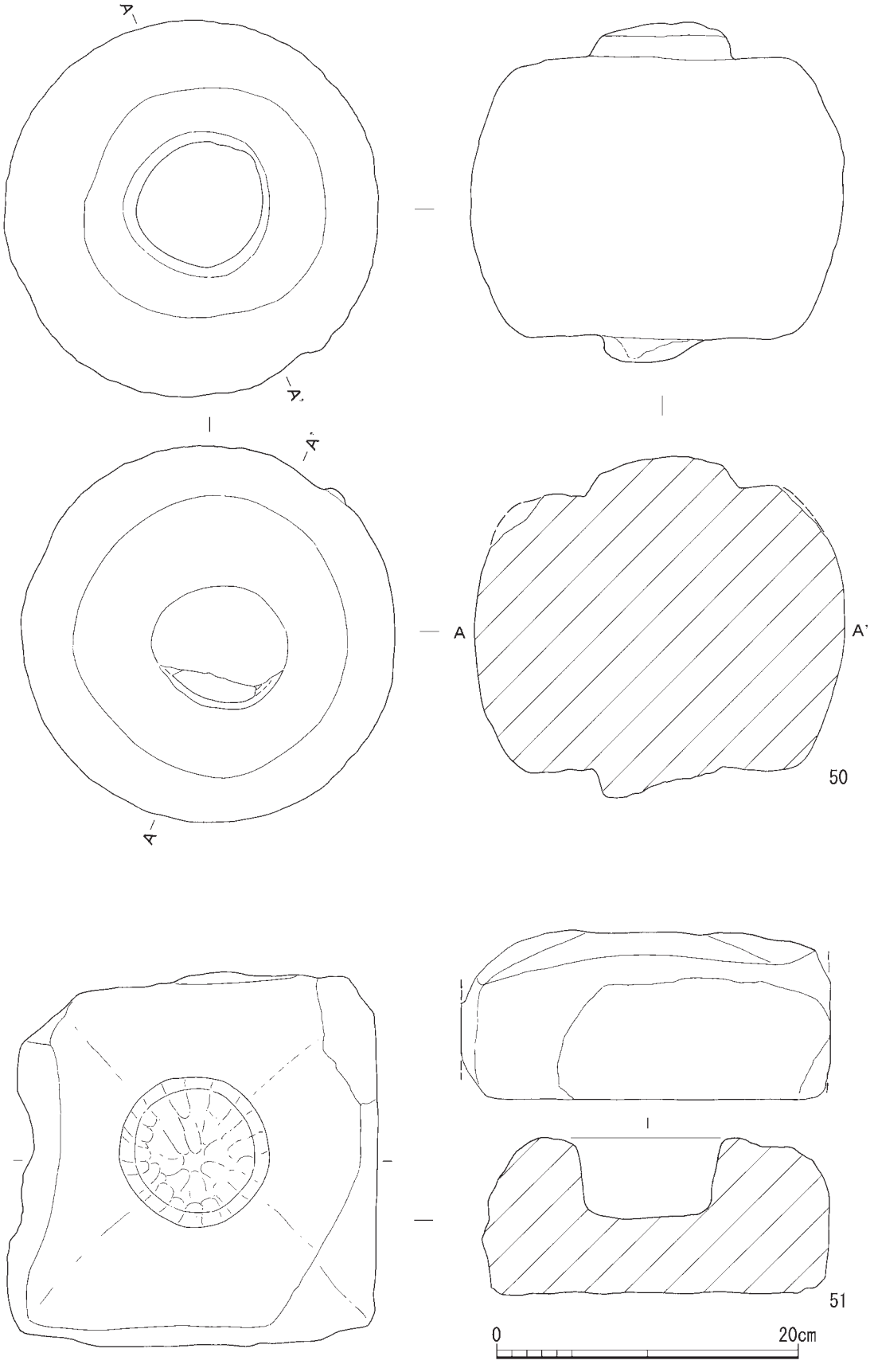


第22図　五輪塔実測図（１）

しているが完形に近い状態である。33は口径11.0cm、器高5.0cmを測る。34は口径13.0cm、器高4.0cmを測る。35は口径10.8cm、器高は4.5cmを測る。

36 ～ 38は瓦である。36は平瓦で表面には布目がみられる。平瓦は桶巻き作りで、長さ13.7cm、幅2.6cmの切断面が残る。37は軒平瓦である。瓦当部の摩滅は著しいが、白鳳期の寺院である木津川市高麗寺と同じ型式と判断できる。38は軒丸瓦である。瓦当面に唐草文がみられるが、型式や時期は不明である。３点とも磨滅が著しい。

39 ～ 48は第２遺構面で検出した遺構から出土した遺物である。39・40・42は溝ＳＤ210から出土した遺物である。39は須恵器の甕の口縁部の破片である。外面の一部には自然釉がみられる。40は深い緑色をした同安窯系の青磁碗の口縁部である。小片のため判別できないが、内外面ともに文様が施されている。12 ～ 13世紀に属する。41は溝ＳＤ250から出土した須恵器の底部である。

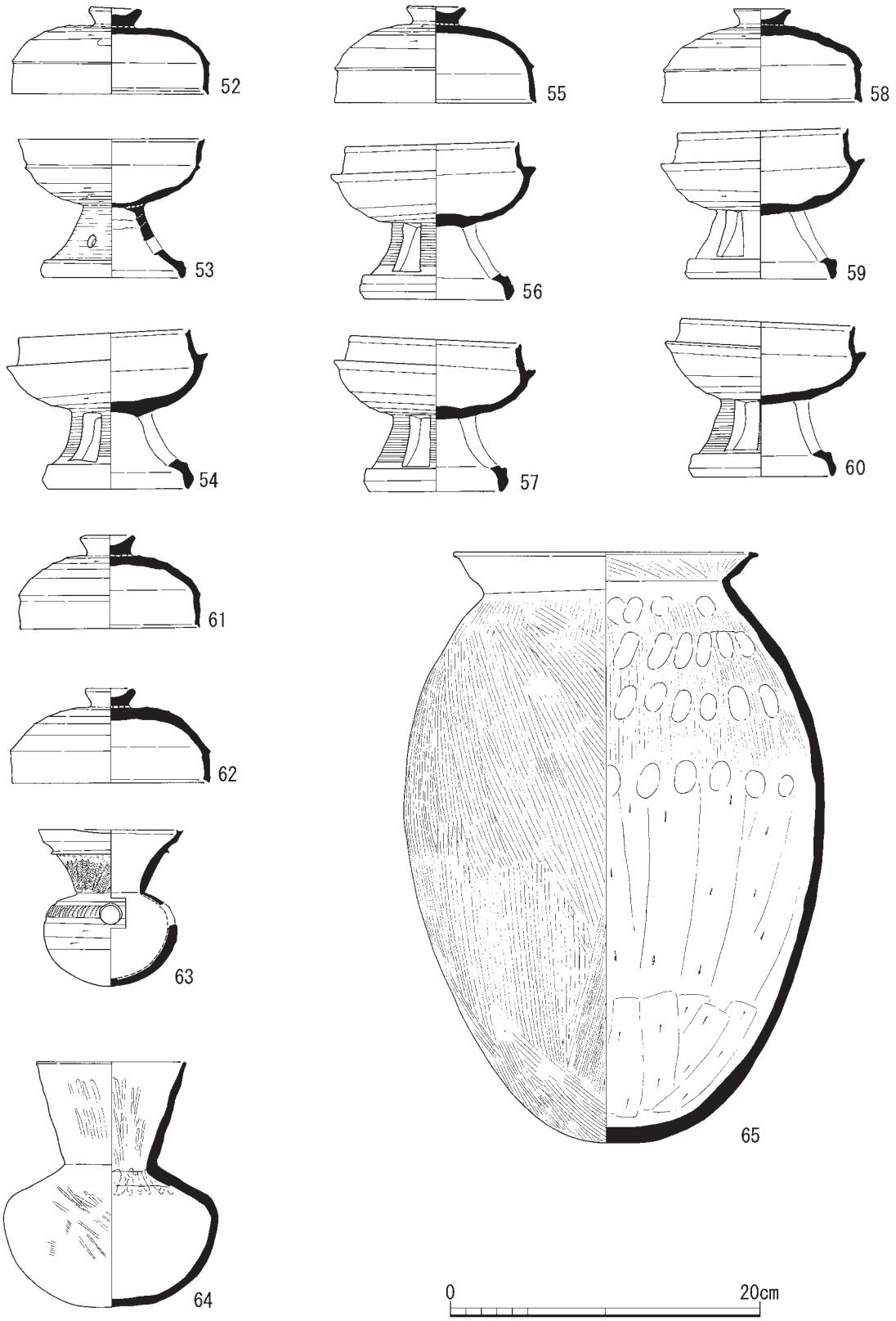


第23図　五輪塔実測図（２）

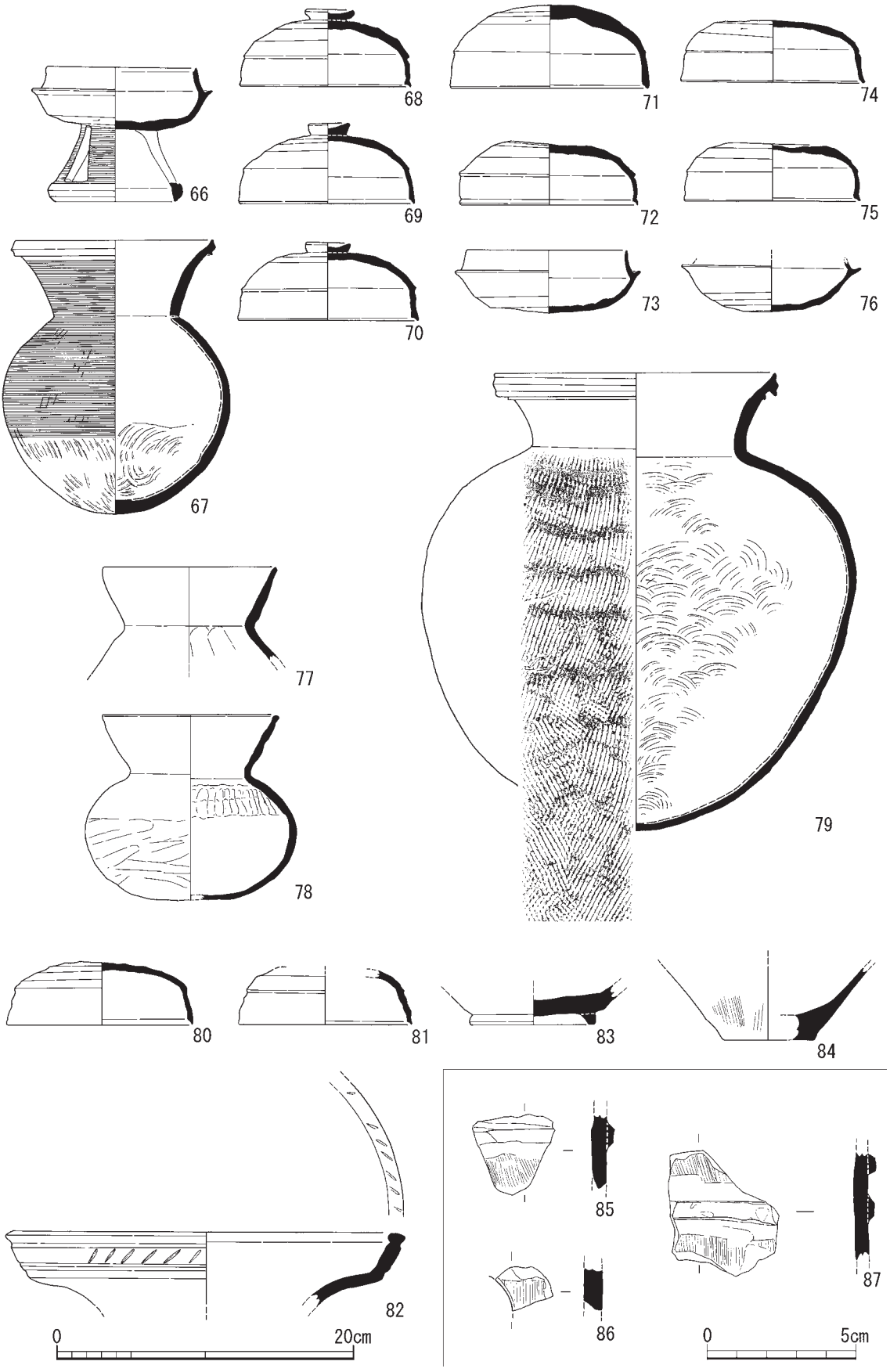
壺と思われる底部の径は8.4cmを測る。42は瓦質の羽釜の破片である。口径は復元で33.6cmである。外面の磨滅が激しい。43～48は溝ＳＤ251から出土した遺物である。43は土師器の羽釜である。口径は復元で28.2cmである。44は瓦質の羽釜である。45は須恵質の甕の口縁部で、表面は暗赤灰色である。口径は33.0cmを測る。46は白磁の椀の口縁部の破片である。口径は14.2cmを測る。47は瓦器の椀である。内面には円形と直線の暗文がみられる。高台径は6.2cmである。48～51は溝ＳＤ251から出土した五輪塔である。ともに石材は凝灰岩であり、磨滅が激しい。48は空風輪部分である。残存する高さは17.5cmで、最大径は13.5cmを測る。宝珠形を呈する空輪と半月形を呈する風輪が一体となっている。49は屋根形を呈する火輪部分である。底部の一辺は20.0cm、高さは13.2cmである。上面・下面ともに接合部の凹みがある。50は円形を呈する水輪部分で、高さ22.4cm、最大径24.7cmを測る。出土した中では比較的残りがよい。51は方形を呈する地輪部分である。底部は24.7cm、高さ11.0cmを測り、中央に直径9.9cm、深さ4.7cmの接合部の凹みがある。この他に溝ＳＤ251からは部位不明の五輪塔と思われる凝灰岩の石材片が数点出土している。それぞれの部位が小型で、古い要素を持つことから、平安時代後期(12世紀後半)のものと判断する。

52～65は古墳ＳＸ１の周溝ＳＤ200内から出土した遺物である。52～62は周溝の南東部から出土した。52は須恵器の杯蓋で蓋頂部にはつまみが付く。口径は12.6cm、器高は5.6cmを測る。53は須恵器の高杯で、有蓋のものである。脚部には円形の透かしがある。口径は12.0cm、器高9.0cmを測る。54は高杯で、口径は11.5cm、器高9.0cmを測る。55は高杯の蓋で、口径は13.0cm、器高6.3cmを測る。56は高杯で、口径は11.5cm、器高10.3cmを測る。57は高杯で、口径は10.9cm、器高10.15cmを測る。58は高杯の蓋で、口径は11.8cm、器高6.1cmを測る。59は高杯で、口径は11.0cm、器高9.8cmを測る。60は高杯である。口径は11.2cm、器高10.3cmを測る。61は高杯の蓋で、口径は11.5cm、器高6.0cmを測る。62は高杯の蓋で、口径は12.8cm、器高6.1cmを測る。63は周溝の東部から出土した瑤で、口径は9.8cm、器高10.2cmを測る。頸部外面には波状文、体部には円形の透かしがあり、その横には沈線や連状文が施されている。64は周溝内の西部から出土した土師器の長頸壺で、口径は10.4cm、器高16.0cmを測る。内外面ともにハケメの調整が残る。65は周溝内の西部から出土した土師器の長胴壺で、口径は19.8cm、器高38.2cmを測る。口縁部はヨコナデ、底部内面にはヘラケズリ、上部にはハケメ、指押えがある。外面全体にはハケメの調整がみられる。

66～82は古墳ＳＸ２の周溝ＳＤ201内から出土した遺物である。66は周溝内の北部で出土した須恵器の高杯である。口径は10.0cm、器高9.1cmを測る。67は周溝内の北東部から出土した須恵器の壺である。口径は13.7cm、器高は13.6cmを測る。外面にはカキメ、内面底部には同心円タタキがみられる。68は周溝内北西部から出土した高杯の蓋である。口径は11.5cm、器高は5.8cmを測る。69は周溝内北西部から出土した高杯の蓋である。口径は11.7cm、器高は5.45cmを測る。70は周溝内北西部から出土した高杯の蓋である。口径は12.3cm、器高は5.3cmを測る。71は周溝内北西部から出土した須恵器の蓋である。口径は13.2cm、器高は5.65cmを測る。72～75・77・



第24図　古墳ＳＸ１周溝ＳＤ200出土遺物実測図



第25図　古墳ＳＸ２周溝ＳＤ201・ＳＸ４周溝ＳＤ242出土遺物実測図

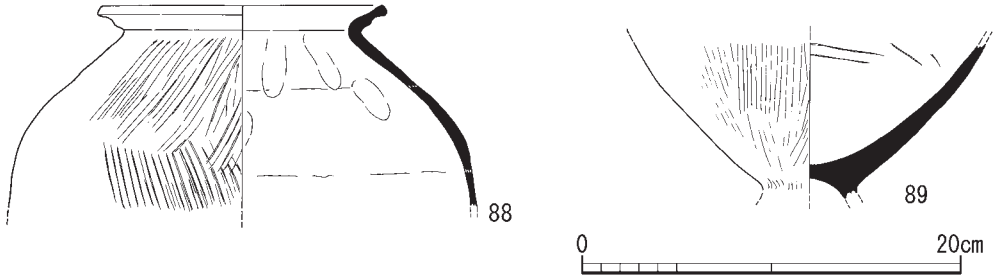
78・80・82は周溝内の北東部から出土した。72は須恵器の蓋である。口径は12.0cm、器高は5.3cmを測る。73は須恵器の杯である。口径は10.6cm、器高は4.3cmを測る。74は須恵器の蓋である。口径は11.5cm、器高は4.2cmを測る。75は須恵器の蓋である。口径は11.8cm、器高は3.95cmを測る。76は須恵器の杯である。口径は11.8cm、器高は3.95cmを測る。周溝内の北西部から出土した。77は土師器の壺の口縁部の破片である。口径は11.5cmである。78は土師器の短頸壺である。口径は11.6cmで、器高は12.6cmを測る。79は須恵器の甕である。ほぼ完形に復元できる。口径は18.8cm、器高は31.1cmを測る。外面体部には平行タタキがみられ、内面には同心円のタタキがみられる。周溝内の北部で出土した。80は須恵器の蓋である。口径は12.5cmで、器高は4.3cmを測る。周溝内の北部から出土した。81は須恵器の蓋である。口径は11.8cmで、器高は3.7cmを測る。82は土師器の壺の口縁部である。口径は26.8cmである。口縁端部および口縁外部に連続した沈線の装飾がみられる。古墳ＳＸ１・２の周溝から出土した須恵器は完形品もしくは完形に復元できる個体がほとんどである。これらの土器から、これらの古墳の築造時期は古墳時代中期末（５世紀末～６世紀初頭）と推定される。

83・84は古墳ＳＸ３の周溝ＳＤ227内から出土した土器である。83は須恵器の壺の高台部分である。高台径は8.4cmを測る。84は土師器の壺の底部の破片である。

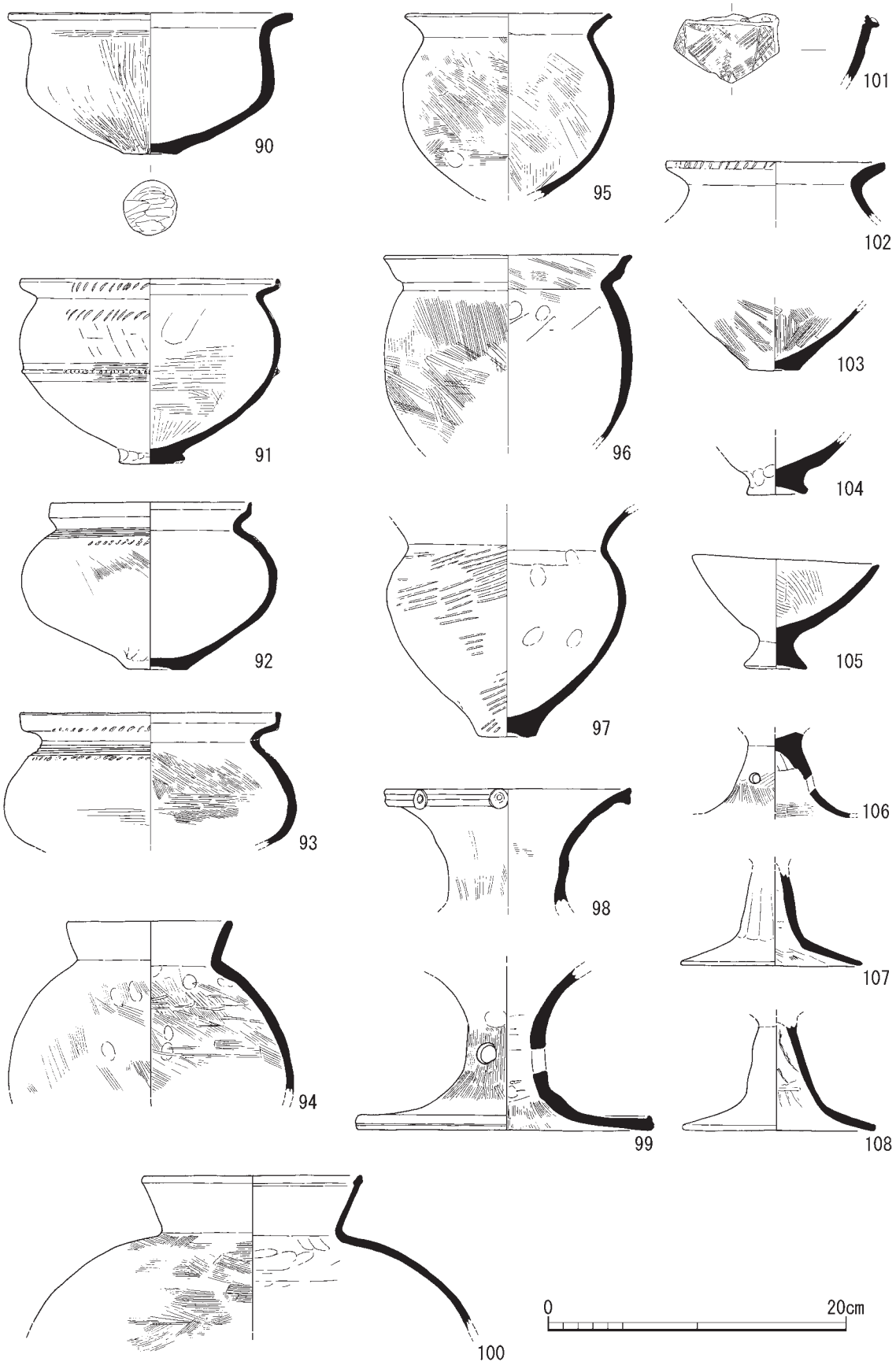
85～87は円筒埴輪の破片である。85は古墳ＳＸ４の周溝ＳＤ242の精査中に出土した。タガ状突帯部が残り、ハケメ調整がみられる。86は古墳ＳＸ３の周溝ＳＤ227内から出土した。小片であるが円形の透かしの一部分がみられる。87は第１遺構面から第２遺構面の掘削時に出土した。タガ状突帯部分を挟んでハケメ調整が残る。

88・89は竪穴式住居跡ＳＨ260の床面から出土した古墳時代前期の土師器の甕の破片である。88は甕の口縁部から体部にかけての破片である。口径は、14.8cmを測る。外面には粗いハケメがみられ、口縁部にはヨコナデがみられる。89は甕の底部の破片である。底部先端部は欠損している。外面は粗いハケメがみられる。88と89は同一個体と思われるが、接点はみられない。

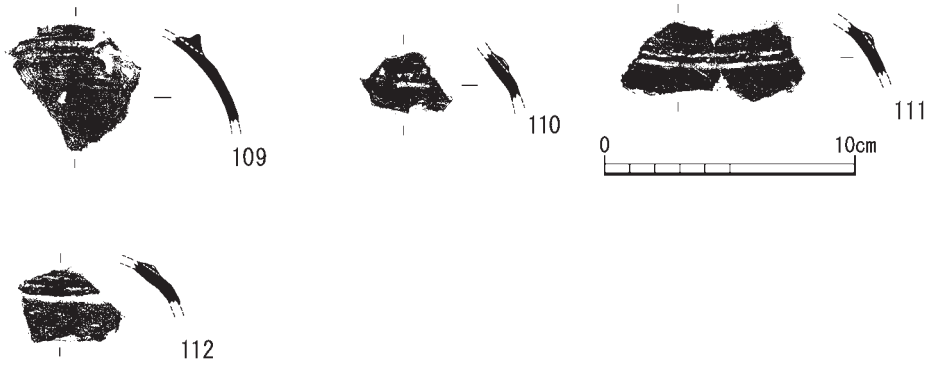
90～112は弥生時代の溝ＳＤ265から出土した遺物である。弥生時代後期に属する。90は溝の底部から出土した鉢である。口径は19.0cm、器高は9.5cmを測る。外面には縦方向のヘラミガキがみられる。90は溝の底部から出土した鉢である。口径は17.2cm、器高は12.5cmを測る。体部外面の中央に貼り付け突帯があり、刻目文様がある。口縁部外周にも刻目文様がみられる。92は鉢である。口径は13.4cm、器高は10.3cmを測る。外面の頸部には列点文がみられる。93は鉢で



第26図　竪穴式住居跡ＳＨ260出土遺物実測図



第27図　溝ＳＤ265出土遺物実測図（１）



第28図　溝ＳＤ265出土遺物実測図（２）

ある。口径は17.4cmを測り、底部は欠損している。外面の頸部には貝殻状の工具による刺突文様がみられる。94は甕の口縁から頸部にかけての破片である。口径は11.4cmである。内外面ともにハケメがみられる。95は甕である。底部が欠損している。口径は13.5cmを測る。体部の内外面にはハケメがみられる。96は甕の口縁部から体部の破片である。口径は16.8cmを測る。97は甕で、口縁端部が欠損しており、頸部から底部にかけて残存する。残存する器高は15.3cmである。外面には横方向のタタキがみられる。98は壺の口縁部の破片である。頸部には縦方向のミガキがみられる。99は器台の脚部と思われる。脚部の口径は20.0cmを測る。脚部には円形の透かしがある。100は甕の口縁部である。口径は14.7cmを測る。外面にはハケメがみられる。101の器種は不明であるが、口縁端部の破片である。外面にはヘラなどによる格子状の刻み文様がみられる。102は甕の口縁部の破片である。口径は14.6cmである。口縁端部に刻目文様がみられる。103は甕の底部片である。底部径は4.0cmである。内外面ともにハケメがみられる。104は鉢の底部の破片と思われる。底部には指押さえの痕跡がある。外面には磨滅しているがミガキがみられる。105は鉢で、口径は12.5cm、器高は7.6cmを測る。106は高杯の脚部で杯部が欠損している。脚部外面には縦方向のハケメがあり、円形の透かしがある。107は高杯の脚部であり、杯部が欠損している。脚部径は12.0cmを測る。脚部外面には縦方向の面取りがある。108は高杯の脚部で、杯部が欠損している。脚部径は12.9cmを測る。脚部外面には縦方向の面取りがある。

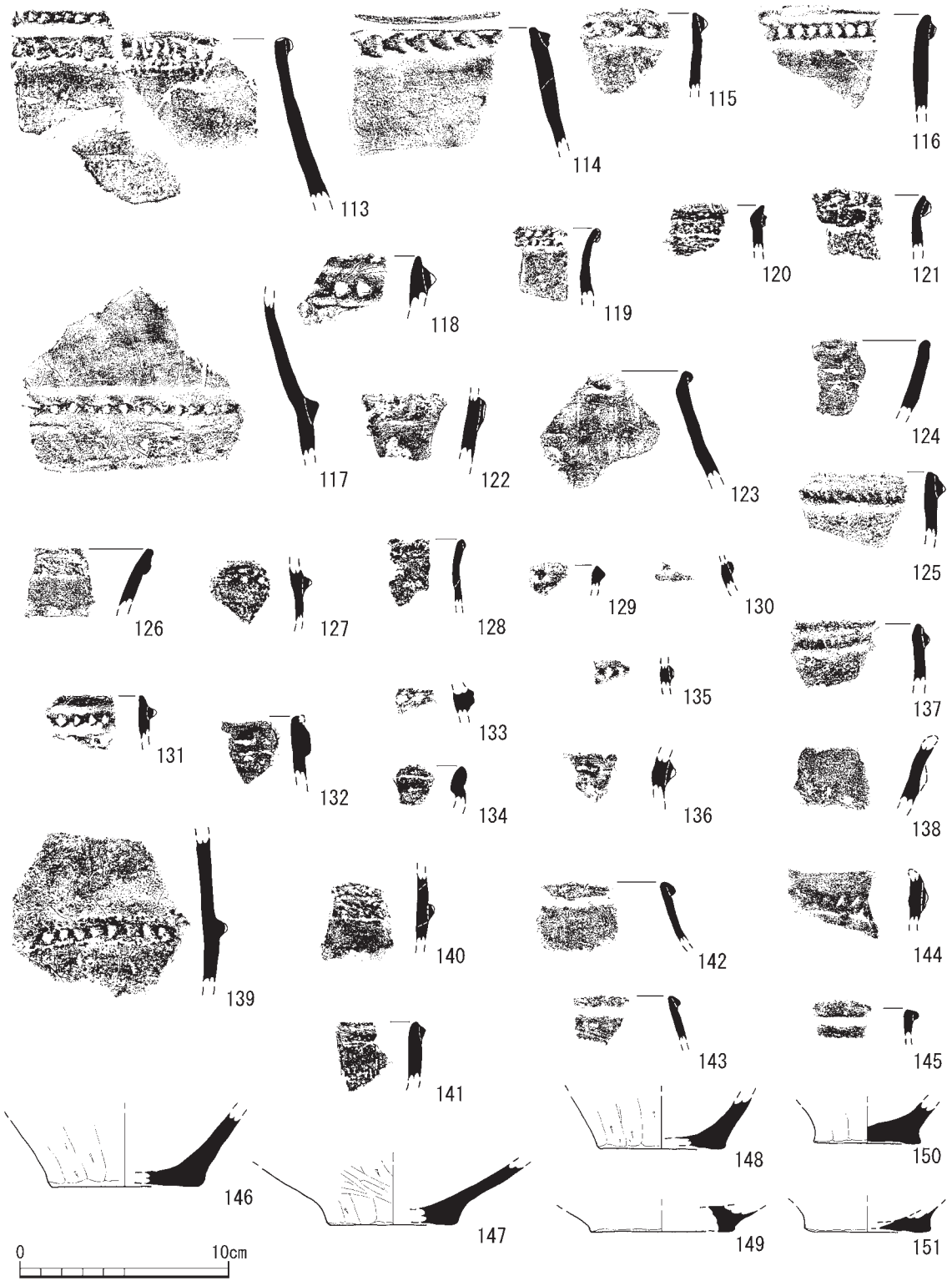
109 ～ 112は溝ＳＤ265内から出土した弥生時代前期中葉～後葉以降に属する土器片で、混入した遺物と考える。小片のため器種は不明であるが、頸部に突帯を持つ。

（村田和弘）

縄文土器

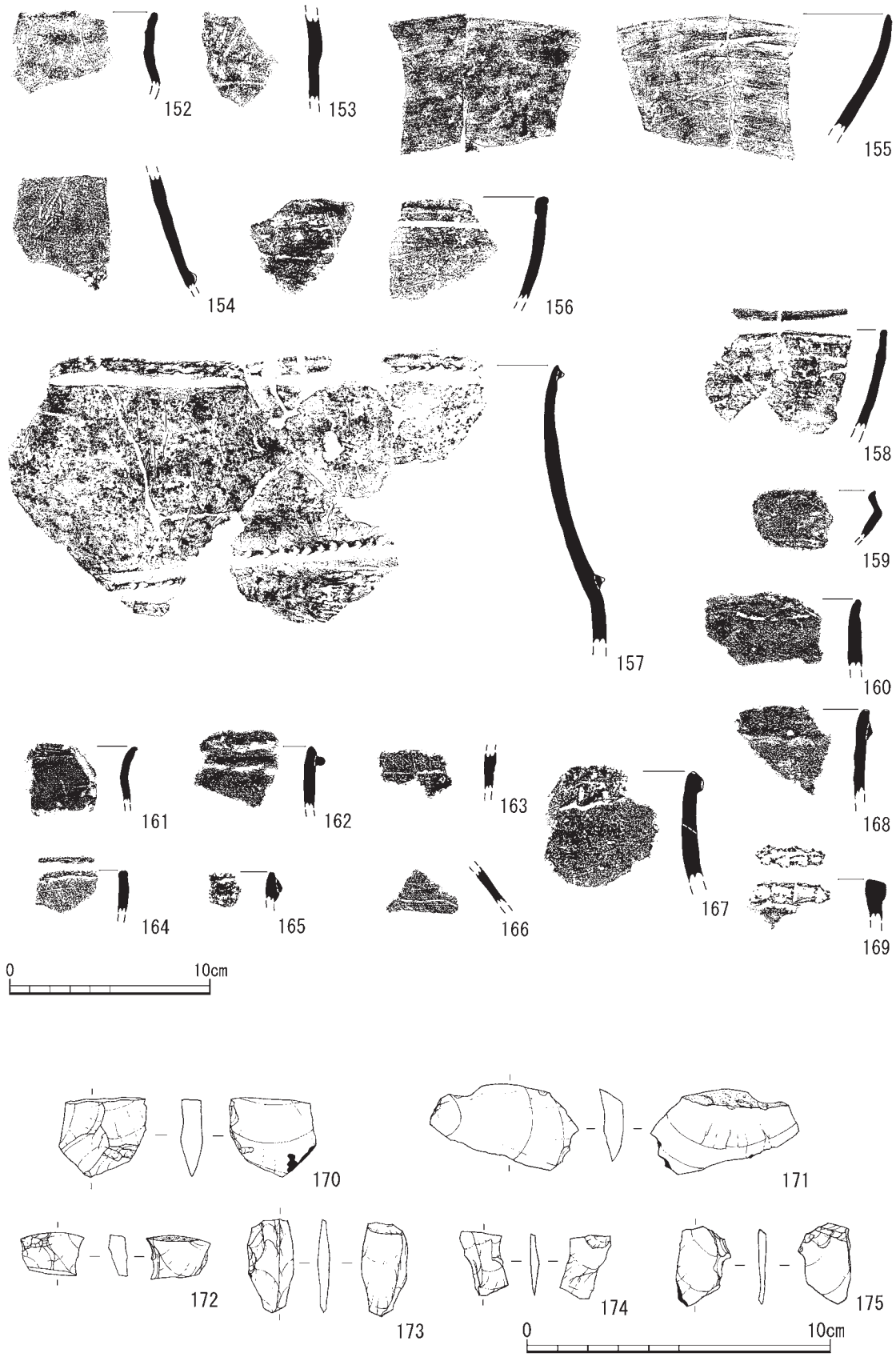
土坑ＳＫ134（第29図・第30図152 ～ 156）　113は口縁端はわずかな接合面を介し２つの破片で構成されているが、突帯のキザミ目の加工が若干異なるため別個体である可能性もある。口唇端部にも刻み目が施される。調整は外面が板状工具による縦方向のナデ、内面は横方向のナデである。胎土には直径３mm以下の石英・長石・雲母・チャートが含まれる。114は深鉢口縁部である。調整は内外面板状工具による横方向のナデである。胎土には直径４mm以下の石英・長石・雲母が含まれる。115は深鉢口縁部である。調整は内外面不明である。胎土には直径４mm以下の石英・

長石が含まれる。116は深鉢口縁部である。調整は内外面ナデ調整である。胎土には直径３mm以下の石英・長石・角閃石・雲母が含まれる。117が深鉢胴部である。頸部外面は板状工具による横方向のナデ、胴部はケズリ、内面はナデである。胎土には直径３mm以下の石英・長石が含まれ、色調等は角閃石を含む土器と類似している。118は深鉢口縁部である。調整は外面不明、内面ナデである。胎土には直径４mm以下の石英・長石が含まれる。119は深鉢口縁部である。調整は内外面ナデである。胎土には直径４mm以下の石英・チャートが含まれる。120は深鉢口縁部である。調整は内外面ナデである。胎土には直径４mm以下の石英・長石・チャートが含まれる。121は深鉢口縁部である。調整は外面が板状工具による縦方向のナデ、内面は横方向のナデである。胎土には直径３mm以下の石英・チャート・赤色斑粒が含まれる。122は深鉢胴部で、調整は内外面ナデである。胎土には直径４mm以下の石英･長石･チャート･赤色斑粒が含まれる。123は深鉢口縁部で、調整は外面が板状工具による縦方向のナデの後、部分的に横方向のナデが施され、内面はナデである。胎土には直径５mm以下の石英・長石が含まれる。124は浅鉢口縁部で、調整は外面ケズリ、内面ミガキである。胎土には直径３mm以下の石英･長石が含まれる。125は深鉢口縁部で、内外面の調整は不明である。137と同一個体の可能性が指摘できる。直径５mm以下の石英・長石・角閃石・雲母を含む。126は深鉢口縁部で、内外面の調整はナデである。直径３mm以下の石英・長石を含む。127は深鉢胴部で、外面はナデ調整、内面は不明である。直径４mm以下の石英・長石を含む。128は鉢口縁部で、調整は内外面ナデである。直径４mm以下の石英・長石を含む。129は深鉢口縁部で、内外面ともにナデ調整である。直径３mm以下の石英・長石を含む。130は深鉢口縁部で、内外面ともにナデ調整である。直径３mm以下の石英・長石を含む。131は深鉢口縁部で、内外面ともにナデ調整である。直径４mm以下の石英・長石を含む。132は深鉢口縁部で、内外面ともにナデ調整である。直径３mm以下の石英・長石・チャート・赤色斑粒を含む。133は胴部突帯部分で、調整は内外面不明である。直径３mm以下の石英・長石を含む。134は浅鉢口縁部で、内外面の調整はナデである。直径２mm以下の石英・長石を含む。135は胴部突帯部分で、調整は内外面不明である。直径３mm以下の石英・長石・角閃石・雲母を含む。136は胴部突帯部分で、調整は内外面ナデである。径３mm以下の石英・長石･チャートを含む。137は深鉢口縁部で、内外面の調整は不明である。直径６mm以下の石英･長石・角閃石・雲母を含む。138は深鉢胴部で、突帯は剝離している。調整は頸部外面がナデ、胴部外面がケズリ、内面はナデである。直径３mm以下の石英・長石・チャートを含む。139は深鉢胴部で、調整は頸部外面がナデ、胴部外面がケズリ、内面はナデである。直径４mm以下の石英･長石･角閃石･雲母を含む。140は深鉢胴部で、調整は不明である。直径４mm以下の石英･長石･チャートを含む。141は深鉢口縁部で、内外面の調整はナデである。直径５mm以下の石英･長石･赤色斑粒を含む。142は深鉢口縁部で、内外面の調整はナデである。直径３mm以下の石英･長石を含む。143と同一個体の可能性がある。143は深鉢口縁部で、内外面の調整はナデである。直径３mm以下の石英・長石を含む。144は深鉢胴部で、内外面の調整は不明である。直径５mm以下の石英・長石・角閃石が含まれる。145は深鉢口縁部で、内外面の調整はナデである。直径



第29図　縄文土器実測図

４mm以下の石英・長石を含む。146は深鉢底部で、調整は外面が板状工具による強いハケあるいはケズリ、底部外面も同じで、内面はナデである。直径５mm以下の石英・長石・チャート・赤色斑粒を含む。147は浅鉢底部で調整は内外面ミガキである。直径４mm以下の石英・長石・チャートを含む。148は深鉢底部で、調整は外面ケズリ、底部外面が不明、内面はナデである。



第30図　縄文土器・石器実測図

直径５mm以下の石英・長石・赤色斑粒を含む。146と同一個体の可能性がある。149は浅鉢底部の可能性のある個体で、調整は不明である。直径３mm以下の石英･長石を含む。150は底部片で、調整は不明である。直径３mm以下の石英・長石・雲母を含む。151は底部片で、調整は不明である。直径７mm以下の石英・長石・チャートを含む。152は鉢口縁部で、内外面の調整は表面の剝離のため不明である。胎土には直径３mmの石英・長石・赤色斑粒を含む。153は深鉢胴部片で、調整は不明である。直径５mm以下の石英･長石･角閃石･雲母を含む。154は深鉢頸部で、調整は外面が板ナデ、内面は不明である。直径５mm以下の石英・長石・角閃石・雲母を含む。155は浅鉢口縁部で、調整は外面板ナデまたはミガキ、内面は板ナデである。直径２mm以下の石英・長石を含む。156は浅鉢口縁部で、調整は内外面ともに板状工具によるケズリである。直径３mm以下の石英・長石を含む。

土壙ＳＫ155（第30図157）　157は土器棺に用いられていた深鉢である。胴部片も多量に残されていたが、接点がなかったため図化できなかった。調整は頸部外面が板状工具による縦方向のナデ後横ナデ、体部外面がケズリ、内面はナデである。直径４mm以下の石英・長石・チャートを含んでいる。

溝ＳＤ265（第30図158 ～ 163）　弥生時代の溝に混入して出土した縄文土器である。158は浅鉢口縁部で、調整は外面ケズリ、内面は板状工具によるナデである。直径４mm以下の石英･長石･角閃石を含む。159は浅鉢口縁部で、調整は内外面不明で非常に摩滅している。他の突帯文期の縄文土器に比べ古い時期に位置づけられる。直径２mm以下の石英・長石・角閃石を含む。160は深鉢口縁部である。口唇部外面には突帯の剝がれた痕跡が残されている。調整は不明で、直径３mm以下の石英・長石・角閃石・雲母を含む。161は無文の鉢口縁部である。調整は内外面ナデ調整で、直径３mm以下の石英・長石・雲母を含む。162は深鉢口縁部で調整は内外面ナデである。直径３mm以下の石英・長石・雲母を含む。163は土器体部片で沈線で格子目状の模様がえがかれる。直径２mm以下の石英・長石を含む。

石器（第30図170 ～ 175）　170はサヌカイト製の剝片で、打面部側は折れ欠損している。折れ面の風化が他の剝離面と同じである。171はサヌカイト製の剝片で、背面には打面が残るポジティブな剝離面がある。母岩分割をした剝片を素材とした石核から剝離された剝片である。打面は自然面打面である。172は自然面打面を持つサヌカイト剝片で末端部は折れているが、風化面はすべて同じである。173は縦に長いサヌカイト製の剝片である。背腹両面の起伏が少なく、剝片が薄いことから両極剝離の可能性が指摘できる。174はサヌカイト製の剝片で、打面部側は折れ欠損している。折れ面の風化が他の剝離面と同じである。175はサヌカイト製剝片で、背腹の打点場ほぼ同じ位置にあったと考えられ両極打法によるものと想定できる。　（中川和哉）

４．小結

第１遺構面では、平安～鎌倉時代の遺構として、条里制地割に由来する坪境溝群を検出した。

坪境溝群は、上部が削平されているため新旧関係は不明であるが、複数の溝が重なっている状態で検出しており、幾度かの掘り直しが行われたことを示している。溝群の南側には、耕作溝と

は深さが異なる東西方向の溝ＳＤ251があり、この時期の排水溝であったと考えられる。

また、平安時代中期の掘立柱建物跡２棟は、西に隣接する第６次調査の掘立柱建物跡と同じ主軸方向をもつ。同時期に同じ方位をもつ建物が隣接して建てられており、この平安時代の集落がさらに東に広がることを示唆する。

第２遺構面では、古墳時代中期末の古墳を新たに４基検出した。これまでの調査でみつかった古墳を合わせると６基になり、木津川の自然堤防上に多くの古墳が築かれていたことがわかった。

これまでの調査成果において、古墳時代中期の掘立柱建物跡や竪穴式住居跡が遺跡の南側で検出されていた。また、今回、遺跡の北東側で同時期と判断される古墳時代中期末の小規模な古墳が６基確認できたことから、遺跡の北東部に古墳群が存在することが想定できる。

弥生時代については、調査地の北部で南北方向の溝ＳＤ265を検出し、この溝が前期から後期に掘り直して利用されていることが出土遺物からみてとれる。この溝はさらに東へ延びることも確認した。（村田和弘）

（２）第10次調査（平成23年度）

１．調査の概要

平成23年度の発掘調査は、平成22年度第９次調査区の南延長部に設定した調査区で実施した。西側は平成14年度第６次調査区と隣接し、南側では平成12年度第４次調査９トレンチと部分的に重複する。遺構面までの深さが約３ｍと深いため、掘削には安全な勾配を設け、中間に平坦面を設けて２段掘りを実施して安全に努めた。

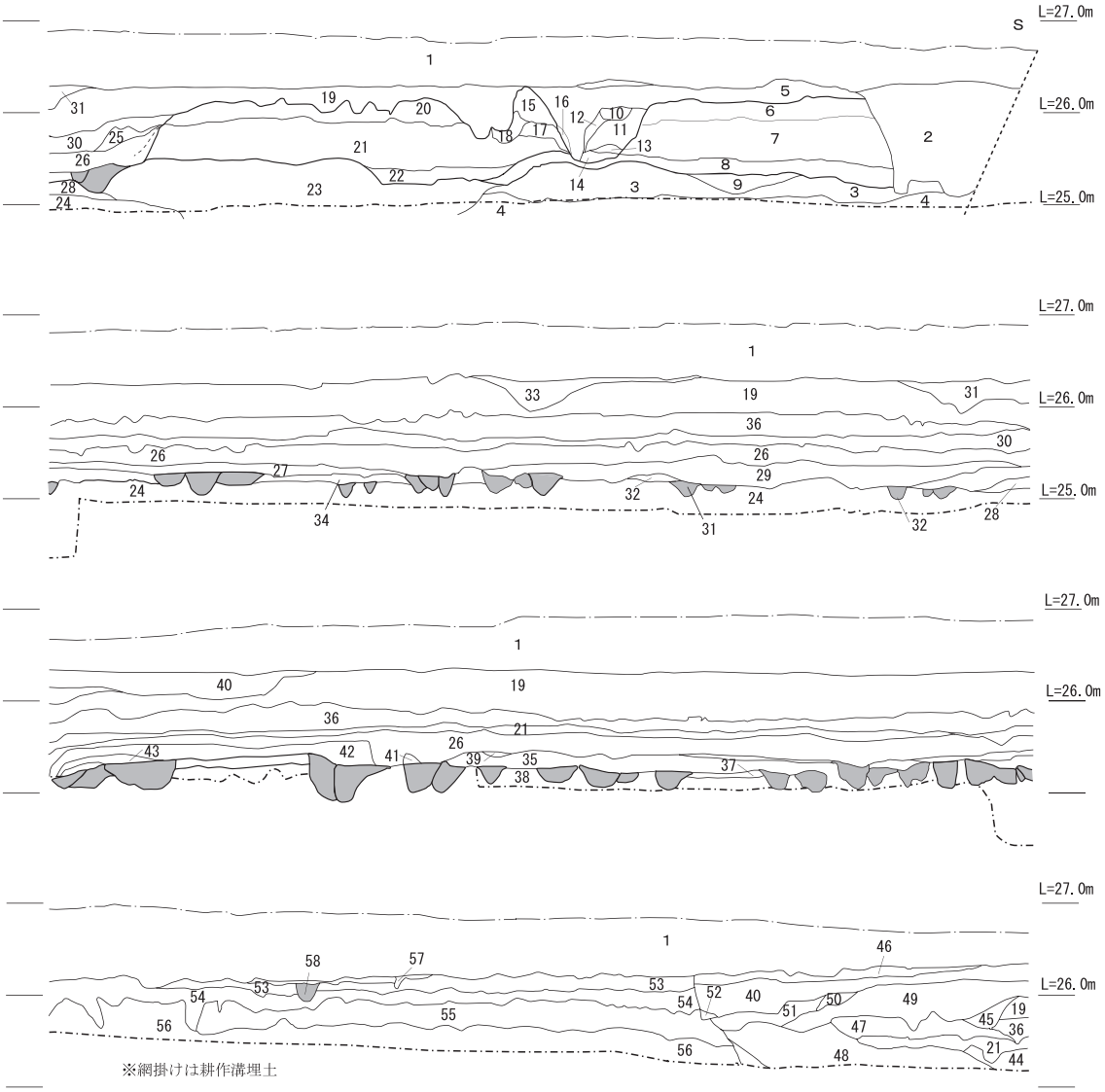
出土遺物は、弥生時代後期、平安時代前・中期の遺物をわずかに含むが、12世紀末～14世紀、古墳時代中期末、縄文時代晩期の３時期のものが主体である。時期や性格が明確な遺構は、12世紀末～14世紀のものと古墳時代中期末のものに限られる。

２．層位と層序

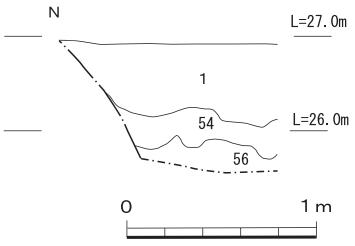
発掘調査地の標高は約28ｍである。現在の地表面は約1.7ｍの客土からなる整地層であり、この整地層は施設建設に伴うものである。整地層下面では、旧地表と考えられる未分解の葦類を含む草木類が確認できた。旧地表面の標高は約26.3ｍである。

第31図は調査区東壁の断面実測図である。２段掘りのうち上段の１段目の土層断面は盛り土のみで構成されるため割愛し、１段目より下層の土層のみを提示している。また、調査区東断面の水平方向の長さが長いため、水平方向に対し鉛直方向が1.5倍になるよう縮尺を変更し、地層・地形の特徴が見やすくなるように替えている。

土層の堆積状況について断面図の南側から説明したい。第１層は盛り土でブロック状の粘土やコンクリート片などを含んでいる。第２層は、第４次調査の９トレンチを埋め戻した埋土である。第６・７層は島畠造成のために盛り上げられた土層で、砂の含有量が多く、マンガンと考えられ



1．盛土
2．第２次調査９トレンチ埋土
3．にぶい黄色（2.5Y1/3）粘砂質土
4．褐灰色（10YR4/1）粘砂層（緑色部分有り）
5．にぶい黄色（2.5Y5/2）砂層
6．褐色（7.5YR5/4）砂質土
7．にぶい黄褐色（10YR5/3）砂質土
8．褐灰色（7.5YR4/4）粘砂層
9．にぶい黄褐色（10YR5/4）粘砂質土
10．褐灰色（16YR4/1）砂層（ラミナ）
11．灰黄褐色（10YR4/2）レキ混砂層
12．にぶい黄褐色（10YR4/3）砂質土
13．黒褐色（10YR3/2）粘砂質土
14．褐灰色（10YR5/1）粘砂質土
15．褐灰色（5YR5/1）砂層（ラミナ）
16．灰黄褐色（10YR4/2）砂層
17．にぶい黄褐色（10YR4/3）砂質土
18．灰褐色（7.5YR4/2）砂層～砂質土
19．褐色（10YR3/3）砂質土
～褐灰色（10YR5/1）粘砂～砂層
20．褐色（7.5YR5/4）砂質土
21．にぶい黄褐色（10YR5/3）砂質土
22．褐褐色（5YR5/1）粘砂質土
23．暗褐色（10YR3/3）粘質土
24．褐灰色（10YR4/1）粘質土
25．灰黄色（2.5Y6/2）砂層（ラミナ構造）
26．灰色（5Y5/1）砂質土、黒褐色（7.5YR3/2）
マンガンを含む
27．褐色（7.5YR5/4）砂質土
28．灰オリーブ（5Y4/2）粘質土
29．灰色（10Y4/1）砂質土
30．灰色（7.5Y4/1）砂層（横方向のラミナ）
31．灰色（7.5Y4/1）砂層
（φ５cmのレキを多く含む）
32．灰オリーブ（7.5Y5/2）粘土混砂質土
33．灰オリーブ（7.5Y5/2）砂層
34．灰色（5Y5/1）粘質土
35．灰色（10Y5/1）レキ混砂質土
36．灰色（7.5Y5/1）粘砂質土
37．灰オリーブ（5Y5/2）砂質土（細粒）
38．暗緑灰色（10G4/1）粘質土
39．灰オリーブ（7.5Y5/2）砂質土
40．灰オリーブ（7.5Y5/2）砂層
41．灰黄色（2.5Y6/2）砂質土
42．オリーブ灰色（5GY6/1）砂質土
43．黄灰色（2.5Y6/1）粘質土
44．灰オリーブ（5Y5/2）砂質土
45．暗灰黄色（2.5Y5/2）粘土混砂層
46．暗オリーブ灰色（2.5GY4/1）砂質土
47．灰色（7.5Y5/1）砂層
48．黄灰色（2.5Y5/1）粘砂質土



49．オリーブ灰色（2.5GY5/1）砂層
50．灰オリーブ（5Y5/3）砂層
51．黄褐色（2.5Y5/3）粘砂質土混、
灰色（5Y5/1）砂質土
52．灰色（7.5Y5/1）砂質土
53．灰オリーブ（7.5Y6/2）砂質土
54．灰色（7.5Y5/1）砂質土
55．にぶい黄褐色（10YR5/4）砂質土
56．褐色（10YR4/4）粘質土
57．灰色（10Y5/1）砂層（根多し）
58．にぶい黄色（2.5Y6/3）砂層

第31図　第10次東壁土層断面図

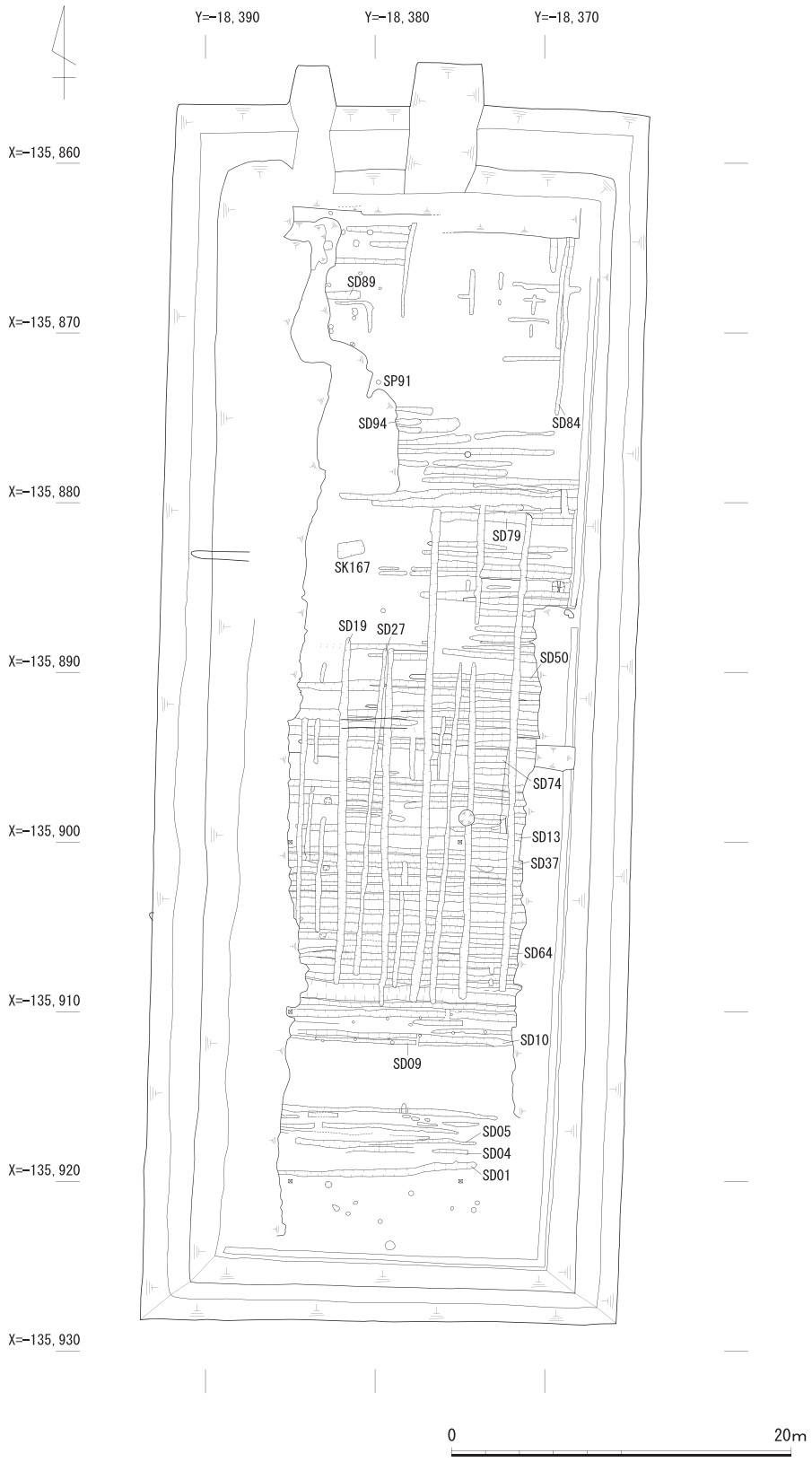
る褐色の斑粒が多く認められる。これらの層には、細片の土器が集中することなく散発的にどの高さからも出土することから、島畠を造る際に他の時期の包含層や遺構面を破壊して盛り土したものと考えられる。島畠(第６・７層)の北側には、溝状の落ち込みがある。洪水による砂層である第５層や南側の島畠から崩落して堆積したと考えられる第10～14層で埋まっている。今回の調査で検出した中世の坪境溝(第９層)と溝心々間の距離で２ｍ離れた位置で掘削されていることがわかる。第15～18層はラミナ状の構造をもつ砂層や砂礫層で、第19層の落ち込み内の堆積とあわせて考えると、洪水で埋まる度に何度も掘り返されていることが窺える。第20・21層は島畠造成の盛り土と考えられる。その北側では第19層の洪水性の堆積層があり、島畠部分に近い南側では細粒であるが、島畠から離れた北側に行くに従い粗粒になっていく。その下の第40層は横方向のラミナ構造をもつ砂層で、流れの中で堆積したことを示している。中世の溝群を検出した層は第24・53層の上面で、これらの層は、第40層に比べて細粒の堆積物であることから、一つの画期が見出せる。第19層より下で中世溝の検出面までの堆積層は、調査区の北端から約12.5ｍの地点で島畠の造成土と考えられる第57・58層へと変わる。第26・30・36層は島畠の盛り土と盛り土の間を埋めるように堆積しており、この東壁断面の南から13m、北から12.5ｍの間のみ中世の耕作溝群は良好に残存していた。調査区南側では、耕作溝群より古い坪境溝の埋土にあたる第９層の掘削面が耕作溝群掘り込み面と約40cmの比高があり、中世段階には島畠の下層においても地形が高いことがわかる。また、第９次調査では、北側の島畠部分(第20～21層)も耕作溝群より古い遺構が高い位置で検出されている。こうした島畠の下層でも耕作溝群が検出されているが、いずれも検出面からの深さが浅いことや、検出した数が少ないことから、後世に削られたものと考えられる。これらのことから、耕作溝群が作られた範囲は、溝が掘削された時点から低い位置にあるものと推定される。それゆえ、古い平安時代以前の遺構は存在していないものと考えられる。

遺構検出面は二面あり、第１遺構面では主として中世耕作溝群を検出した。第２遺構面では、中世・古墳時代の遺構を検出した。南側の第１遺構面では、北側の第２遺構面と同じ時期の遺構があり、南側の第２遺構面では風倒木痕しか検出できなかった。縄文時代の遺物などが遺構検出面で散見されたことから、下層に縄文時代の遺構面が存在することが想定された。そのため、調査区の南部において、第２遺構面より下の土層確認用のサブトレンチを入れて土層の観察をしたところ、炭化物が凝集する土層が確認できたため、部分的に面的に拡げて調査を実施した。縄文時代の調査時の地層については縄文時代の遺構の部分で説明したい。

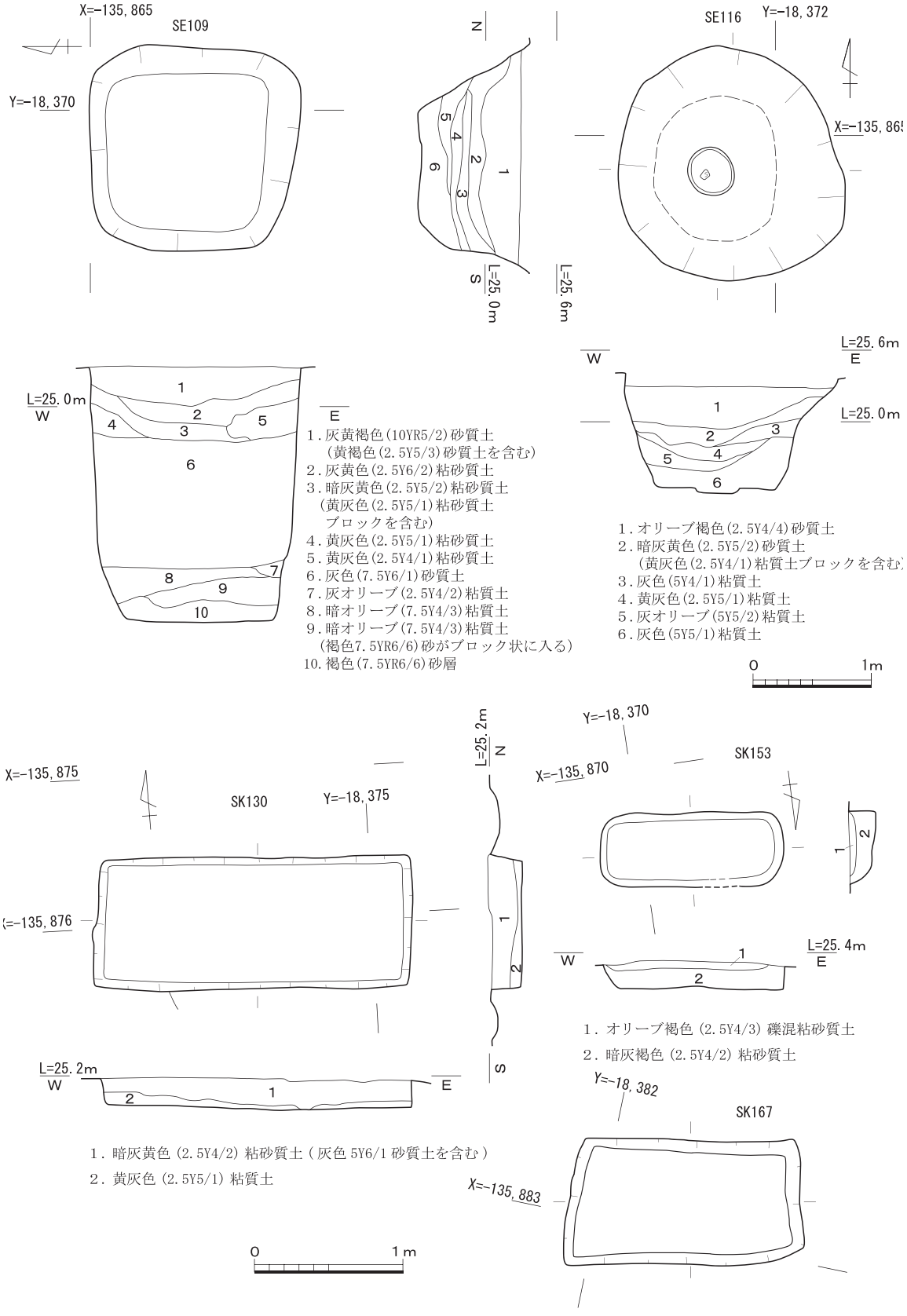
３．検出遺構

(１)中世(第36図)

井戸ＳＥ109(第33図)　平面形が方形を呈する井戸跡で、調査区北辺で検出した。井戸枠等の内部施設やその痕跡を検出することはできなかった。井戸の底部は礫層に達しており、水脈まで到達していたものと思われる。礫層部分やその上位の粘土質の地層などに水が溜まることによる



第32図　第10次第１遺構面遺構配置図



第33図　井戸ＳＥ109・116、土坑ＳＫ130・153実測図

抉り込みなどが顕著に認められないことから、本来は井戸枠等の内部施設があり、廃棄時に丁寧に抜き取られたものと考えられる。出土遺物には土師器皿・瓦器椀・灰釉陶器（第40図１～５）があり、13世紀後葉のものが中心である。井戸の一辺の長さは1.7m、深さは2.2mを測る。

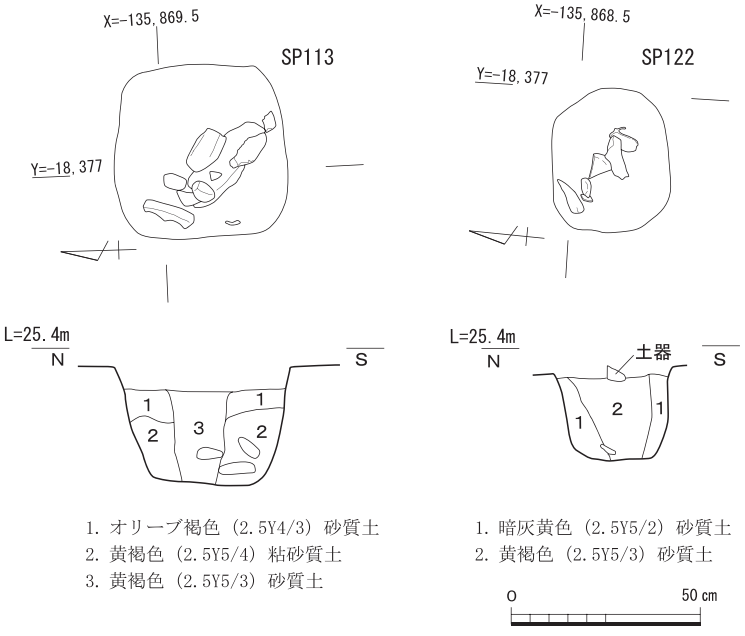
井戸ＳＥ116（第33図）　調査区北辺のＳＥ109の西側に隣接して検出した。平面形が円形を呈する井戸跡である。井戸の底部は湧水層となる礫層まで達することなくシルト質の層で終わっていることから、溜め井戸であった可能性が高い。井戸底部には直径40cmの円形の落ち込みがあり、曲物が据えられていた可能性もある。出土遺物には土師器皿・瓦器椀（第40図６～９）がある。井戸の直径は２m、深さは１mを測る。

土坑ＳＫ130（第33図）　耕作溝群を検出した面を、重機掘削によって下げた時点で検出した長方形の土坑である。平面形から土壙墓の可能性も認められたので、慎重に棺痕跡の検出に努めたが確認できなかった。土坑の長軸はほぼ真東西方向を向き、周辺の地割と同じである。出土遺物はなく、時期は不明である。長辺2.1m、短辺0.9m、深さ20cmを測る。

土坑ＳＫ153（第33図）　調査区北側で検出した隅丸長方形の土坑である。出土遺物はなく遺構の年代は不明であるが、他の長方形の土坑が中世に造られた可能性が高いことから、中世のものとみておく。土坑の長辺は1.2m、短辺0.5m、深さ20cmを測る。

土坑ＳＫ167（第33図）　耕作溝群と同じ面で検出した長方形を呈する土坑である。平面形から土壙墓の可能性も考えられ、慎重に棺痕跡の検出に努めたが確認できなかった。出土遺物はなく、時期は不明である。長辺は1.5m、短辺0.9m、深さ20cmを測る。

坪境溝ＳＤ02（第35図）　ＳＤ02を検出した調査区南側ではすでに第１遺構面検出時に、もともと他の場所より高くなっており、すでに下位の遺構面まで削られていた。そのため第１遺構面測量時にはＳＤ01を残すため掘削を行わず、重機による下層への掘り下げ時に、南端部はすでに下層が露呈しており他の下層の遺構と一緒に掘削を進めた。多くの遺物が出土したが、その多くが検出した溝の東側で出土した。出土遺物には土師器皿・瓦器皿・瓦器椀・白磁椀・土師質の羽釜などがある。土師器皿や瓦器椀は完形率が高く、その場で廃棄されたような出土状態であったが、白磁椀や羽釜についてはそうではない。遺物は12世紀末～13世紀初頭のもので、後述の耕作溝群よりも古い時期のものである。溝の幅約３m、深



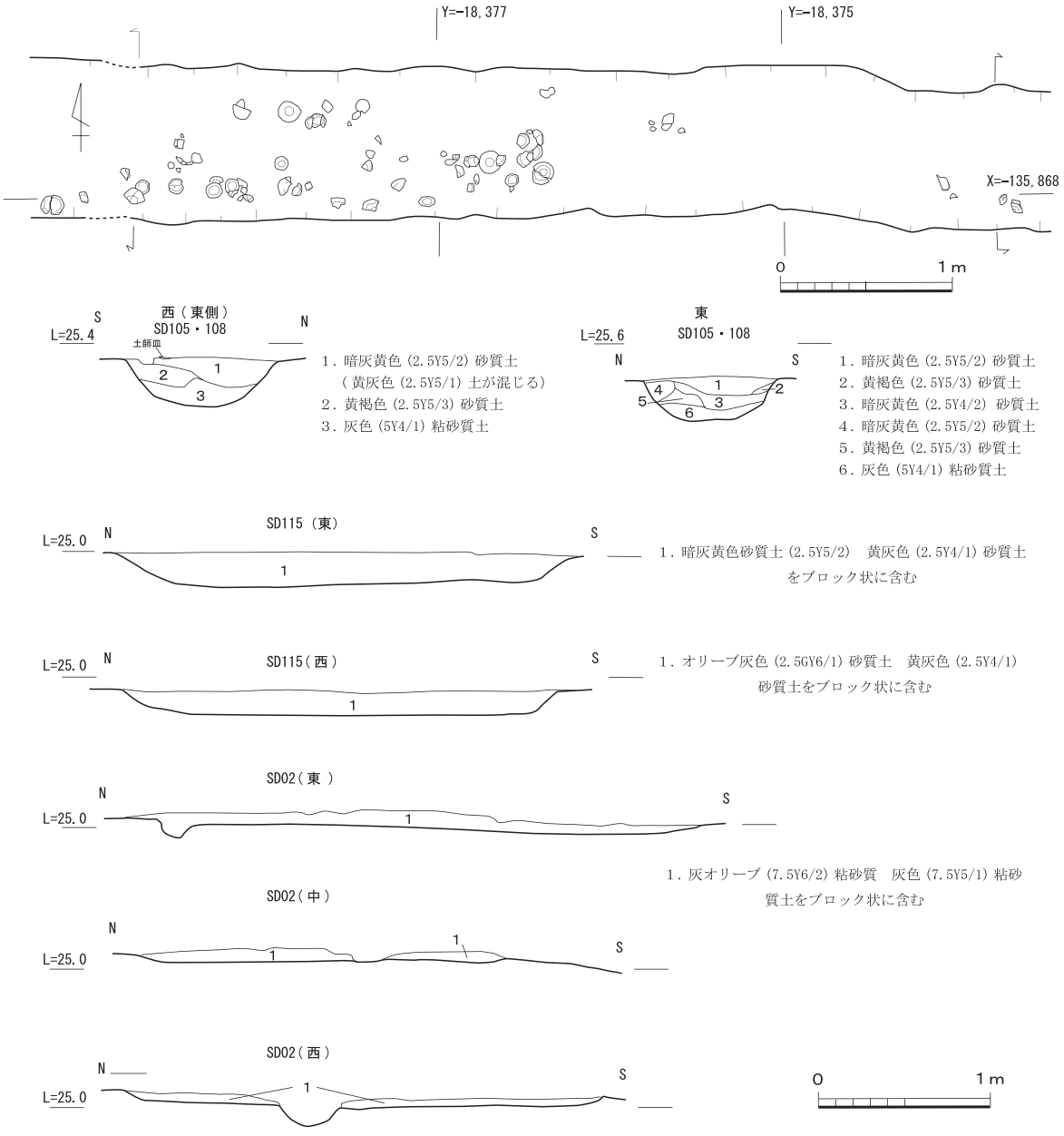
第34図　柱穴ＳＰ113・122実測図

さ約10cm、検出長は15mを測る。

柱穴ＳＰ91　中央部付近で、耕作溝群検出面で検出した柱穴跡である。平面形が円形で、中央部には土器片が立った状態で出土した。直径20cm、深さ25cmを測る。出土遺物には須恵器捏ね鉢がある。

柱穴ＳＰ113(第34図)　平面形が隅丸方形を呈し、掘形底部には礎板の代わりと考えられる板状の礫が据えられていた。柱掘形は一辺45cm、深さ30cmである。柱掘形内からは土師器皿・瓦器椀・須恵器捏ね鉢が出土している。13世紀後葉の年代が与えられる。

柱穴ＳＰ122(第34図)　平面形が隅丸長方形を呈する柱跡である。柱掘形は長辺40cm、短辺30cm、深さ25cmである。出土遺物には土師質の羽釜、土師器皿があり、羽釜が柱抜き取り後に



第35図　溝ＳＤ02・105・108・115実測図

投入されたもので、土師器皿は掘形内からの出土である。

溝ＳＤ115　中世耕作溝面を１段掘り下げて検出した幅の広い溝で、東端が調査区内で終わる形状を示す。出土遺物はほとんどなく、瓦器片があるだけであるが、混入の可能性もあり時期は特定できない。埋土に薄い砂層を挟むなど中世の溝群との類似性から、中世に位置づけた。溝の主軸は西で４°北に振り、検出長13m、幅2.5m、深さ20cmを測る。

耕作溝群（第32図）

調査区の中央部から南部にかけて、東西および南北方向の耕作溝を多数検出した。調査区北側では耕作溝はかなりまばらになる。遺構の切り合い関係から、東西方向の溝より南北方向の溝が新しいことがわかる。溝の埋土には、細粒の砂層を挟んでいる特徴が認められる。この耕作溝群については、時期の判明するものを取り上げて説明する。

溝ＳＤ01　調査区南端で検出した東西方向の耕作溝である。坪境溝ＳＤ02の中央部に穿たれたもので、他の溝に比べ深く、坪境溝を踏襲した溝の可能性が指摘できる。幅約0.2 ～ 0.4m、深さ約0.5 ～ 0.9m、検出長は12.2mを測る。土師器皿・瓦器椀などが出土している（第41図18 ～ 34・74）。13世紀後半頃の遺構である。

溝ＳＤ04　調査区南端で検出した東西方向の耕作溝である。ＳＤ01の北側に平行して検出した。幅約0.2 ～ 0.4m、深さ約0.2 ～ 0.4m、検出長は7.1mを測る。土師器皿・瓦器椀などが出土している（第42図78 ～ 84・88）。13世紀後半頃の遺構である。

溝ＳＤ05　調査区南端で検出した東西方向の耕作溝である。ＳＤ01・04の北側に平行して検出した。幅約0.1 ～ 0.3m、深さ約0.2 ～ 0.3m、検出長は10.5mを測る。

溝ＳＤ09　調査区南端部で検出した東西方向の耕作溝である。幅約0.2m、深さ約0.1m、検出長8.9mを測る。土師器皿が出土している（第42図85）。

溝ＳＤ10　調査区南端部で検出した東西方向の耕作溝である。ＳＤ09の北側に平行しており、東端で合流している。幅約0.35 ～ 0.65m、深さ約10 ～ 30cm、検出長12.5mを測る。土師器皿が出土している（第42図86）。

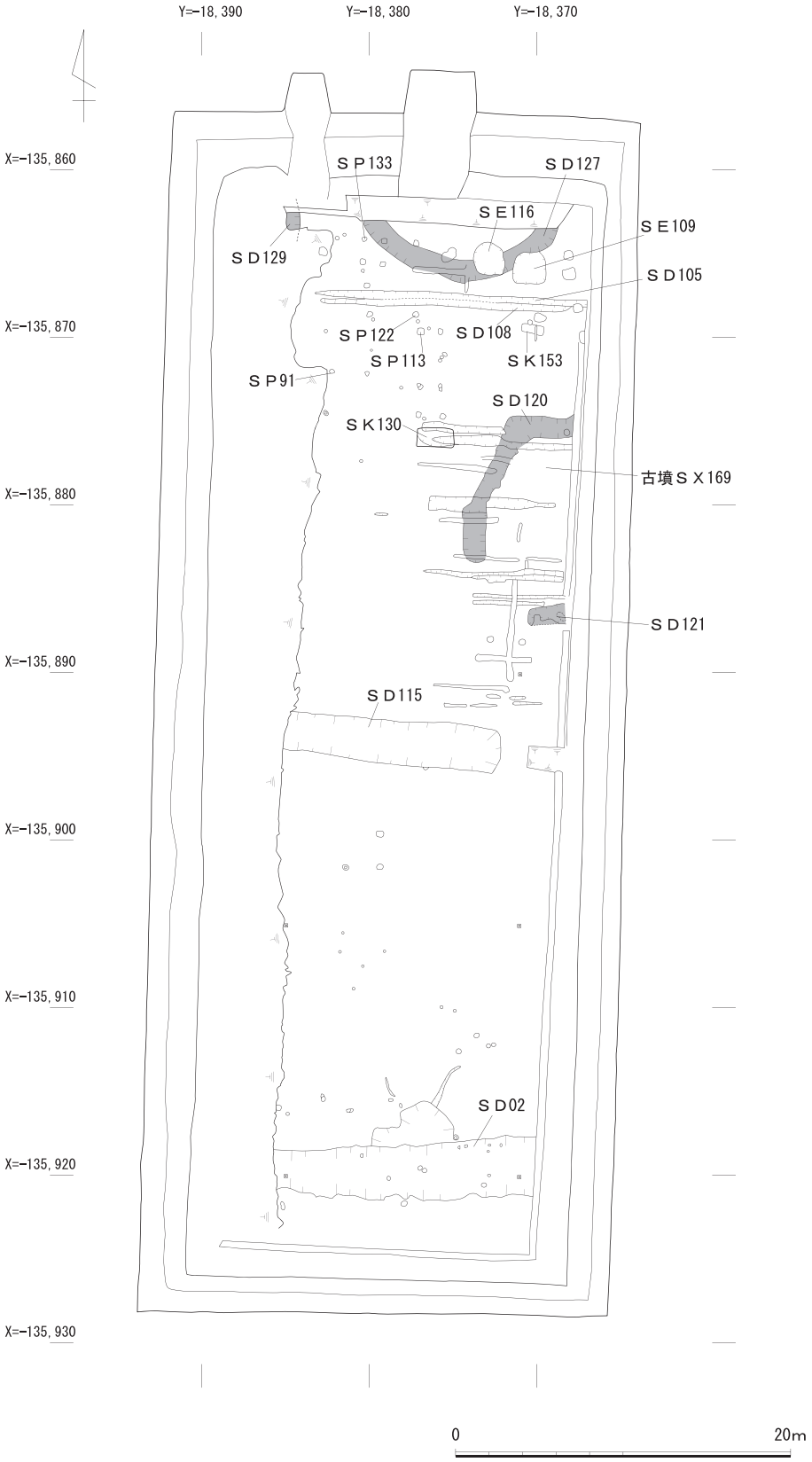
溝ＳＤ13　調査区中央部で検出した東西方向の耕作溝である。幅約0.3 ～ 0.7m、深さ約10 ～ 40cm、検出長は13.3mを測る。土師器皿が出土している（第42図87）。

溝ＳＤ19　調査区中央部西よりで検出した南北方向の耕作溝である。幅約0.25 ～ 0.6m、深さ約10 ～ 20cm、検出長20.5mを測る。瓦器椀が出土している（第42図91）。

溝ＳＤ27　調査区中央部西よりで検出した南北方向の耕作溝である。ＳＤ19のすぐ東隣にあり、北がだんだんと東側にひろがっている。幅約0.25m、深さ約10 ～ 20cm、検出長19.3mをはかる。瓦質の鉢が出土している（第42図94）。

溝ＳＤ44　調査区中央部で検出した東西方向の耕作溝である。ＳＤ13とほぼ平行している。幅約0.35m、深さ約20 ～ 40cm、検出長13.7mを測る。

溝ＳＤ50　調査区中央部で検出した東西方向の耕作溝で、ＳＤ27に切られている。幅約0.3 ～ 0.5m、深さ約10 ～ cm、検出長は10.2mを測る。古瀬戸灰釉椀が出土している（第42図95）。



第36図　第10次第２遺構面遺構配置図

溝ＳＤ64　調査区南側で検出した東西方向の耕作溝である。ＳＤ09、ＳＤ10にほぼ平行している幅約0.15 ～ 0.3m、深さ約30 ～ 50cm、検出長12.8mを測る。須恵器蓋が出土した(第42図104)。

溝ＳＤ74　調査区中央部で検出した東西方向の耕作溝である。幅約0.5m、深さ約50cm、検出長約1.8mを測る。瓦器椀が出土している(第42図99)。

溝ＳＤ79　調査区北側で検出した東西方向の耕作溝である。幅約0.4 ～ 0.6m、深さ約10 ～ 60cm、検出長7.8mを測る。青磁椀高台が出土している(第42図93)。

溝ＳＤ84　調査区北端部東よりで検出した南北方向の耕作溝である。幅約0.2m、深さ約10 ～ 40cm、検出長10.4mを測る。瓦質擂鉢が出土している(第42図105)。

溝ＳＤ89　調査区北端部西よりで検出した東西方向の耕作溝である。幅約0.5m、深さ約80cm、検出長2.1mを測る。瓦器椀が出土している(第42図100)。

溝ＳＤ94　調査区北端部で検出した東西方向の耕作溝である。幅約0.4m、深さ約20 ～ 30cm、検出長1.5mを測る。瓦器椀が出土している(第42図101)。

溝ＳＤ105・108(第36図)　調査区北端部で検出した東西方向の溝である。他の溝と同じような「Ｕ」字状の形状を示すが、ＳＤ105とＳＤ108は近接して掘られたのち１本の溝として機能したようである。そのため２つの溝の前後関係は不明である。土師器の皿と瓦器椀が完全な形でまとまって出土した(第35図)。土師質の羽釜の破片と考えられるものは２つの溝がそれぞれ独立していた時期の堆積土からの出土した。皿・椀などの残存状態や出土量が多の遺構に比べて良好であるため、耕作溝というよりも生活空間を区画した溝の可能性が高い。幅約0.4m、深さ約25cm、検出長1.5mを測る。土師器皿・瓦器椀が出土している(第42図106 ～ 142)。

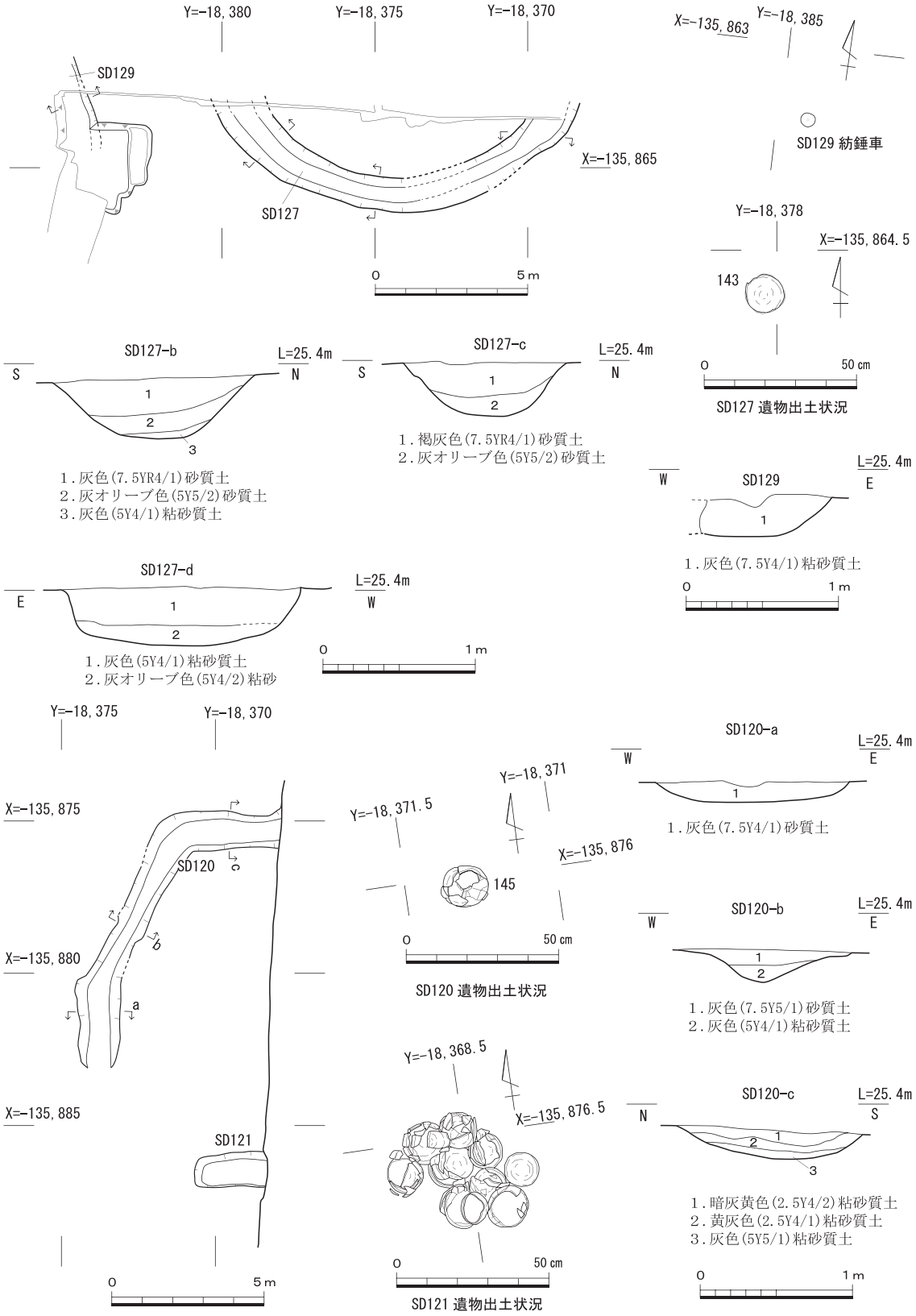
②古墳時代

古墳ＳＸ169(第37図)　ＳＤ120・121で区画された古墳で、東半分が調査区外となる。検出した溝を反転すると八角形を呈するが、第９次調査では非常に変形した方墳を検出していることから、不整形な方墳ないし円墳と判断する。主体部は残在していなかった。

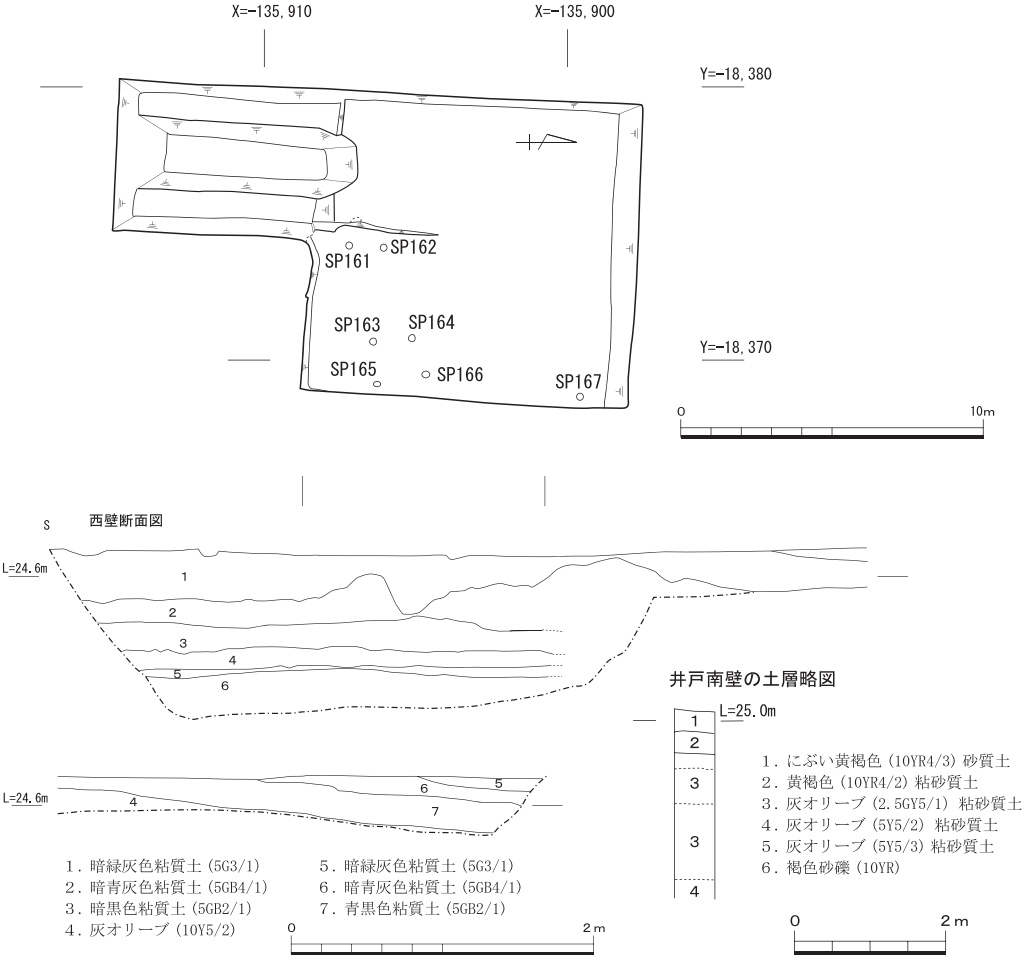
古墳周溝ＳＤ120(第37図)　古墳西側及び北側の溝である。角度が120°ほどの屈曲が２か所で確認できた。屈曲部中央で土師器壺(第43図145)が出土している。各辺の長さは、反時計回りで北から３m、5.5m、２mで幅は1.3m、深さ25cmを測る。

古墳周溝ＳＤ121(第37図)　ＳＤ120が南部で削平されて途絶えているが、南辺の中で深い部分が検出されたものと考えられる。西側は浅くなり途切れ、東側は調査区外に延びる。溝中央部では須恵器杯身・杯蓋を主体とする土器が集積して出土した。杯身と杯蓋は正位置で出土し、組み合わされているものが多かった。そのほかに甕、土師器壺があった(第43図144・146 ～ 162)。溝の検出長は約2.5m、幅1.1m、深さ10cmを測る。

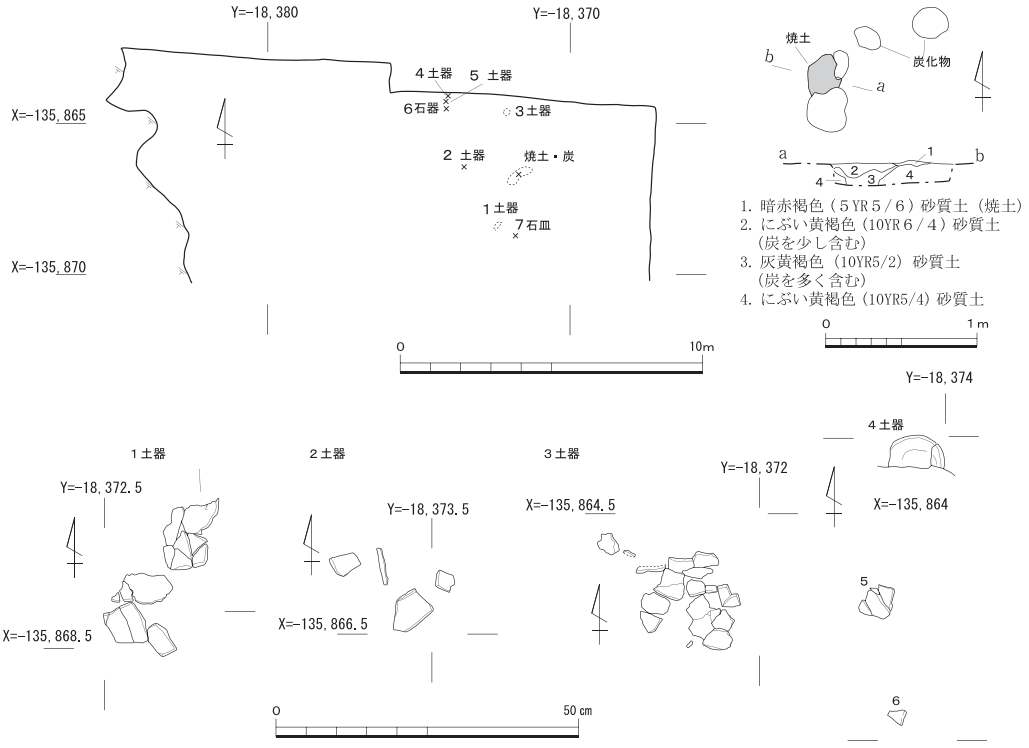
古墳周溝ＳＤ127(第37図)　調査区北側で検出した円弧状の溝で、第９次調査で検出した円墳ＳＸ１の南側周溝に当たる。出土遺物には土師器鉢がある(第43図143)。ＳＸ１の直径は約11mになる。周溝の断面は「Ｕ」字状を呈し、幅１m、深さ40cmを測る。



第37図　溝ＳＤ120・121実測図



第38図　縄文時代文化層確認用調査区平・断面図



第39図　縄文土器出土状況図

古墳周溝ＳＤ129（第37図）　調査区北西隅で検出した溝である。埋土の色調や形状から古墳の周溝と考えた。第６次調査で検出されていないことから直径10m以下の古墳と考えられる。溝内部からは紡錘車が出土している（第46図193）。検出長２ｍ、幅１ｍ以上、深さ25cmである。

③縄文時代

縄文時代の遺物は、調査地北側で第２遺構面を精査中に他の時代の遺物と共に出土していた。そのため、北側についてはさらに15cmほど掘削し遺構精査を試みたところ、第38・39図で示したように、土器や石器が標高25.1m付近で張り付いたような状態で検出できた。中には焼土もあり、土器も外面が下側になるように残存していたことから、縄文時代の生活面または遺構の床面である可能性も想定された。縄文土器はいずれも晩期のものと判断される。

第38図は層位の項で述べたように、下層の土層・遺構の有無を確認するためのサブトレンチで認められた炭化物の凝集層（第７層下部）の性格を明らかにする目的で、10×10mの面的な調査を行うためのトレンチと５×７ｍの下層の土層観察用の深掘りをしたトレンチを接続して設けた。西壁の土層観察では、北に向かって地層の堆積が下がっていくことがわかり、ラミナ状の堆積を見せる部分や砂層が含まれていることが観察された。地層は部分によって粒度や色調が異なっている。第２層上面が傾斜していく部分で焼土を検出した。その層理面を精査したところ、中世の遺構埋土をもつ数か所の杭跡を検出しただけで、遺構・遺物は検出できなかった。焼土については性格が不明であるが、炭粒を含む部分が遺跡内の同層位に全体的に広がることから、人工的な火入れや自然に発生した野火の可能性が指摘できる。調査区北部の縄文時代遺構検出面よりは下位に位置づけられる。

４．出土遺物

①中世

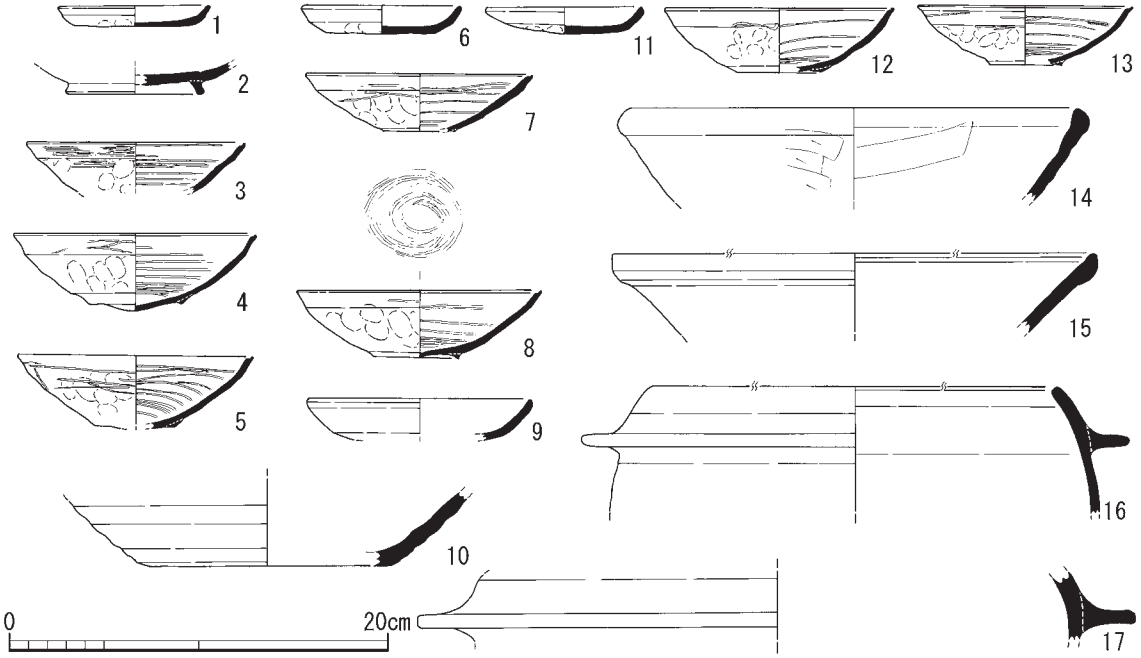
井戸ＳＥ109（第40図１～５）　１は土師器の皿である。２は灰釉陶器の椀底部である。他の遺物より古いもので混入と考えられる。３～５は大和型瓦器椀である。いずれも13世紀中頃の年代が与えられる。

井戸ＳＥ116（第40図６～８）　６は土師器皿である。７・８は瓦器椀である。いずれも13世紀中頃の年代が与えられる。

柱穴ＳＰ91（第40図10・14）　10は東播系須恵器片口鉢の底部である。14は東播系の須恵器片口鉢の口縁部である。12世紀末から13世紀初頭の年代が位置づけられる。

柱穴ＳＰ113（第40図９・12・13・15・16）　９は土師器皿である。12・13は瓦器椀である。15は須恵器片口鉢口縁部である。16は土師器の羽釜である。ＳＰ122の破片と接合する。鍔下面から胴部外面は煤によって黒色を呈する。胎土には直径４mm以下のチャート・石英・長石の砂粒を含む。

柱穴ＳＰ122（第40図11・17）　11は土師器皿である。17は土師器の羽釜である。胎土には直径５mm以下のチャート・石英・長石の砂粒を含む。



第40図　井戸及び柱穴出土遺物実測図

溝ＳＤ01（第41図18 ～ 34・74）　18 ～ 23は土師器皿である。18は口縁端部が外反し、深い器形を示す。胎土も他の土師器皿に比べ白く色調や胎土が異なる。24は瓦器皿である。25 ～ 34は大和型の瓦器椀である。74は上面に布目、下面に縄タタキをもつ瓦片である。

溝ＳＤ02（第41図35 ～ 73・75 ～ 77）　35 ～ 50は土師器皿である。51 ～ 54は瓦器皿である。55は白磁椀底部である。56 ～ 71は大和型瓦器椀である。72は土師器甕の口縁部である。73・75 ～ 77は土師器の羽釜である。73・76・77は直径３mm以下の石英・長石・雲母を含み、75は直径３mm以下の石英・長石・雲母・チャートを含む。

溝ＳＤ04（第42図78 ～ 84・88）　78 ～ 80・83は土師器皿である。82は瓦器皿である。81・84は瓦器椀である。88は東播系須恵器片口鉢の口縁部である。

溝ＳＤ09（第42図85）　85は土師器皿である。

溝ＳＤ10（第42図86）　86は土師器皿である。

溝ＳＤ12（第42図89）　89は土師器甕口縁部である。

溝ＳＤ13（第42図87）　87は土師器皿である。

溝ＳＤ19（第42図91）　91は瓦器椀底部で、摩滅のため内外面の調整は不明である。

溝ＳＤ27（第42図94）　94は瓦質の鉢口縁部である。

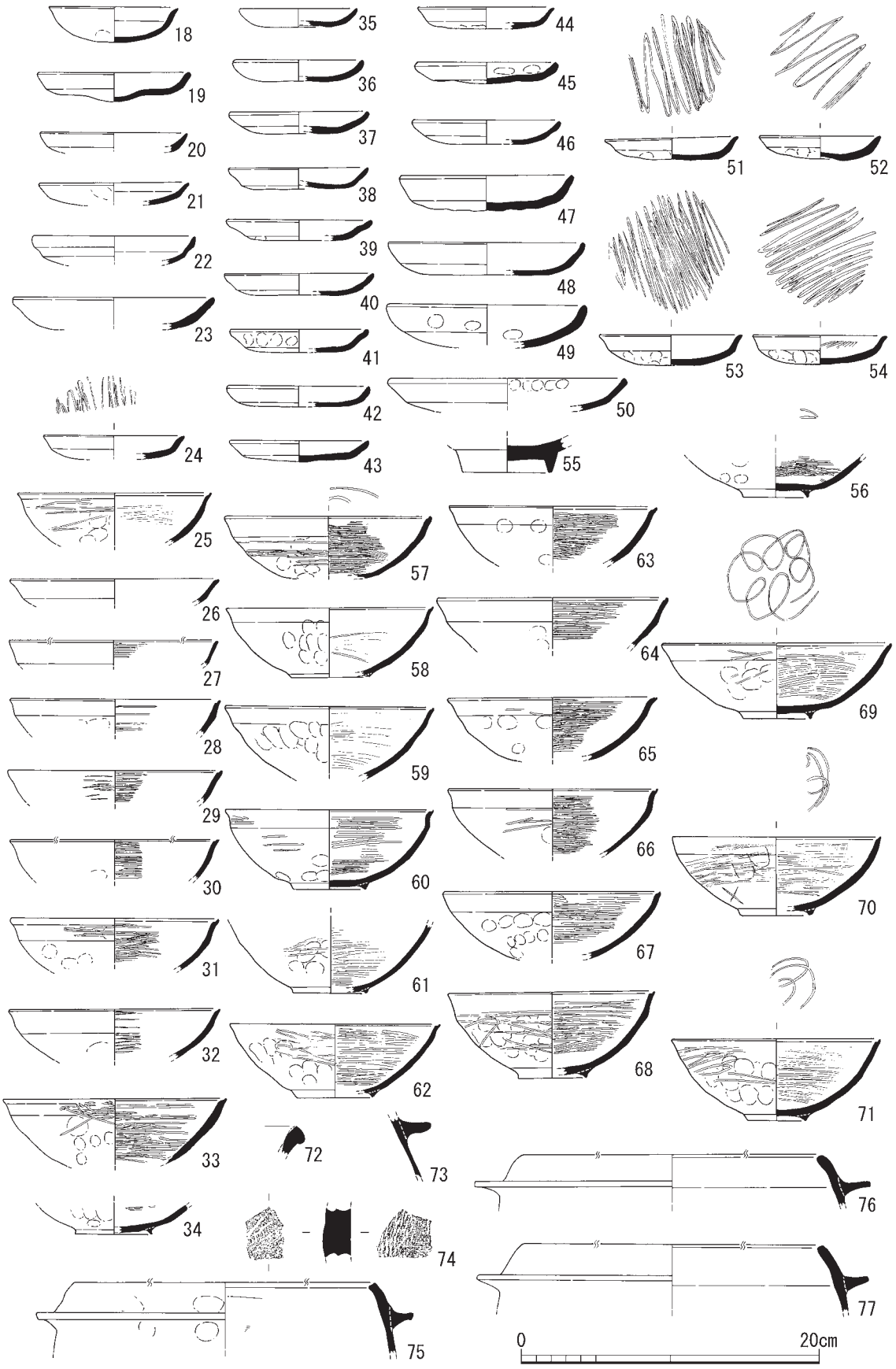
溝ＳＤ41（第42図98）　98は土師器皿である。

溝ＳＤ44（第42図92）　92は須恵器鉢口縁部である。

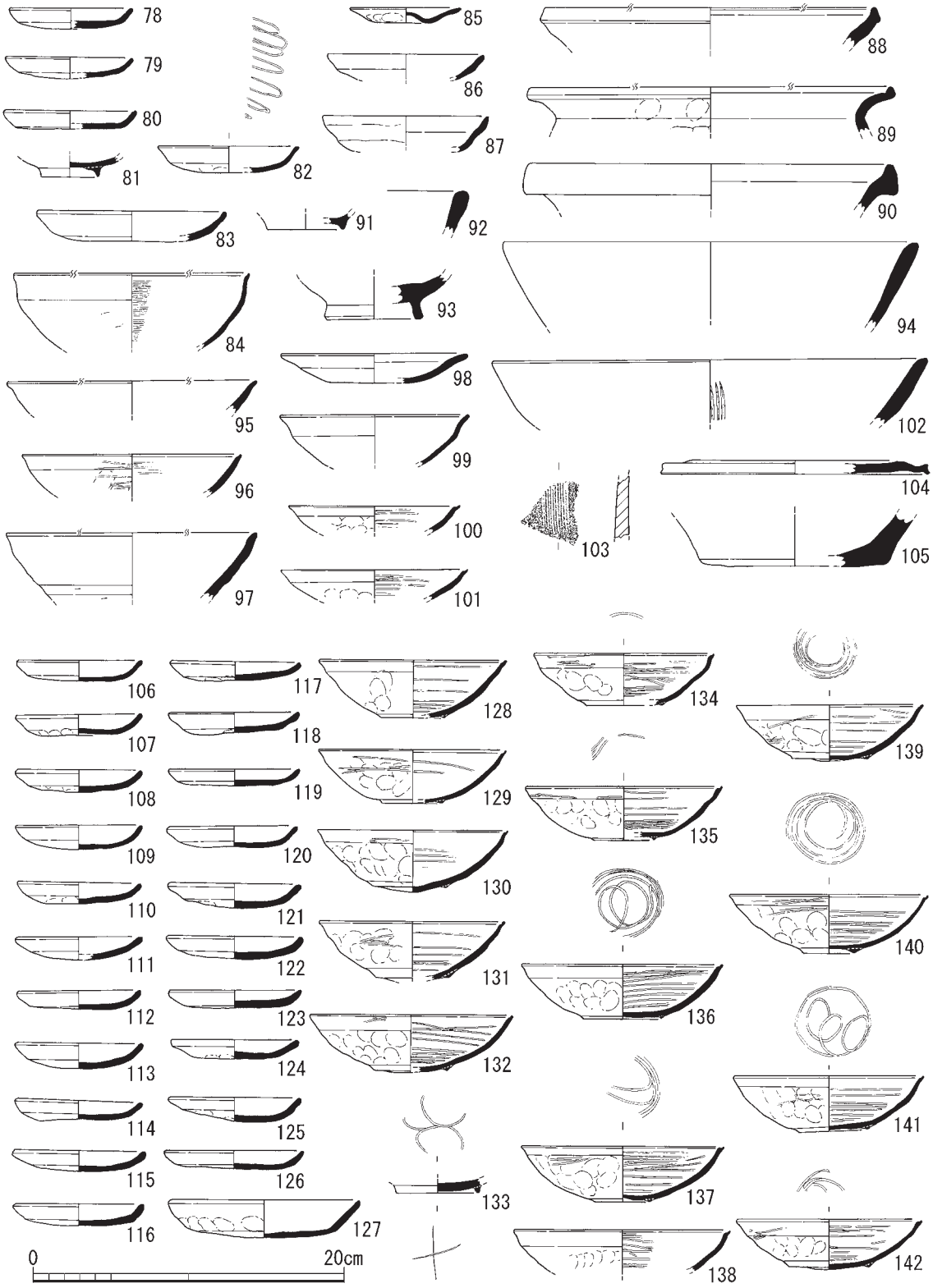
溝ＳＤ50（第42図95）　95は古瀬戸灰釉椀である。

溝ＳＤ56（第42図90）　90は東播系須恵器片口鉢の口縁部である。

溝ＳＤ64（第42図104）　104は須恵器蓋である。平安時代中頃以前の遺物で、同時期の遺物は瓦を除いてほとんど出土していない。



第41図　地境溝SD01・02出土遺物実測図



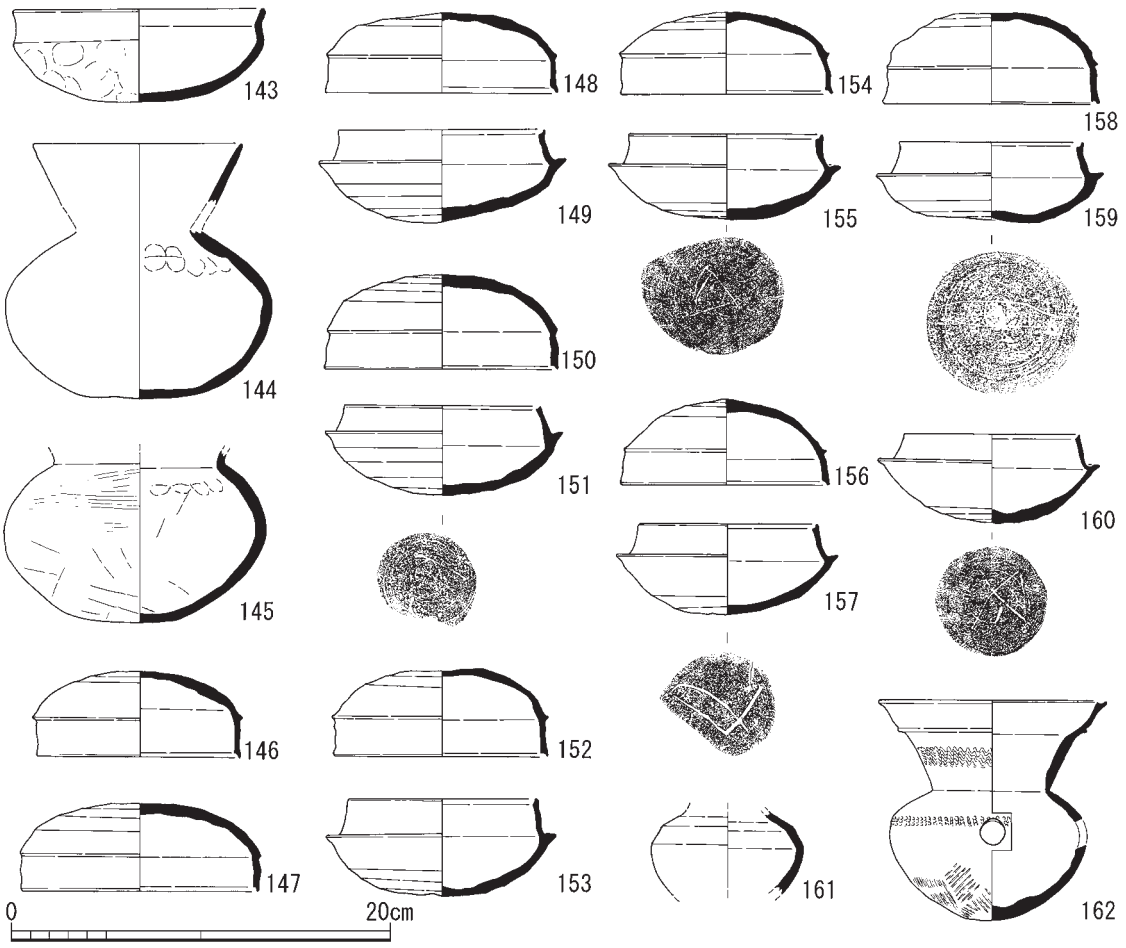
第42図　耕作溝群出土遺物実測図

溝ＳＤ67（第42図102）　102は土師質の擂鉢である。擂り目が３条見られる。

溝ＳＤ73（第42図96）　96は大和型瓦器椀である。

溝ＳＤ74（第42図99）　99は大和型瓦器椀である。

溝ＳＤ75（第42図103）　103は土師質の擂鉢片である。



第43図　古墳周溝出土遺物実測図

溝ＳＤ79（第42図93）　93は青磁椀の高台部分である。

溝ＳＤ84（第42図105）　105は瓦質擂鉢の底部である。

溝ＳＤ89（第42図100）　100は大和型瓦器椀である。

溝ＳＤ94（第42図101）　101は大和型瓦器椀である。

溝ＳＤ99（第42図97）　97は古瀬戸灰釉椀である。

溝ＳＤ105・108（第42図106 ～ 142）　106 ～ 127は土師器皿である。128 ～ 142は大和型瓦器椀である。

②古墳時代

溝ＳＤ120（第43図145）　145は土師器の壺胴部である。調整は外面下半部がケズリ、上半部がハケのちナデで、内面はケズリのちナデである。胎土には最大径が４mm程度の長石・石英・チャート・赤褐色斑粒を含み、色調は橙色（2.5YR7/6）である。

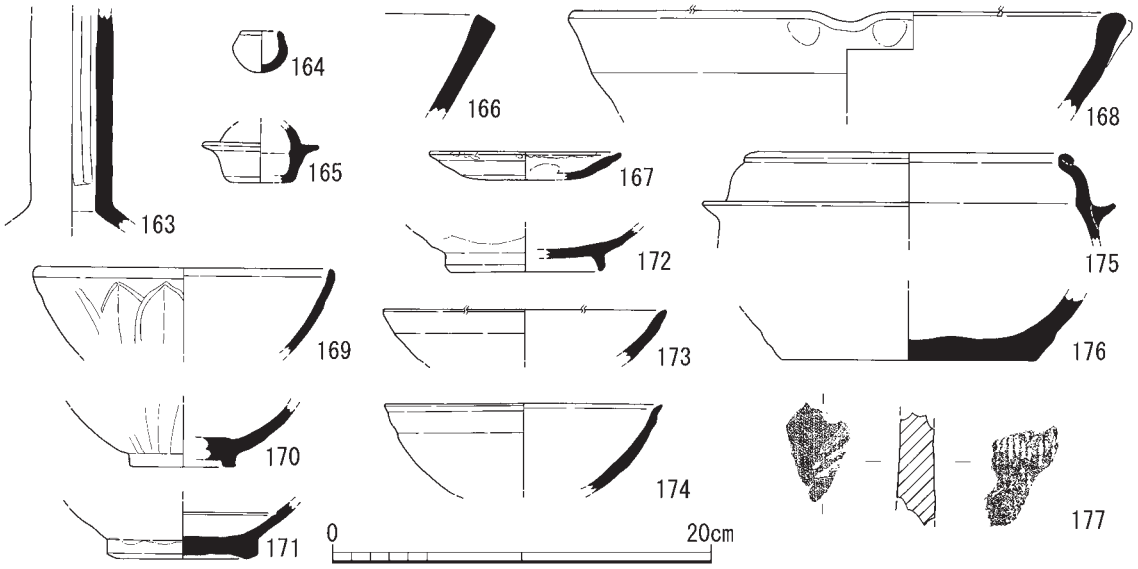
溝ＳＤ121（第43図144 ・146 ～ 162）　144は土師器の壺胴部である。内外面の調整は、表面の剝離のため不明である。胎土には最大径が３mm程度の長石･石英･チャート･赤褐色斑粒を含み、色調は橙色（2.5YR7/6）である。146は完全な形で出土した須恵器杯蓋である。口径は10.8cmである。147は須恵器杯蓋で159に被さるように大きな破片が覆った状態で検出された。口径は12.3cmである。148は149と口縁を合わせた状態で、正位置を保って出土した杯蓋である。杯身とは焼成

や胎土、受け部の大きさが異なるが、蓋としてかみ合うことは可能である。口径は12.3cmである。149は148と対になる須恵器杯身である。口径は10.6cmである。150は土器群中央部分から151と組み合わされた正位置の状態で発見された。151の受け部に対して口径が大きい。口径は12.5cmである。151は150と対になる杯身である。底部には横一文字の櫛描が施される。口径は10.4cmである。152は153と組み合わされた正位置の状態で発見された須恵器蓋である。153の受け部裾が152の口径よりも大きく、被せることは可能であるが、完全にはかみ合わない。口径は11.3cmである。153は須恵器杯身である。152と対をなす。154は155の下位に重なって口縁を上にした状況で出土した須恵器杯蓋である。口径は11.2cmである。155は154の上に重なって出土した須恵器杯身である。155の上には160の胴部が重なる。口径は9.7cmで、154の杯身蓋とは正しく組み合い、胎土・焼成も類似している。底部には３本の直線を交差させたヘラ描が施される。156は157と正位置で組み合わされた状態で出土した須恵器杯蓋である。口径は11.0cmである。157は156と対になる須恵器杯身で、底部外面には一筆によるヘラ描きが施される。口径は9.7cmである。158は159と組み合わされて、正位置の状態で置かれた須恵器蓋である。口径は11.5cmである。159は158と対をなす須恵器杯身である。底部外面には一筆でヘラ描きが施され、形状は157のものに似ている。口径は9.8cmである。160は正位置で出土した須恵器の杯身である。底部には「く」字状の線分と直線を組み合わせたヘラ描きが施されている。口径は9.3cmである。162は須恵器壺である。頸部外面には６条を単位とした櫛描波状文が施され、胴部肩には４個を１単位とする列点文が施文される。底部以外は回転横ナデ、底部はタタキの後、ナデ調整である。161は重機掘削時にＳＤ121検出面で出土した須恵器壺胴部である。１片の破片のみで他の破片は出土していない。

溝ＳＤ127（第43図143）　143は土師器の鉢である。口縁部は強い横ナデのため外反する。色調は橙色（2.5YR7/6）を呈し、直径２mm以下の長石・赤褐色斑粒・雲母を含む。

包含層出土土器（第44図163 ～ 177：縄文土器を除く）

163は弥生時代後期の高杯脚部である。この時期の遺物はこの脚部のみである。外面の調整は

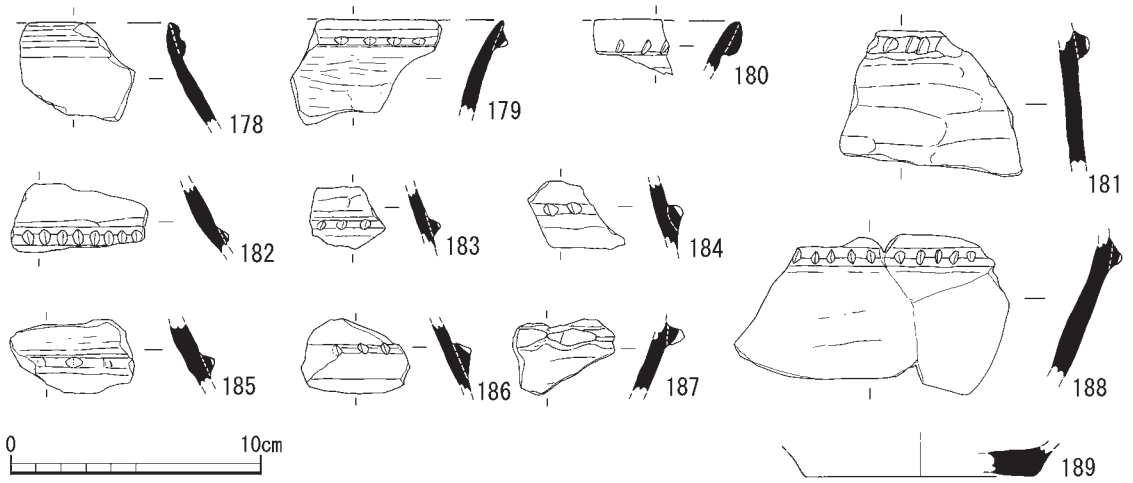


第44図　包含層出土遺物実測図

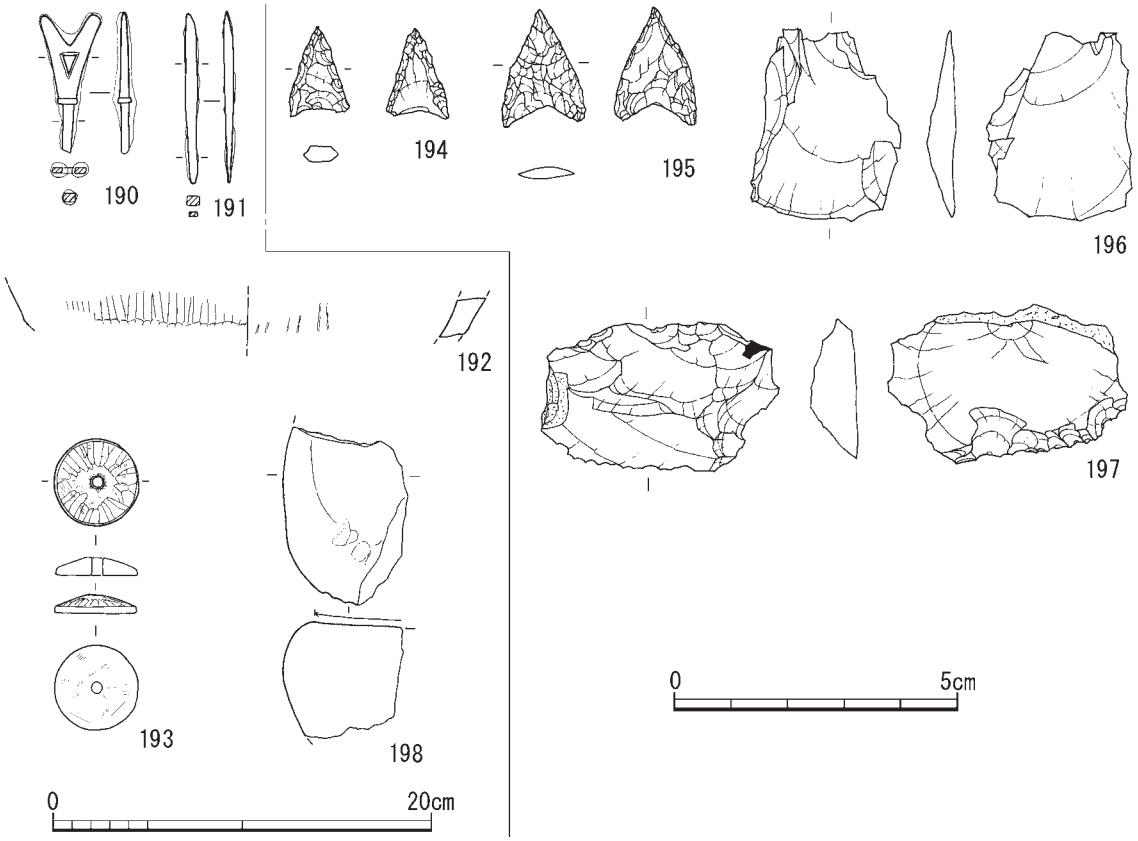
不明で、内面はケズリである。胎土には径４mm以下の石英・長石・雲母・チャート・赤色斑粒を含む。164は調査区東壁精査中に出土した土師質の手捏ねの鉢である。時期は不明であるが、胎土に目立った砂粒が含まれず、色調が中世の土師器皿と酷似している。165は土師質のミニチュア羽釜である。内外面ともにナデ調整で直径３mm以下の角張った長石・石英の砂粒を含む。166は瓦質の鉢口縁部である。14世紀以降の年代が与えれる。167は遺構精査中に出土した土師器皿である。口縁部には灯明皿として使用された痕跡が残る。168は遺構精査中に出土した信楽焼片口鉢である。14世紀の年代が与えられる。169は調査区北側の第１遺構面精査中に出土した龍泉窯系青磁椀の口縁部である。170は調査区の北部で重機掘削中に出土した龍泉窯系青磁椀の高台部である。171は重機掘削中に出土した白磁椀の底部である。172は灰釉陶器椀の底部である。体部外面にはツケガケによる施釉が施され、内面は釉薬が剝落する。見込み部分及び外面には施釉されない。10世紀前半に位置図けられる猿投折戸53号窯に併行するものと考えられる。173・174は古瀬戸灰釉椀の口縁部である。175は土師質の羽釜口縁部である。直径３mm以下の石英・長石・雲母を含む。176は信楽焼捏鉢または擂鉢の底部である。内面は使用によると考えられる摩滅のため平滑である。177は平瓦片である。

③縄文土器（第45図178 ～ 189）

178は古墳周溝ＳＤ127出土の縄文時代晩期の船橋式土器深鉢口縁部である。胎土には径３mm以下の石英・長石を含む。179は調査区北部の精査中に出土した縄文時代晩期の船橋式土器深鉢口縁部である。胎土には径３mm以下の石英・長石・赤色斑粒を含む。180は深鉢口縁部である。胎土には石英・長石・雲母・角閃石を含む。181は調査区北側重機掘削中に検出した、縄文時代晩期の船橋式土器深鉢胴部である。胎土には径４mm以下の石英・長石・雲母片を含む。182は188と同じ場所から出土した縄文時代晩期の船橋式土器深鉢胴部で、胎土には径４mm以下の石英・長石・雲母・角閃石を含む。183はＳＥ109埋土から出土した縄文時代晩期の船橋式土器深鉢胴部で、胎土には径３mm以下の石英・長石・雲母を含む。184は調査区の北部精査中に出土した縄文時代晩期の船橋式土器深鉢胴部で、胎土には径３mm以下の石英・長石・雲母・角閃石を含む。185はＳＥ109埋土から出土した縄文時代晩期の船橋式土器深鉢胴部で、胎土には径３mm



第45図　縄文土器実測図



第46図　鉄器・石器実測図

以下の石英・長石・雲母を含む。186は調査区の北部精査中に出土した縄文時代晩期の船橋式土器深鉢胴部で、胎土には径３mm以下の石英・長石・雲母を含む。明確な角閃石は認められないが他の角閃石を含む個体と色調は同じである。187はＳＤ127出土の縄文時代晩期船橋式土器の深鉢胴部で、胎土には径６mm以下の石英・長石・チャート・赤色斑粒を含む。188は調査区北部で出土した縄文時代晩期の船橋式土器深鉢胴部で、胎土には径６mm以下の石英・長石・雲母・角閃石を含む。189は縄文土器底部である。４土器（第39図）の部分から出土した。

④鉄器（第46図）　190は包含層出土の鉄鏃である。先端部が２つに分れた雁又形で、中央部には逆三角形の透かしが設けられる。全長7.9mm、最大幅3.2cmを測る。191は棒状の鉄製品で、中央部で太さが異なる。錆が深く及んでおり正確な形状は不明であるが、長頸鏃と考えられる。現存長９cm、幅0.7cm、厚さ0.5cmを測る。

⑤石器・石製品（第46図）　192はＳＤ105出土の滑石製石鍋の胴部である。内面は平滑に仕上げられているが、外面は鑿跡が残り、煤が付着する。193は古墳周溝ＳＤ129内から出土した滑石製紡錘車である。上面の傾斜部には削った痕が放射状に残される。

以下で述べるサヌカイト製石器はすべて古墳の周溝であるＳＤ127掘削中に出土した。194・195は包含層出土の平基無茎のサヌカイト製石鏃である。194は全長２cm、幅1.5cm、厚さ0.2cmで、195は全長1.5cm、幅1.1cm、厚さ0.3cmである。196・197は自然面打面から作り出された横長剝片の先端部を背面からの２次加工によって刃を付けたサヌカイト製の削器である。197は全長2.6cm、幅4.2cm、厚さ0.8cmを測る。196はサヌカイト製の剝片で腹・背面ともに打瘤の発達が

乏しく、打面部が線状であることから、両極打法による剝片と考えられる。全長3.3cm、幅2.5cm、厚さ0.4cmである。198は花崗岩製の石皿片である。使用された面は中心に近い部分に向ってくぼむように緩やかに彎曲し、平滑である。

４．小結

①調査区中央部分を中心に中世の耕作溝を多数検出した。出土遺物には瓦器椀や土師器などがあるが、いずれも小片で意図的に投棄された状況ではなかった。遺物は平安時代から14世紀までのものが含まれている。

溝には南北方向のものと東西方向のものが存在し、重複関係から南北方向のものが新しい。南北方向の溝には、その溝の向きから約2.7m間隔に対になって掘削されたことがわかる。こうした状況から、東西方向の溝もまた同じように作られたことが対になる溝の特徴から類推される。

溝はそれぞれ詳しく調査すると、鍬や鍬を打ち込んだ痕跡が底面に残され、人力による掘削であることがわかる。

②調査区南側で坪境溝を検出した。検出した最も古い溝は、12世紀末から13世紀初頭の供膳具を中心とする土器群が投棄された土砂で埋まっており、その上に１段階新しい遺物を含む溝が掘られていた。島畠部分にも溝が確認でき、洪水や人為的な土地の改変を受けても地割が踏襲されてきた様子が明らかになった。

③平安時代の10世紀中葉の大型掘立建物群が第９次調査地で発見されているが、今回の調査地では遺物を含め、同時代の遺構は検出できなかった。今回の調査地は大型の建物の近くに位置するにも関わらず、同時期の遺物が存在しないのは、調査区中央部に見られる地層の鞍部が洪水によって形成されたもので、それ以前の遺物や遺構を洗い流したためと考えられる。その時期に関しては14世紀以前ということしか判らない。

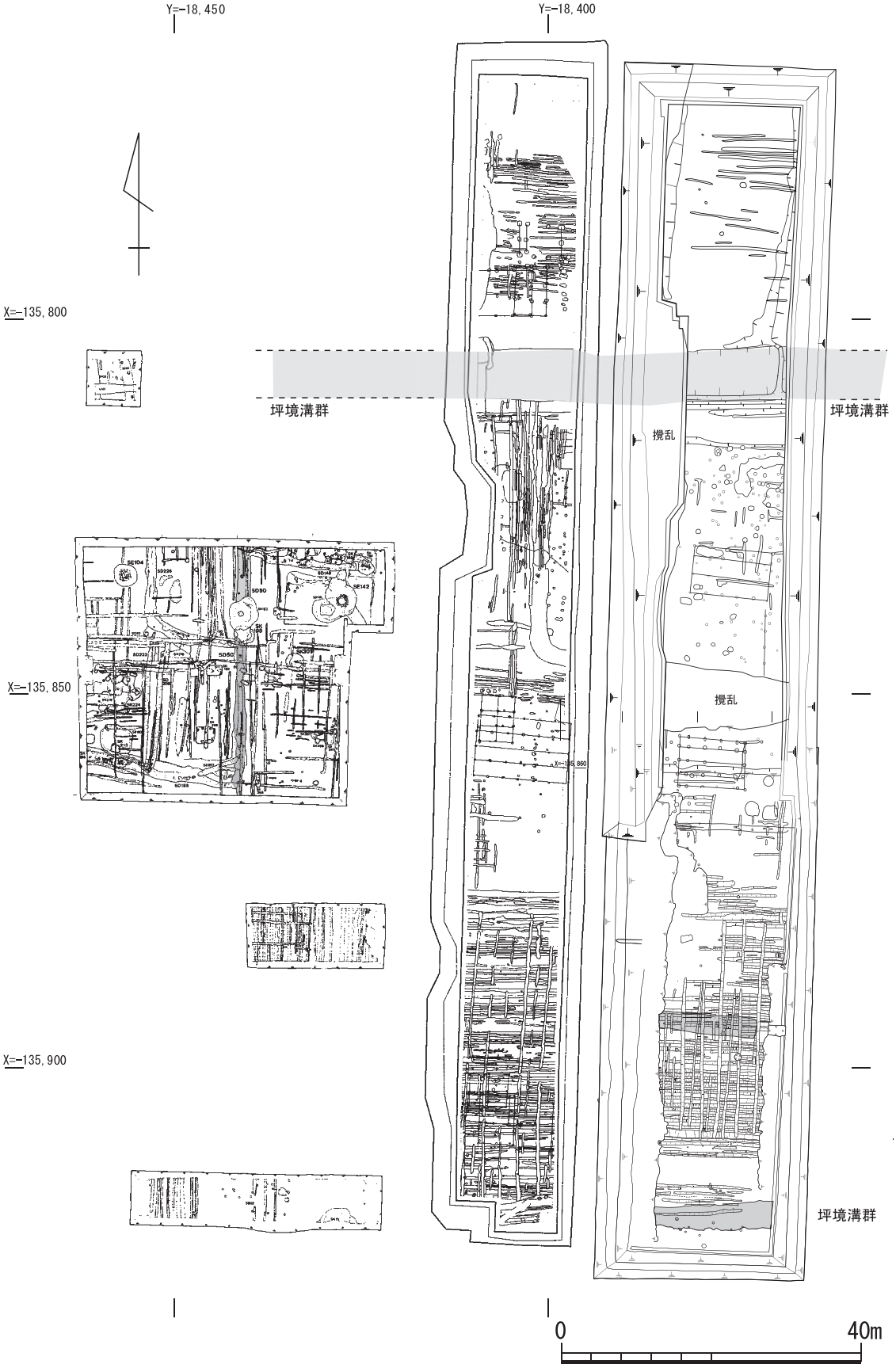
④古墳を３基検出したが、南に行くほどその残存状態が悪い。前述したように鞍部に向かうに従い、周溝の残存状態が悪くなることとなる。主体部はすでに削平のため残されていなかった。

⑤今回の調査では縄文時代の遺構は検出できなかったが、北側の第９次調査隣接地では、遺構検出可能な面が存在することが確認できた。

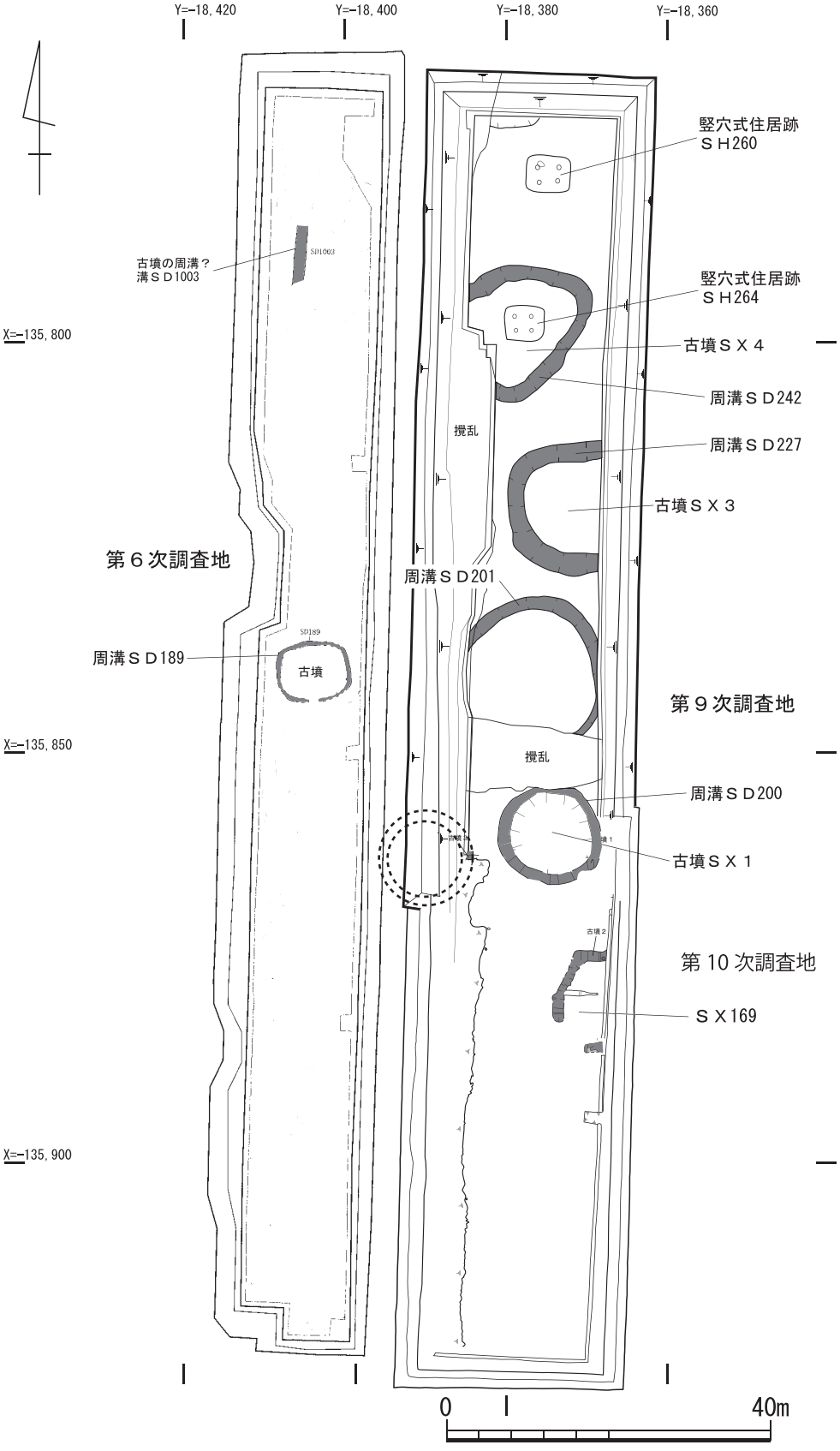
まとめ

第６次調査の報告でも述べられているように、木津川に隣接した当遺跡においては、洪水による削平や島畠造成による削平などによって、必ずしもかつて存在していた遺構が残されていない可能性もあるが、第９次調査と第10次調査および第６次調査、第４次調査の結果をもとに現在明らかになったことをまとめていきたい。

調査区内では縄文時代後期以前と考えられる土器片が出土している。第６次調査では不定形な落ち込みなどが検出されているが、明確な遺構は検出されていない。縄文時代の明確な遺構は第９次調査ＳＫ134・154・155のいずれも縄文時代晩期の土坑である。そのうち１つは土器棺墓と考えられる深鉢の単体の出土であり、墓域として利用されていたことがわかる。



第47図　第４・６・９・10次平安時代・中世遺構平面図



第48図　第６・９・10次古墳時代遺構平面図

弥生時代前期は、第６次調査で検出された弥生時代後期の遺物を出す溝ＳＤ1001の下層溝内から、前期中葉以後のものと考えられるヘラ描き沈線が施された甕の破片が出土している。第９次調査においても、同じ溝の西側延長部と考えられる溝ＳＤ265から弥生時代前期の貼り付け突帯を持つ壺の胴部などが出土しているが、いずれも中葉以後のものと考えられる。弥生時代前期の遺物は上記の溝に限定して出土している。土器量はいずれも極わずかで、小破片であることから集落からは離れているものと想定される。

弥生時代中期後葉の土器は、第６次調査ＳＤ1002で後期の土器と一緒に出土している。ＳＤ1001ではまとまった後期の土器が出土しており、完形もしくは大きな破片のものが多い。

古墳時代前期の竪穴式住居跡２棟が第９次調査で発見されている。他に類似した時期の遺構は存在していない。古墳時代中期末のＴＫ208 ～ 47併行期には古墳がつくられた。確実に古墳であると断定できるものは、第６次調査のＳＤ189で区画された古墳、第９次調査のＳＸ１～４、第10次調査のＳＤ120・121で区画された古墳の６基である。攪乱によって溝の一部しか残されていない第６次調査のＳＤ1003、同じく第10次調査のＳＤ129によってそれぞれ区画されている２基を加えると、８基の古墳群が形成されていたことになり、椋ノ木古墳群と命名された。その中でも第６次調査のＳＤ1003によって区画された古墳は、円筒埴輪・朝顔形埴輪を持っていたものと考えられる。また、第４次調査の５トレンチでは埴輪片が出土していることから、古墳群が北西方向に延びていたことが窺える。これらの古墳は木津川の自然堤防上に川とほぼ並行するように作られており、古墳ができた当時は、木津川の船中や対岸の地域からも眺められたものと考えられる。こうした立地からも木津川の水運に携わった人物の古墳であると考えられる。

古墳時代後期から平安時代前期までは、遺物が若干出土する場合もあるが、きわめて出土量が少なく、瓦などの遺物に偏っている。こうした白鳳期から奈良時代の瓦も中世の遺構または包含層中からの出土で、具体的な生活痕跡は認められない。

平安時代中期の10世紀中葉に、大型の掘立柱建物である第６次調査地のＳＢ01、第９次調査地のＳＢ１・２が建てられる。第６次調査地のＳＢ01は東西６間以上、南北２間の身舎に南北にそれぞれ庇の付く建物である。第９次調査のＳＢ１は、４間×５間の東西棟で４面に庇を持ち、第６次調査地のＳＢ01に向かって孫庇が延びる構造を持つ。この二つの建物は、北側の柱列を揃えて計画的に配置されている。

これらの掘立柱建物はいずれも北で東に４度程度振っており、この時期の建物の計画線が条里跡とわずかに異なっている。第10次調査で耕作溝群の下層で検出した溝ＳＤ115は同じ方位を示し、何らかの区画を窺わせるが、第６次調査では同じ位置で溝が存在しないため詳細は不明である。現存の畦は、椋ノ木遺跡周辺は東西方向の溝が東で北に４°振っており、平安時代の建物の振角と局所的に一致している。一方、これら建物は坪の1/2の場所から北側に展開しており条里を意識していたことも窺わせる。こうした整然と立てられた建物群は一般の集落とは考えられない。荘園を実効支配していた有力者の館として位置づけられるものと考えられる。

11世紀にはいると、２間×３間以下の小さな掘立柱建物が建てられるようになり、建物の方位

は真北を向き条里の地割と方向を同じくするようになる。

12世紀末には、10次調査で検出した坪境溝ＳＤ02が掘られており、12世末が現在のところ条里の起源を求める最古の遺構である。第６次調査では、詳細に北側の坪境溝が調査され、同じ場所での再掘削や、やや場所を移動した再掘削などが認められ、南側と異なり溝底面のレベルがあまり変わらない。これらの残された溝は14 ～ 15世紀のものである。掘削面の高さもそれほど変わらないと考えられることから、ＳＤ02と同じ時期の溝は再掘削のため破壊されたものと考えられる。条里の施工時期に関する情報をまとめると以下のようになる。

①条里は12世紀末には確実に存在する。

②11世紀の建物が地点が離れていても真南北の軸を持ち、条里地割と同じで条里施工がなされていた可能性は高い。

③10世紀中頃の建物が坪の1/2を意識していたとすれば、条里の施工がさらに遡ることも射程に入れる必要がある。

④13世紀後半には､井戸などの生活遺構が発見されるようになる。それに伴う建物については、同じ時期の柱穴は発見されているが、建物としてまとまらない。

⑤その後15世紀までの期間に、耕作溝群が作られ、こうした溝群が廃絶した後に島畠が作られた。

（中川和哉）

参考文献

森島康雄・伊賀高弘「椋ノ木遺跡平成７・８年度発掘調査概要」（『京都府遺跡調査概報』第81冊　（財）京都府埋蔵文化財調査研究センター）　1998

森島康雄「椋ノ木遺跡平成９年度発掘調査概要」（『京都府遺跡調査概報』第85冊　（財）京都府埋蔵文化財調査研究センター）　1998

藤井整・松尾史子「椋ノ木遺跡第４次発掘調査概要」（『京都府遺跡調査概報』第101冊　（財）京都府埋蔵文化財調査研究センター）　2001

河野一隆・近藤奈央「椋ノ木遺跡第５次発掘調査概要」（『京都府遺跡調査概報』第105冊　（財）京都府埋蔵文化財調査研究センター）　2002

森島康雄・石崎善久「椋ノ木遺跡第６次発掘調査概要」（『京都府遺跡調査概報』第110冊　（財）京都府埋蔵文化財調査研究センター）　2004

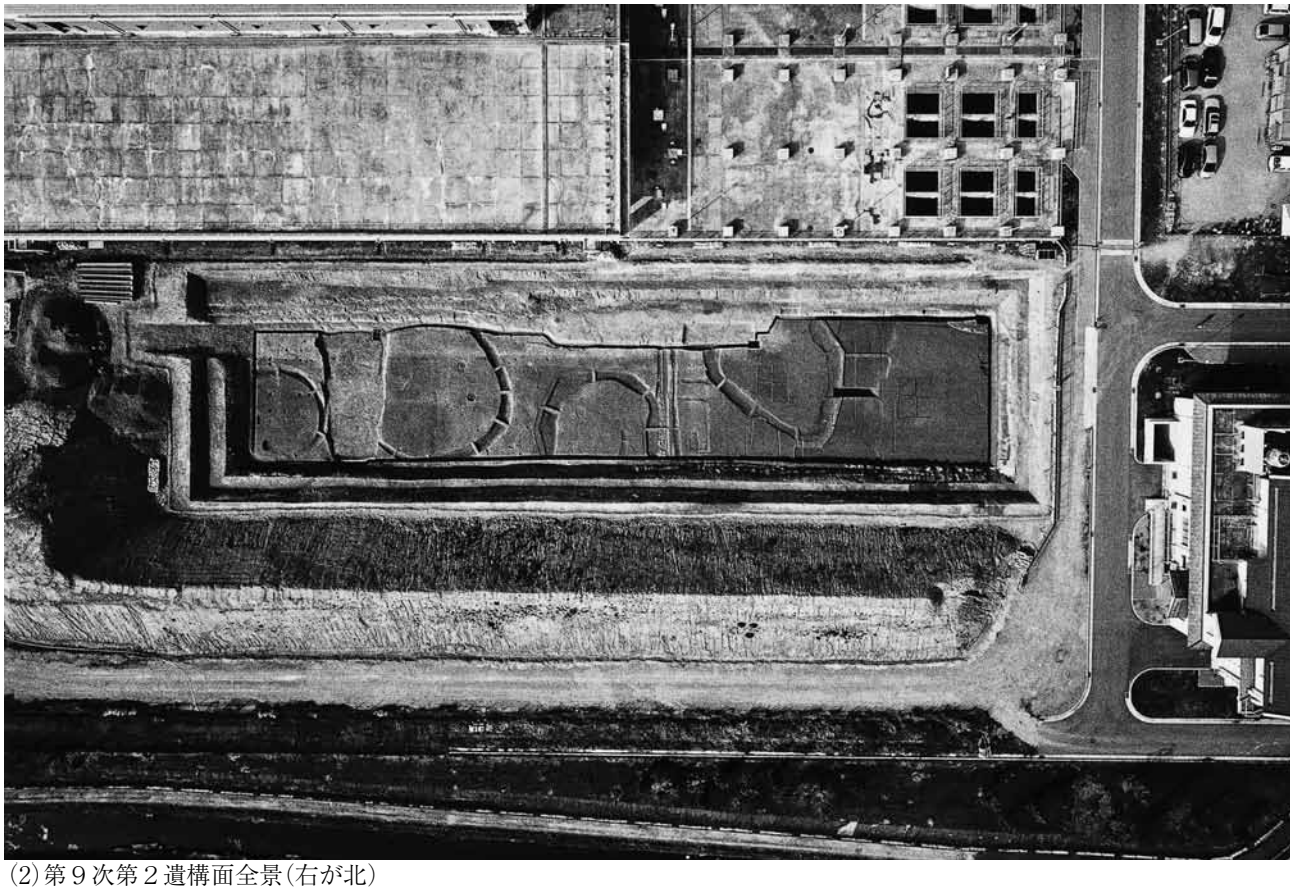
高野陽子「椋ノ木遺跡第７次発掘調査概要」（『京都府遺跡調査概報』第115冊　（財）京都府埋蔵文化財調査研究センター）　2005

村田和弘「椋ノ木遺跡第８次発掘調査報告」（『京都府遺跡調査報告集』第143冊　（財）京都府埋蔵文化財調査研究センター）　2011

精華町史編さん委員会編『精華町史　史料篇Ⅰ』精華町　1989

精華町史編さん委員会編『精華町史　本文篇』精華町　1996

(1)第９次第１遺構面全景(右が北)

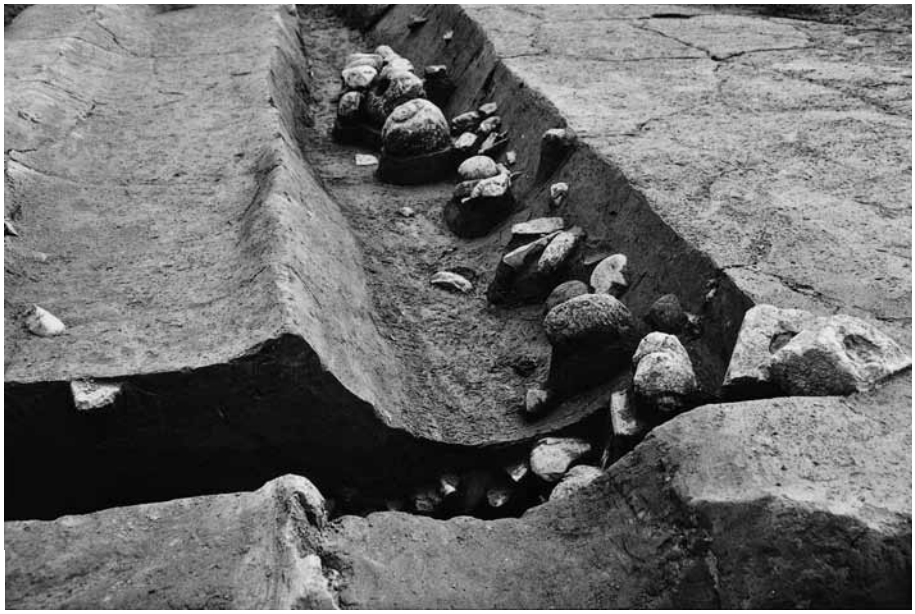


(2)第９次第２遺構面全景(右が北)

(1)第９次調査前(北東から)

(2)第９次第１遺構面北半部
遺構検出状況(南から)

(3)第９次坪境溝群ＳＤ095
(西から)



(1)第９次溝ＳＤ251五輪塔
出土状況(西から)

(2)第９次土坑ＳＫ042
遺物出土状況(北から)

(3)第９次土坑ＳＫ042
遺物出土状況(南から)

(1)第９次第１遺構面南半部
遺構検出状況(北から)

(2)第９次柱穴ＳＰ038
遺物出土状況(南から)

(3)第９次掘立柱建物跡
ＳＢ１検出状況(東から)

(1)第９次重機掘削
（第２遺構面まで、北西から）

(2)第９次第２遺構面遺構検出作業
（北西から）

(3)第９次古墳ＳＸ１全景
（南南東から）

(1)第９次古墳ＳＸ１周溝ＳＤ200
(南東部)遺物出土状況
(北西から)

(2)第９次古墳ＳＸ１周溝ＳＤ200
(西部)遺物出土状況(北から)

(3)第９次古墳ＳＸ１周溝ＳＤ200
(西部)遺物出土状況(東から)

(1)第９次古墳ＳＸ１周溝ＳＤ200
(北西部)遺物出土状況(南から)

(2)第９次古墳ＳＸ２全景
(南東から)

(3)第９次古墳ＳＸ２周溝ＳＤ201
(北東部)遺物出土状況
(北北西から)

(1)第９次古墳ＳＸ３全景
（南東から）

(2)第９次古墳ＳＸ４全景(東から)

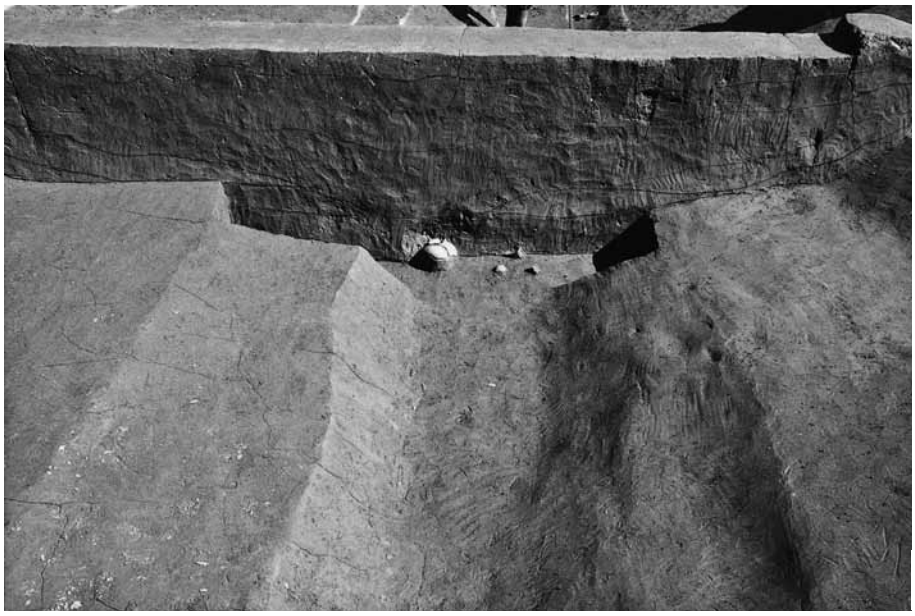
(3)第９次竪穴式住居跡ＳＨ260
全景(南から)

(1)第９次竪穴式住居跡ＳＨ260
遺物出土状況(南から)

(2)第９次竪穴式住居跡ＳＨ264
全景(北東から)

(3)第９次溝ＳＤ265全景
(北西から)

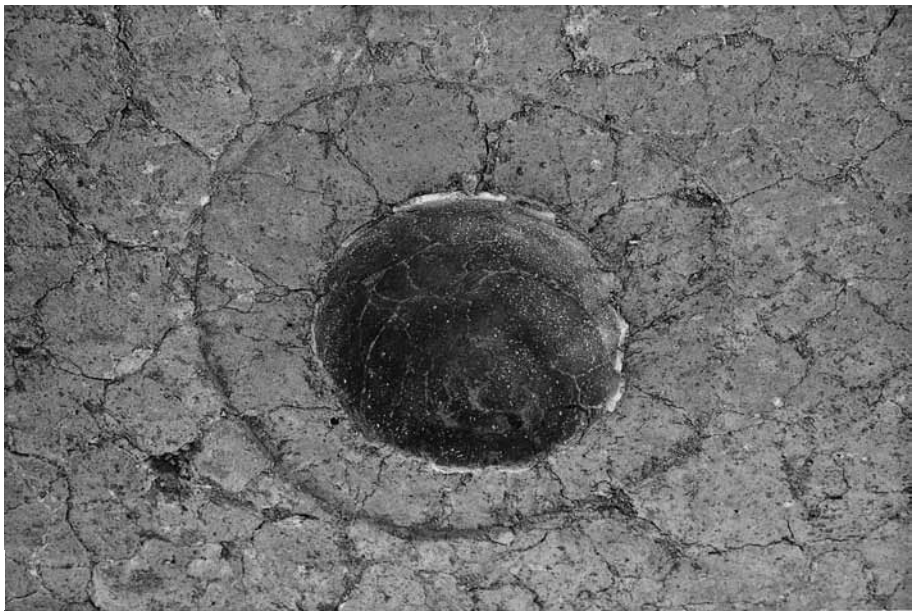
(1)第９次溝ＳＤ265全景(西から)



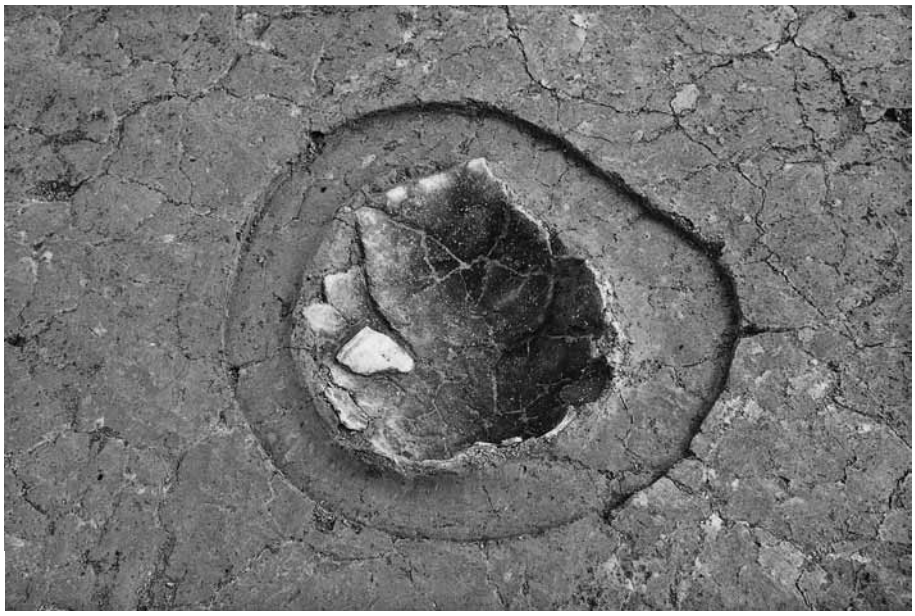
(2)第９次溝ＳＤ265土層断面①
(西から)

(3)第９次溝ＳＤ265土層断面②
(西から)

(1)第９次溝ＳＤ265遺物出土状況
（西から）



(2)第９次土坑ＳＫ154全景
（東から）



(3)第９次土坑ＳＫ155全景
（東から）

(1)第９次土坑ＳＫ134(上面)
(南東から)

(2)第９次土坑ＳＫ134(下面)
(北から)

(3)第９次第２遺構面全景(南から)

17

18

19

33

34

35

20

20

21

21

22

22

第９次出土遺物１

52

53

55

56

63

64

65

第９次出土遺物２

67

68

70

66

71

72

73

76

77

第９次出土遺物３

78

90

79

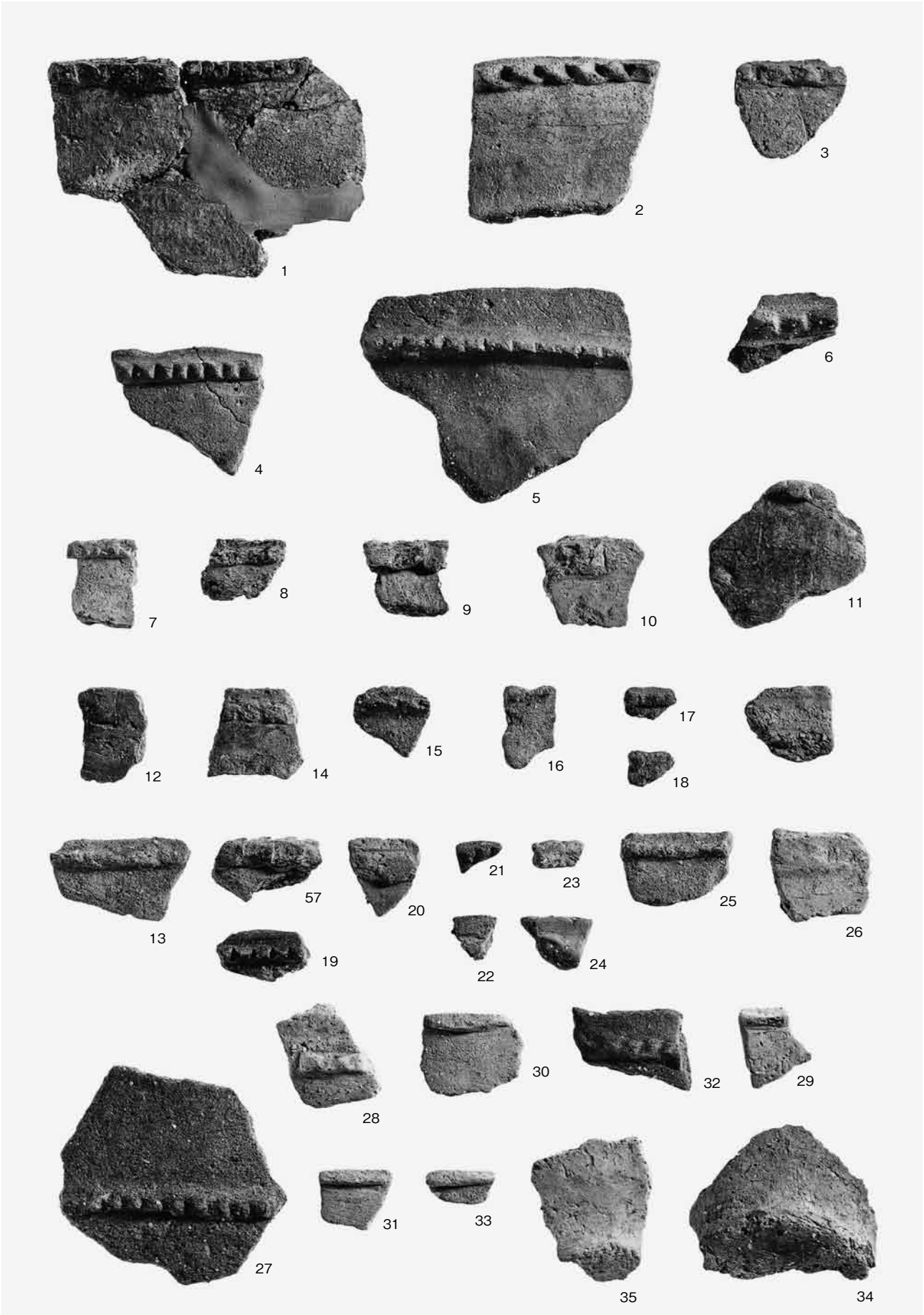
91

99

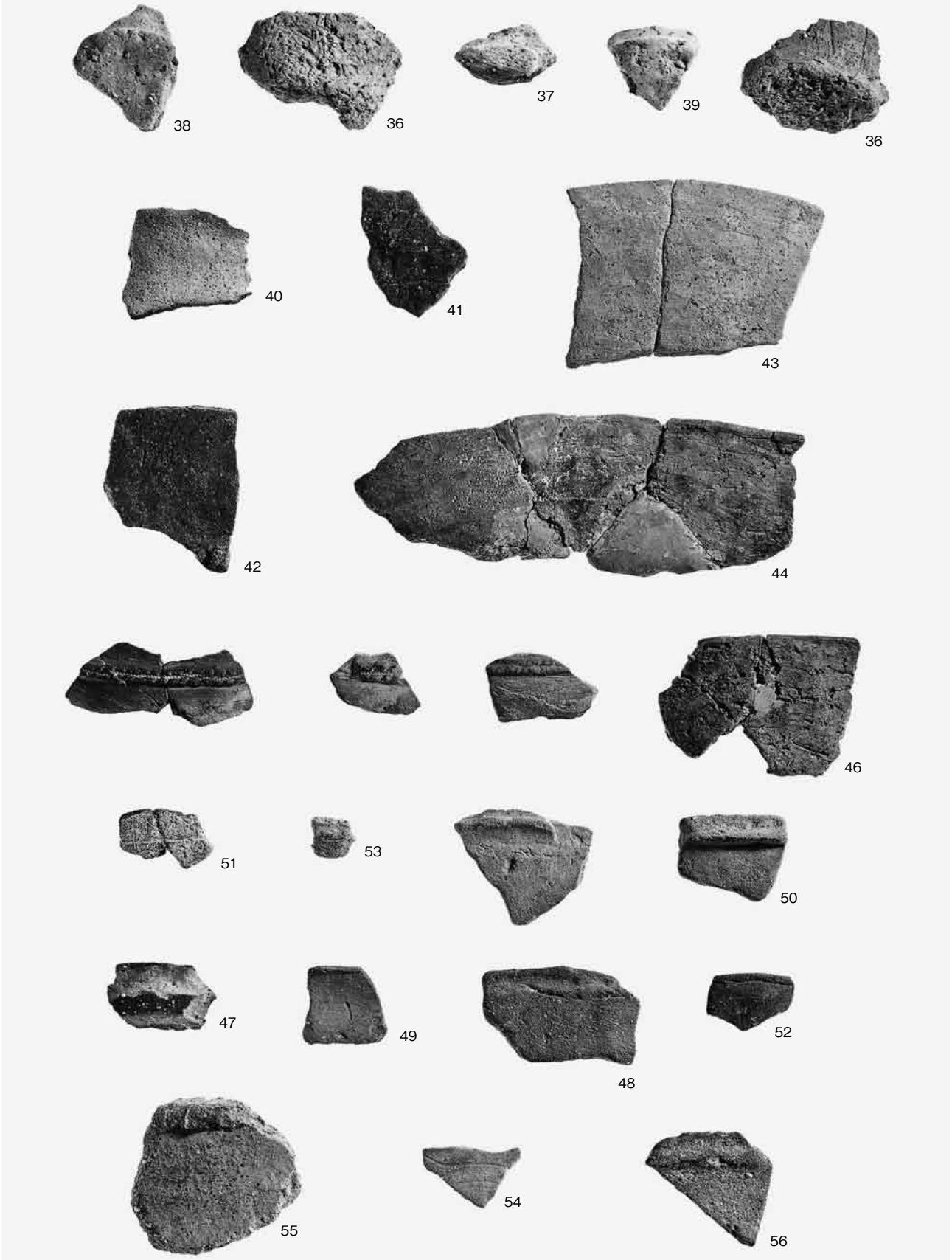
89

103

第９次出土遺物４



第９次出土遺物５（縄文土器）

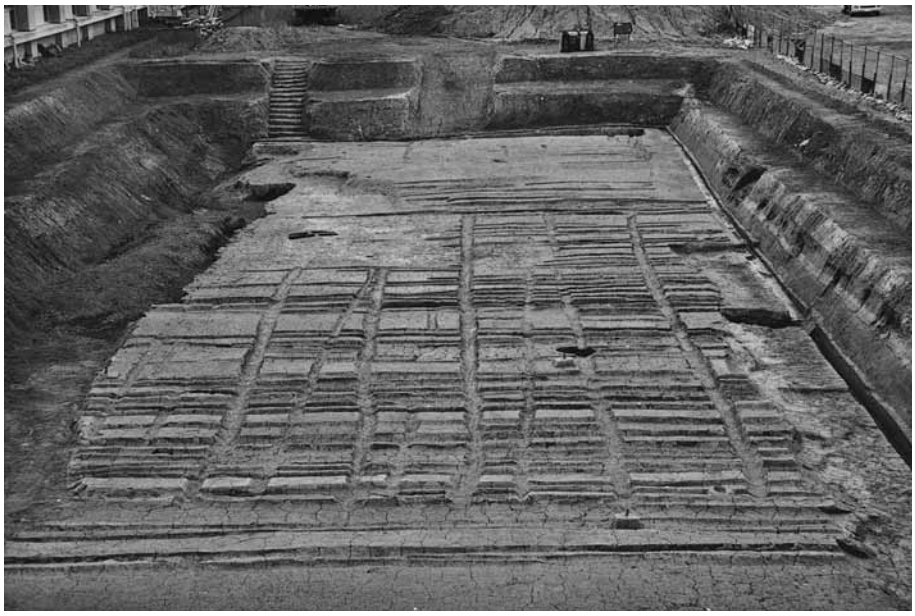


第９次出土遺物６（縄文土器）

第10次調査第１遺構面全景（南から）

第10次調査第２遺構面全景（上が南）

(1)第10次耕作溝群(西から)



(2)第10次耕作溝群(南から)

(3)第10次溝ＳＤ01(西から)

(1)第10次調査区北部井戸跡
（東から）

(2)第10次井戸ＳＥ116(南から)

(3)第10次柱穴ＳＰ113(西から)

(1)第10次柱穴ＳＰ113(西から)

(2)第10次柱穴ＳＰ122(西から)

(3)第10次土坑ＳＫ166(南から)

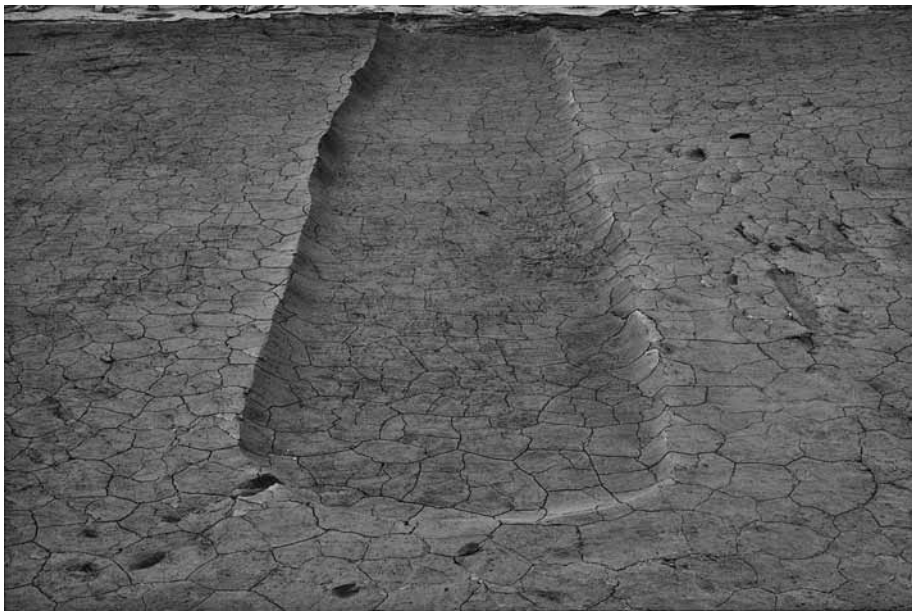
(1)第10次土坑ＳＫ130(西から)

(2)第10次土坑ＳＫ153(南から)

(3)第10次坪境溝ＳＤ02(東から)

(1)第10次坪境溝ＳＤ02断面
（西から）

(2)第10次坪境溝ＳＤ02断面
（西から）



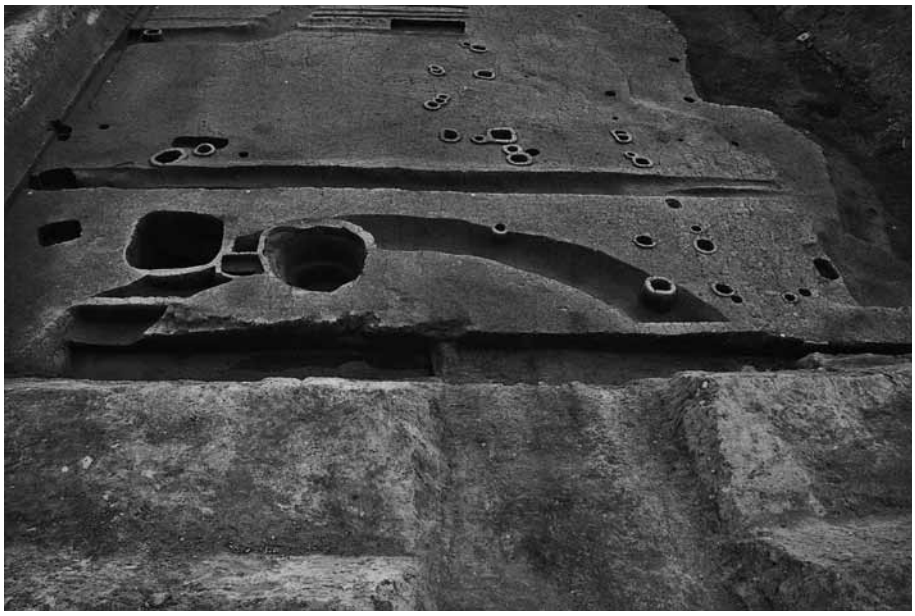
(3)第10次溝ＳＤ115(東から)

(1)第10次溝ＳＤ115(北から)

(2)第10次溝ＳＤ115断面(西から)

(3)第10次溝ＳＤ105・108
遺物出土状況(西から)

(1)第10次溝ＳＤ105・108断面
（東から）



(2)第10次古墳周溝ＳＤ127
（北から）

(3)第10次古墳周溝ＳＤ127
（東から）

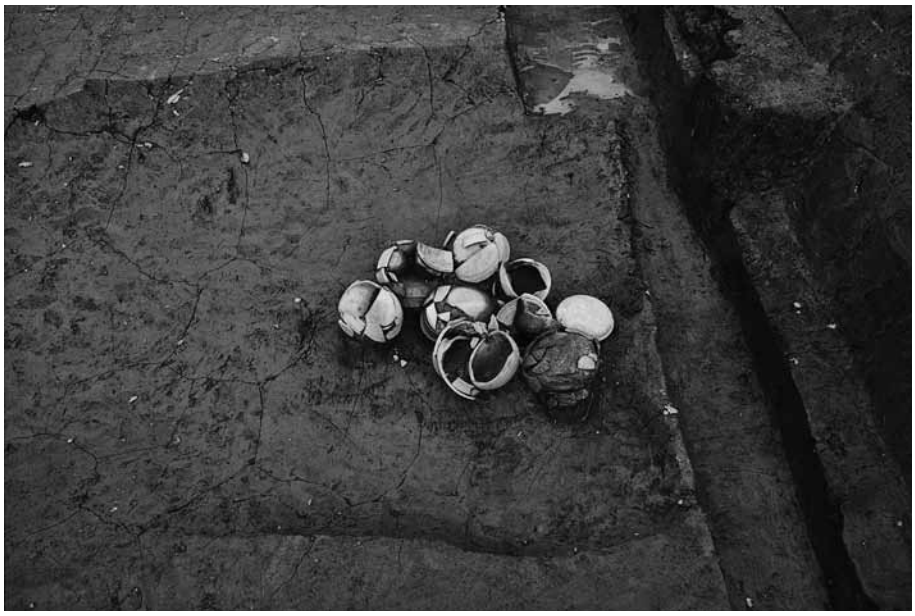
(1)第10次古墳周溝ＳＤ127内遺物
出土状況(南東から)

(2)第10次古墳周溝ＳＤ127断面
(東から)

(3)第10次古墳周溝ＳＤ120・121
(北東から)

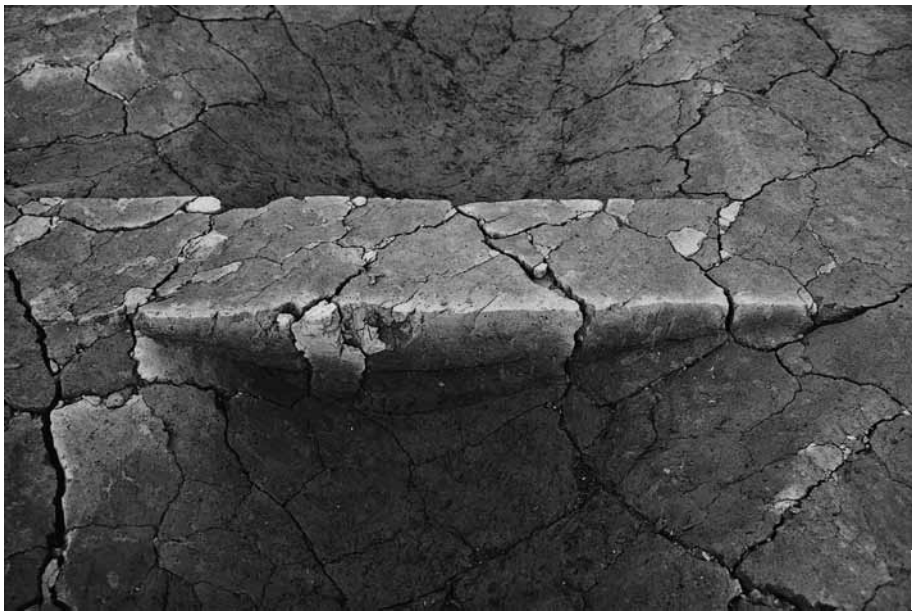
(1)第10次古墳周溝ＳＤ120・121
（西から）

(2)第10次古墳周溝ＳＤ121内遺物
出土状況(西から)

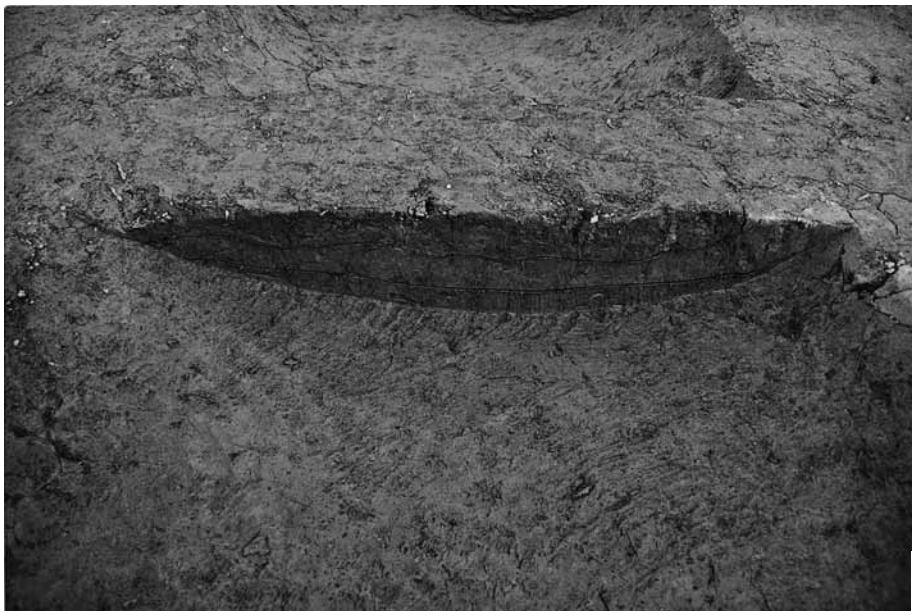


(3)第10次古墳周溝ＳＤ121内遺物
出土状況(南から)

(1)第10次古墳周溝ＳＤ120内遺物
出土状況(南西から)



(2)第10次古墳周溝ＳＤ120断面
(南西から)



(3)第10次古墳周溝ＳＤ120断面
(西から)

(1)第10次古墳周溝ＳＤ129内遺物出土状況(南から)

(2)第10次第２遺構面確認調査区(北から)

(3)第10次第２遺構面確認調査区断面(東から)

(1) 第10次第２遺構面確認調査区
断面焼土(西から)

(2) 第10次調査区南端土層確認用
サブトレンチ(西から)

(3) 第10次調査区北部縄文土器
出土状況(西から)

11

85

45

52

54

70

71

190

190

107

115

125

127

130

140

141

191

191

第10次出土遺物 1

143

144

150

145

151

156

154

157

155

162

193

第10次出土遺物２